紙切れ、その他

u_

紙切れ

　光りが近すぎる。必ず光りを覆っていたものが、ぶち破られて用を為さない。裸の光りなど、真面に受けるべきではない。だから先ず、横っ腹が裂けて、そこから水がどんどん逃げて行く。部屋の中の物が、どんどんなくなって行く。恐らくは、水に流されて行くのだろうが、ただ水の匂いに攫われて行くようでもある。水の匂いだけが、光りに太刀打ち出来て、光りを受ける程に奮い立ち、部屋中で渦を巻いているようではないか。光りは、人一人が体を丸めた程の大きさで、玉葱のような形をしている。掴み取ろうにも、擦り抜けてしまうような形だ。

　光りから顔を背けると、光りの方に真面に向けられた片方の耳が、光りに取

り込まれてしまった。光の中の、プップツと何かが弾けるような潰れるような小さな音が、耳に流れ込んだ。音は、耳の中で雫になり、それが目や鼻から垂れるのを、掌が受けた。それは、水の匂いとは違う匂いがした。或いは、光りの匂いかも知れない。それを裸の全身に塗り付けた。乾いた肌は、直ぐにそれを吸い取って、幾らでも肌に擦り込まれた。全身から影が追い払われ、肌は何処も艶々と輝くようだ。横っ腹は裂けたままだが、何時の間にか、水は途絶えていた。

　体を横たえたままなのに気付いた。立ち上がれるだろうか。仮に立ち上がれるとして、果たして立ち上がって良いものか。片耳だけでなく、全身を光りに取り込まれてしまわないか。水の匂いが少しずつ遠ざかって行く。独り、光りの間近に取り残される訳にもいかない。立ち上がろうとすると、体は、寝返りを打ちながら傾いて反り返り、それきり身動き取れなくなった。体は、細長い小舟のように、水の方へと滑り込んで行く。

　光りから遠ざかっている。光りの姿は見えないが、水の色が暗くなるので分かる。その内に、前後左右を、同じように水に流れる細長いものが囲んだ。それらと、これ見よがしに行列でもしているようだ。周りのそれらはやはり、部屋の中にあったものの共だろうか。見回すと、水の上で体がくるりと回った。周りのものの共が、一斉に、魚の形に白く輝いた。

水の流れが分かれ、一方はそこで堰き止められ、もう一方は、細くなって、ぐるりと急旋回して流れ続けた。魚達の姿は、全てその細い流れの方に、群れになって遠ざかった。堰き止められた水は、そこで溢れて、どんどん減っていった。水底が迫り上がるのが見えて来た。玉葱の形の光りが、その迫り上がる水底を何とかしようと急いで駆け付けるかのように、みるみる近付いて来る。そうして、間近で、光りの下半分が、水に浸かると、水底の迫り上がりは止まり、そこは小さな池になるようだったが、それが水の池なのか、光りの池なのかは、定かでない。

また、光の中の弾けるような潰れるような音が聞き取れるが、それは耳からでなく、体全体から伝わって来る。そのせいで、体は細切れになり、雫になって、池の縁から零れ落ちてゆく。いや、そのように零れ落ちてゆくのは、体ではなく、先程肌に塗り込んだ雫の剥がれたものではないか。体は、更に反り返って、輪のような形になって、池の中に沈んでいる。その池の中から、零れ落ちた雫が一列になって、魚の群の後を追っているのが見て取れた。池は干上がって、玉葱の形の光りも、随分と痩せ細って見えた。

水は尚も流れ続けて、魚の群れも、水の流れの先頭を追って泳ぐ。それはぐるりと巡って、またこちらに戻って来るようだった。痩せ細った光りは、そこに動かずに居るだけで、すっかり先回りしたのと同じだ。水は、黙っていても、

その光りへと流れて来る。そうして水が届くと、光りはまた太りだした。しかし、魚達は、光りを避け、水の外に出た。そうして水のない所を泳ぐ内、鱗が剥げて、鳥の羽が毟れたようになった。魚達は白い翼を生やし、鳥の形になって羽ばたく、羽ばたく程羽が毟れて、ザラザラした地面に体を擦り付けるだけだ。それでも彼らは、群れのまま、或る一つの方向に進もうとしていた。

水の崩れる音が一度だけして、池の中の輪のようなままの体は、水と一緒に池から抛り出され、大きな水玉の中に閉じ込められて、その水玉に溶けたかのようにし、姿を晦ました。ただ、輪のようなせいで、巧い具合に、水玉の中に、身を隠せただけかも知れない。流れ込む水を全て呑み込んだ玉葱の形の光りが、鳥の形の群れの後を追って行くのが見えた。光りは、その群れを易々と追い越して、闇の中をグングン昇って行った。それに連れて、その光りを取り囲む闇が、あらゆる方向に拡がってゆく。しかし、光りを追う鳥の形の群れは、決して闇には入れて貰えないようだし、その遥か後ろの水玉など、全くその闇とは切り離された所にある。水玉の何処を見ても、ただ透き通っているだけで、影はない。玉葱の形の光りが、遂に闇の中に消えても、何も変わりはなかった。鳥のような形のものの共は、それより前に、すっかり擦り切れて消えていて、そこに、水の流れたような跡だけが引かれている。そこへと流れ込もうとするのか、水玉が崩れた。痩せ細った裸の体だけが、残った。

体は、ブルブル震えながら、丸くなって横になっていたが、急に、何かの匂いを嗅ぎ取ろうとするかのように、立ち上がり掛けた。闇の拡がりの向こうに、玉葱の形の光りが、小さいながらもはっきりと見えた。それは、自らの一部を千切っては、周りに投げ散らかしていた。痩せた体も、そのようにして、自らを、次々に投げ散らかしてゆく。そうして、体はすっかり細切れになって、その辺りに散らばって寒さで凍ったが、光りの玉葱の形は、ずっとそのままで、自ら投げ散らかした光りの中心で、丸々と輝いていた。（二〇〇二年三月一日）

* * *

解決

道が塞がれた。どのような道だったのか。塞がれてしまっては、分からない。しかし、それが塞がれてみてから、そこに道があると分かったのなら、その塞がれた所からしか、道については分かりようがない。そうして、その道が一本しかなく取り替えが利かないのは、分かっている。どうして道が塞がれたかも、おおよそは分かる。道が通じるのを妨げるものが、そこに入り込んだからだ。それが、道を道でなくなるまでに、圧し潰すようにして、すっかり歪めてしま

った。それを取り除かない限り、道は元に戻らない。

　その入り込んだものだが、どうもはっきりしない。ただ、見当は付く。一つは、道に入り込んで、内側から壊そうとするものだ。もう一つは、その壊そうとするものを追い払おうとして、実はまだ壊れていないのに、外側から壊してしまうものだ。そのどちらか一方が、決定的な役割を果たしたようでもあり、その両方が係わり合って初めて、道が塞がれたようでもある。しかし、はっきりさせたところで、それを取り除けるだろうか。壊れた道が直せるだろうか。そこはもう道ではないのだから、そこに近付くまでの道が分かっても、そこには行き着けない。もし間違って行き着けてしまったら、戻って来られない。

　あるとも分からなかった程、あって当たり前の道が塞がれたからには、今や、その復元に全てが掛かっている。猶予はない。行き着けなくても、戻って来られなくても、兎に角、そこに向かって、何か働き掛けをするしかない。放って置くよりは増しだ。それとも、どんな働き掛けも、愈愈道を塞ぐだけで、放って置くのが一番増しか。いや、やはり、それを確かめるためにも、何かするべきだ。と言って、何が出来るか。そこに近付くまでの道にしても、何がその道を通れて、何が通れないかも、分からないざまだ。

　塞がれたその先は、もっと分からない。目が届かないだけ、恐れは募る。その先もまた道なのか、それとも、道は終わり、別の何ものかが始まるのか。い

ずれにしろ、そこへ通じる道と切り離されてしまえば、一切の動きが止まってしまうか、あるだけのものがその更に先へと消えて、空っぽになってしまったか、どちらかで、どちらにしろ、そこを害するのは同じだ。

　それとも、害されるにしろ、そこがどのようにか変わってゆくなら、その事に縋るのはどうか。そこが、道を必要としなくなるまでに変わり果てれば、塞がれた道は、道ですらなくなる。また別の道が、或いは、道ではない何かが、時に応じて求められれば済む。そうして、そこからまた、全てが当たり前に動き出す。いや、それで済むなら、道が幾ら塞がれようと構わない事になる。その道は一本しかなく、仮にそれが塞がれたまま、一切の物事の有りようが変わり、道だけが取り残されたにしても、その塞がれたままでは、何処にも行けないのは明らかだ。取り替えが利かないとは、そう言う事だ。そして、それ程の道ならば、どうこう手立てを講じたところで、それらはどれも、その場限りの思い付きの浅知恵でしかないのではないか。その道にだけ知れるその道の姿が導き出され、その改めて切り開かれて行くのでも、待つしかなさそうだ。時が許すなら、それが正しい答えかも知れないが、ない物ねだりに過ぎない。

　つまり、道が塞がって、何よりも時が失われている。それなら、塞がったのは、時を通じさせるための道だろうか。そして、それがどうにもならないなら、「全て時が解決する」などと言うのは嘘だ。時は時を解決出来ない。では、何

なら解決出来るのか。一旦、時を捨てて、それから、塞がった道を通すために出来る事などあるだろうか。何か突拍子もない事でも始めるしかない。それこそ思い付きにも劣るが、元々、そのような者だったのかも知れない。そのように自らを分かっただけでも、何処かで道が通じるようではないか。尤も、そんな理屈もまた、思い付きでしかない。それとも、塞がれた道も、通じなくなった時も、同じように思い付きだろうか。思い付きにも劣る者が考えるのだから、それも大いにあり得る。

　と言って、何がどうなるものでもない。道は相変わらず塞がれていて、それを直すための時はなく、何処へ行く事も出来ない。道は、塞がれるためにだけにあって、時が来て、それをちゃんと見て取れる道の真正面に、ずっと座らされていただけのような気もする。それならそれで、全ては順調な訳で、それもまた思い付きであるにしても、それだけの事なのだから、それでいいのかも知れない。と言って、やはり、何がどうなるものでもないし、堂々巡りなど暇人のやる事で、やはり時が許してはくれない。

　そうしている内に、取り替えの利かない道も、もう要らなくなったようだ。或いは、塞がっていた道が通じて、また、そこに道があるとは分からなくなっただけかも知れない。ただ、それでもまだ、何処にも行けないとなれば、そこで塞がっているのは、何処かに行こうとしている者自身だろうか。それとも、

そこに道があると分からなくなれば、何処にも行けなくなるのは当たり前で、道はそのようにして、初めからずっと塞がれていたのか。それなら、時は、それなりにたっぷりとあった訳だ。（二〇〇二年三月三日）

＊　　＊　　＊

まさぐる

部屋の中で、膝を突いて、その膝を突いた辺りをまさぐるようにして、私は何かを探している。膝を突いて、分厚い石の壁に開けられた四角い窓からは、遥か下に拡がる景色が見下ろされる。分厚い石の壁に開けられた四角い窓からは、遥か下に拡がる景色が見下ろされる。床は、元々なかったか、すっかり腐って土に還ってしまったかで、そこは、じめじめした黒く柔らかい地面で、その中に、白い石粒や小さな獣の骨のようなものが混じっている。私の指は、その土で黒く汚れている。そんな所に、一体何を探すのか。ただ、土をいじっているだけではないか。しかし、手を止めずに、部屋中を這い回り、土をまさぐり続けた。部屋は狭くて、四方の石の壁の何処にも出口はなかった。一つだけある窓からの眺めも、余りに遠く低すぎて、もし窓を跨いで外に出ても、そこから真下へ何十メートルも飛び降りるような事になりそうだった。

土から何かを探すのをやめたら、後は、窓から飛び降りるしかない。何もない部屋で、他に出来る事はなく、その出来る事を何時までもしないでいるのは無理だ。それで、土から手を離せずにいるのか。しかし、飛び降りたところで、今更何を失う訳でもない。こうしていても、何かが見付からない限り、何事も起こらないまま、いずれはここで土に還る。水も食い物もないし、そう先の事ではない。寧ろ飛び降りた方が、生き延びられそうではないか。窓の下は、案外緩やかな斜面で、そこを転げ落ちた先には、ひょっとして水や食い物があるかも知れない。しかし、そうしようとは思わない。どうやら私は、兎に角、何かを探したいのであって、生き延びたい訳ではなさそうだ。

　地面は、もう疾っくに、私の手の跡で覆い尽くされている。何度も同じ所をまさぐり直した。土の表面をいじるだけでなく、爪を立てて土を掘り返してみるべきかも知れないが、却って、探しているものから遠ざかってしまうようで、躊躇われた。探しているものが、その掘った穴に吸い込まれて、消えてしまわないか。そんな事になったら、何もかも台なしだ。寧ろ、私の手が辿った跡を、しっかり見直すべきだ。その土の凹凸や色艶の中にこそ、手掛かりを求めるべきだ。

　そうだとしたら、探しているものは、もう見付かっているのかも知れない。この手に触れられる土を、長らく私は求めて来て、今やその手に触れる中に、

私が探り取れるものは、全て含まれているのではないか。後はただ、ずっとこの部屋に居て、私の指で撫でられる土の姿を眺め回して、見付かったものから目を離さずにいるしかないのではないか。それとも、その土の表面に、何か別のものの姿が浮かび上がるのを、待ち望んでいるのだろうか。そのようなものを私に見せる力が、この部屋の土に備わっていると信じでもして、その力を引き出そうと、土いじりに励んでいるのか。もしそれで、そこに何かの姿がありありと浮かんだとして、それで私に、どんな喜びが訪れるだろう。寧ろ、その見えてしまったものから、目を逸らしたくもなりそうだ。何しろそれは、私に他の事を全て諦めさせ、私をこのような部屋にまで引っ張り込んだ、大元だからだ。そんなものの姿を見せ付けられて、私に何が残るのか。それとも、それが第一歩で、目を逸らしたくなるのを我慢してそれと向き合い、その乗り越えた先に、その何かの姿を抱き締められる喜びが、待っているのだろうか。

　そんな事でも考えていなければ、もう続けられない。指先は、冷たくなって、土を擦るたびに痛みさえ覚える。もういい加減にケリを付けたい。一度土から手を放したところで、土が消えてなくなる訳でもないだろう。私は、ひと思いに立ち上がって、天井を見上げた。そうして初めて見えてくるのだが、天井は、壁に比べてずっと黒っぽく、しかもゴツゴツしている。その凹凸や色艶の方が、

土よりずっと見栄えがして、私の目を惹き付ける。探しているものは、その天井辺りの空気の中にでもあるようだ。実際、そこだけ空気は灰色に見える。その窓は開いているが、風はない。天井の空気は、ずっとそこに留まっているに違いない。私は、両腕を振り上げては振り下ろし、風の流れを作ろうとした。しかし、腕を思い切り振り上げても、窓の上縁より幾らか低くて、天井に淀んだ空気まで、風は届かないようだ。ただ、天井の中の一番窪んだ辺りから、黒い粉が微かに零れ落ちるのが見えた。

　私は、そこを見詰めたまま、また膝を地面に突いて、両手で土を一掻きずつ掬い取って、掌で固めて団子を作り、それを天井に投げ付けた。窪みの粉の零れる辺りは外したが、掌で固める内に土に粘りが出たのか、土の団子は、天井にぺったりと張り付いた。その表面は、張り付いても細かく震え続け、色艶を微妙に変化させるようだった。私は、夢中になって、次々に団子を固めては、天井に投げ付けた。そうして、天井は、すっかり黒い土で覆われ、その分、灰色の空気が下に押されて来るのが、見て取れた。それは、窓から外に逃げる事もなく、部屋の四角い形のまま、沈んで来る。

　掻き取れる土は全て、天井に投げ上げて、張り付けてしまった。その下に剥き出された地面は、石のように硬くて、白っぽかった。私は、天井に淀んでいた空気を吸おうと、立ち上がった。しかし、天井が低くなった分、地面も低く

なっていて、空気との隔たりは変わらないままなのだ。そうして、為すすべなく天井を見詰めていると、天井の土全体が、息をするように震え、そこの灰色の空気を吸って、そのまま土の中に取り込んでいるように見えてくる。そうして、土の中で、その空気は、一ヶ所に押し込められるように一纏まりにされていないだろうか。土の表面が、グルグルと歪に波打って、その凹凸の具合からして、どうしても、そのように見えてしまう。

　その凹凸は大きくなる一方で、その動きの激しさからして、何時、黒い土が丸ごと落ちてきてもおかしくない。その時に備え、私は、その土の中に閉じ込められている空気を抱き止めようと、身構えた。そうして、揺れ動く天井の土を見詰める内に、船酔いでもしたように目が回りだした。足がふらついて、天井の何処を見ているのかも定かでなくなる。黒い土が丸ごと降ってきて、体ごと埋まってしまう。改めて見直すと、土はまだまだ天井で波打つままだ。また、土で埋まって、波打つ土を見上げる。その繰り返される中で、私は、土の中で、空気で出来た透明な人の形を、何度も何度も抱き留めた。更には、私の方が、その透明な人の姿で、その私が、誰かに抱き締められているようでもあった。そうなるともう、黒い土は、天井ではなくて、部屋の真ん中辺りで、宙に浮いて波打っていた。それは、柔らかな揺籃のようで、その中が狭くて、それで誰かに抱き締められているように感じられるだけかも知れない。その中でまた、

私は私に戻って、揺籃がひっくり返らないように、透明な人の姿を抱き留めなければならなかった。しかしそれは巧く行かず、土の揺籃から転げ出された私は、また独りで波打つ土を見上げて、目を回した。

　その出入りの激しい動きから、気が付くと抛り出されていて、目の前は冷たく真っ暗で、動いているものはなかった。土の匂いが、抜けるように鼻を突く。土は、口の中まで入り込んでいるようで、上の歯と下の歯を噛み合わせる事も出来ない。それでも、また人の姿を探り取って、出来ればそれを抱き寄せようと、無理にも腕や脚を動かした。

　背中から尻に掛けて、冷たい風が撫でて行く。身震いして身を仰け反らせた。私は、柔らかい黒い土の上で、俯せになって、ゴリゴリと顔を土に埋めていたのだった。慌てて口の中の土を吐いて、立ち上がった。天井は、明るくて平らで白っぽかった。窓から入って来るひんやりした風は、強くて已みそうにない。天井に淀んでいた空気は、疾っくに吹き払われている。私は、窓を跨いで、宙に向かって飛び降りた。それを、透明な人の姿が、窓の縁に半分身を隠して、そっと覗くように、見下ろすようだ。探していたものが見付かったのかも知れない。何時までも落ちて行く私は、ずっと仰向けで、両腕を真上に伸ばすと、その見付かったものを抱き寄せる振りに見えた。指の土の汚れはすっかり落ちていて、指先から透き通って、空気の中に溶けて行くようだった。（二〇〇二

年三月五日)

*　　　*　　　*

根茎

何もない所なのに、どうしてか、示し合わせたように、人が集まって来る。皆、別々の方向から、落ち着いた静かな足取りで、独りで歩いてくる。互いに警戒し合う事もないが、不機嫌そうな顔を晒し合うだけで、挨拶もしない。その中の一人が、隣り合って歩く者に、何処から来たか尋ねた。尋ねられた方は、急流のそこだけ緩やかになった所に出来た中州に、子供の時からずっと独りで住んでいたと、答えた。更に、一番古い記憶を尋ねられると、その者は、痩せた男と女が身を寄せ合って急流を歩いて遡ってゆく姿を、思い浮かべた。それを答えようとすると、尋ねた者は、隣から居なくなっていた。その姿を探すと、少し離れた所に直ぐに見付かったが、しゃがみ込んで、黙って荷物を解いていた。

その内に、全員で車座になって、或る問題について語り合うべきだと主張する者達と、それを拒む者達の、二つに分かれた。全員でなければ意味がないと

いう事で、結局、車座の件は沙汰止みとなった。分かれた者達は、また直に混ざり合った。円く小高く盛り上がった所があって、他の者達はそこを避けたが、若い男が一人だけ、その一番高い真ん中まで進んだ。他の者達は、全員で、その盛り上がった所を取り囲んだ。その内の一人が、その盛り上がった所の向かい側まで聞こえるように、大声を張り上げて、早急に解決すべき問題について語り出した。他の者達もそれに応じて、銘々に声を上げた。段々とそれらは叫び声のようになって、全て、真ん中の若い男に向けられた。一人だけ黙り込むその男は、篭から長い紐を取り出して、自分の首にきつく巻き付けた。紐が首に食い込んで、男は息が出来ないようで、赤くなった顔を歪ませた。両手は紐を引っ張っていて塞がっているので、足で地面を蹴って、小さな穴を掘り、土の中なら息が出来るとでも考えるのか、そこに逆様に首を突っ込んだ。

　冷たい澄んだ水が、遠くからゆっくりと流れてきて、辺りは段々と川になった。小高く盛り上がった所だけが中州になって、そこを取り囲んでいた者達は、一人残らず、水に流された。男は、更に強く両手の紐を引っ張って、自らの首を断ち切った。それから、首のない体を起こし、肩の上に篭を乗せると、篭の仮面を被るようだった。それで何の不都合もないので、男は中州を歩き回った。流れは急で、そこに一歩でも踏み込めば、足を取られて流されそうだった。首を切った紐の先を輪にして、思い切り遠くへ投げた。それは、川の向こう岸の

草叢に届いて、輪に入った草が束ねられ、紐はそこで固定された。男は、紐を手繰りながら、川を渡ろうとした。水が胸まで来ると、流された筈の者達の腕が、水の中で男の体に纏わり付いてきた。腕はどれも紐のように細く、男の腕や脚や胴体の肉の一部に巻き付いて、きつく締め付けてくる。その内に、腕や脚や胴体の肉の一部は、紐が首を断ち切ったように、次々に纏わり付く腕によって、切り取られていった。川を渡り切ると、男の体は、すっかりなくなってしまったようだ。

　被っていた篭が外れると、その下に、首のない透き通った男の姿が現れた。透き通っているのに姿を現せたのは、びしょ濡れだからだ。乾けば、すっかり消えてしまう。男は、脚の方から、全身を紐でグルグルと巻いていった。紐は、篭の中から次々に出て来たが、首から下は全て巻いて、これから首に巻こうとするところで、紐はなくなり、男は、また篭を被った。紐は柔らかいので、まるで裸であるように、体の自由は利いた。他の者達が、ぼつぼつ川から上がってきて、互いに、紐のように細い体を絞り合って、水を体の外に出していた。それが済めば、彼らは全員で、また男に襲い掛かるのは明らかだ。しかし、男は、逃げずに彼らの準備が整うのを、丸い石の上に腰を下ろして、側の草を毟りながら待った。

　彼らが一斉に声を上げながら、手に手に石を握り締めて、男の方に向かって

くると、男は両手で、毟った草を擦り合わせた。きつい草の香りが辺りに匂い立って、他の者達は、遠巻きに、石を握った拳を振り立てるばかりだった。それも直に収まって、肩を落とし、その内に、互いに体を寄せ合って、跪いたりしゃがみ込んだりしたまま眠り込んだ。しかし、彼らの体は、男をぐるりと取り囲んでいて、男をその輪の外に出さなかった。

　仕方なしに、男は歩き回って、その輪の中の草を全て毟り、草の根を踏み潰して回った。地面は白っぽくヌルヌルになった。男自身、何度も滑って尻餅を搗いた。それから、眠っている者達の肩や腕をひっ掴んでは、そのヌルヌルした地面に引っ張り込んだ。地面は、レンズのように綺麗に真ん中程窪んでいて、彼らの体は、その一番低い所に滑って集まった。その内に白紫の煙が上がり、小さな炎が幾つかチョロチョロと見えて、彼らは、ゆっくりと時間を掛けて、自ずから燃えて灰になった。風が吹いて、その灰が川の方に飛んで行って水に落ちると、水がドロドロにでもなったように、流れはひどく緩やかになった。

　風が向きを変えて戻って、川の水の腐った匂いを、男の方に運んできた。被った篭の中にその匂いが籠もって、そこでまたその匂いそのものが腐るかのように、匂いはひどくなる一方だったが、男は、篭を外そうとはしなかった。我慢出来るだけ我慢しようとした。それでも限界が来て、慌てて篭に手を掛けて力を込めたが、篭は外れなかった。紐を、肩と篭の隙間に食い込ませて、首を

断ち切った要領で引っ張れば外せるかも知れないと考えたが、紐はない。胴体の紐を解こうにも、きつすぎてダメだ。

　男は立ち上がって、全力で駆け出した。ヌルヌルの地面を抜け出すまでは大変だったが、そこを出てしまえば、ズンズンと進めた。男は、川の上流を目指した。しかし、川は直ぐに途絶えた。いや、途絶えたのではなく、黒い斜めの崖の下に潜っている。さすがにそこから湧いて出る水は、澄んでいて、腐ってはいないようだ。男は直ぐに、崖と水の境目に身を投げたが、紐と篭だけで中味は空っぽなせいか、体は、水に弾かれて、崖の上に跳ね上げられるばかりだった。疲れ果てて、崖の斜面に身を横たえていると、地下の水の流れる音が、体の中に染み通ってきて、今にも遠ざかって消え入るようだったが、それがカラカラと響くのが、聞き分けられた。男は、その響きを頼りに、地下の川の行く手を見定めて、それに沿って、くねくねと崖を這い上った。地下の水音に浄化されるかのように、篭の中の水の腐った匂いは、薄まっていった。

　崖を登り切ると、背の高い細い葉をびっしり茂らせた草叢だった。男は、その縁で、まだ崖に這いつくばったまま、後ろを振り返った。黒い崖がだらだらと下っていて、川が地下に潜る姿は、遥か下で、今にも見失われそうに小さかった。そこから崖の上をずっと、クネクネした一本の線が引かれて来る。男の体に巻き付けられていた紐に違いなかった。首から下の紐が全て解けて、男の

体は、すっかり透き通って、またなくなってしまったようだった。それに気付かずに崖を登り切れたのは、寧ろ大変な幸運で、喜ぶべきかも知れない。男は、その幸運を手放すまいとするかのように、慌てて立ち上がり、草叢に飛び込んだ。篭だけは、頭に被さったまま、外れなかった。水の腐った匂いが、急にまた甦った。草叢では草が邪魔で、そこに倒れ込んでも、川の流れる音は分からないだろう。匂いを振り払うには、先を急ぐしかない。

　草の背は、ちょうど男の肩辺りまである。透き通った男の体に、草が掻き分けられると、草は男の体にぴったりと張り付いてきて、男の全身の輪郭をそこに描き出す。そうして男は、自分をなくさずに済んだ。暫く進んで、男の前に見慣れた地形が拡がった。すっかり草で覆われてしまっているが、人を集めた何もない所に違いなかった。円く小高く盛り上がった所も直ぐに分かった。男がその上に登ると、草が風にそよぐ音が、その盛り上がった所を取り囲む者達の張り上げる声にも聞こえた。それを聞きながら、男は、その一番高い真ん中辺りの草を毟った。きつい草の香りが、そこに噴き出したガスが燃えるかのように、突き上がった。周りの声も草の音も収まった。水の腐った匂いも、草の香りと中和するかのように収まり掛けた。

　男は、そこに逆様に埋まった自らの首を掘り出した。首のあちこちから、根茎が何本も延びている。それなら、この辺りの草は全て、男の首から生えて拡

がって行ったものか。男は、根茎を全て綺麗に千切ってから、首を胸に抱き締めた。被っていた篭が、独りでにボロボロになって、砕け散るように剥がれていった。水の腐った匂いからも解放された。潰れた首が、透き通った体に染み通って来て血のように全身を巡り、男の体は、ちゃんと目に見える、首と胴の繋がった姿に、戻っていった。

　首を掘り出した所は、傾いた壺のような形になっていて、そこから水が湧き出した。水が草叢にヒタヒタと拡がって行くと、草は、男の側から順にお辞儀をして、萎れていった。男は眠くなって、その萎れた草の上に横になった。草の寝心地も良くて、男は直ぐに眠り込んだ。

　目を覚ますと、見渡す限り、草は跡形もなく、乾いた白っぽい地面が拡がるだけで、根茎までも土に還ったようだった。男はまだ、一番高い辺りに居て、その盛り上がった所を取り囲む者達の声が届いた。ただそれらは、男に向けられたものではなく、彼ら同士で隣り合う者を相手に、バラバラの話題を取り上げているように聞こえた。男は、何事もなかったかのようにそこを降りて行けるのか、それともそうしようとした途端、周りの者達が一斉に、男に向かって非難の叫びを浴びせ掛けてくるのか、分からなくて、身動きが取れなかった。しかし、声は段々と、どれも掠れてゆくようではないか。水がないのだ。男が、自らの首の埋まっていた所を掘り返すと、壺が出て来て、旨そうな澄んだ水が

入っていた。男は、それに勇気を得て、何事もなかったかのように、壺を抱えてそこを降りて行った。たまたま隣りに来た者が、喉を掻き毟るようにして、掠れ果てた声で、壺の中味について尋ねてきた。適当な返事をしようと、何気なく壺の中を覗くと、水がすっかり濁っているように見えた。　壺の縁に鼻を当てると、水の腐った匂いがした。（二〇〇二年三月七日）

*　　*　　*

荷車

　そこにある卵を一つ取ってくれ、と言われたので、指差された方を振り返ると、板張りの高い塀に、黒い梯子が掛かっている。梯子を登り切ると、そこからは垂直に切り立った黒い崖で、またそこを攀じ登らなくてはならない。そこは、まだ誰も、登ろうとさえ思った事のない所に違いない。そんな所を登らなくても、崖の右側からも左側からも、綺麗に舗装された坂道が、崖の上に通じているからだ。いや、そんな所に崖があるのさえ、誰の目にも留まらないのではないか。下から見上げた時には、高い塀の奥に、すっかり隠されていた。

　攀じ登って行くと、いきなり崖が途切れた。下からは見えないが、そこに水

溜まりが出来ていて、そこからまた、崖は上に続く。それを見て一息つけたが、そこからが、思いの外厄介だった。水は、途切れた崖の縁まで迫っていて、そこを越えて行くには、先ずは、その水溜まりに、身を滑り込ませるしかない。しかし、水縁はヌルヌルしていて、とてもそこに体を預ける事は出来ない。下手に冒険をすれば、滑って、崖下へ真っ逆様だ。そこを避けて、水溜まりの脇を登ろうにも、崖はそこでは、その水溜まりの幅しかない。何としても、一度、水溜まりに身を乗り上げるしかない。辛うじて片腕だけを、水の中に差し出せたが、水縁を挟み付けている腋の下が細かく震え、体は左右に揺れだした。

　差し出された片腕が水を掻き回し、水溜まりは、段々と波を打つ。水の底に沈んでいた白い卵が、幾つも浮かび上がってきた。もう片方の手で素速くそれを一つ掴んで、後ろを振り返って、下で待ち構えている者に向かって投げた。無理な姿勢からだったので、卵は、大きく逸れたが、それでも下の者は、その落ちて行く方に走って、腕を伸ばせば何とか間に合いそうだ。しかし、次の瞬間、下の者は腕を押さえて蹲った。それから、私の方を睨み上げ、お前の投げたのは卵じゃなくて石ころだ、と叫んだ。

　その声がひどく聞き苦しくて、バランスを崩した。てっきり、真下へ落ちるものと思ったが、バランスを崩した勢いで、体は、どのようにか捻って回って、水溜まりの中へと飛び込んだ。水の底の卵の形の石ころが、水の中で激しく動

き回り、ジタバタする体に打ち当たってくる。何とか立ち上がろうとするが、水も水の底もヌルヌルしていて、その度に水の中に倒れ込み、益々ひどく石ころの攻撃に晒された。そうしている内に、水はどんどん掻き出されて、窪みの中は、石ころと私の体だけになった。石ころは互いに擦れ合い、熱を持って、私の肌を焦がした。このままでは、全身火傷だらけになってしまう。

　子供のクスクス笑う声が、聞こえた。見ると、確かに崖は水溜まりの幅しかないが、その崖の直ぐ右も左も、白くて平坦な道だった。そして、どちらの側にも、多分同じ数の何人かの子供達が、側に来て、私の事を笑っているのだ。直ぐにも熱い窪みの底から出たいが、右か左かどちらに行くか迷っていると、窪みの中に、白く痩せた人の姿がスッと立ち上がり、右の道に向かった。窪みの中にもう一人居て、私と二人で抱き合って、熱さを堪えていたのだった。そいつは、ずっと水溜まりの中に沈み込んで、誰か来るのを待っていたのか。ただ、その後ろ姿は、私そっくりにも見える。石に肌を焼かれて、私は、二つになってしまったのかも知れない。私は、遅れまいと、急いで左の道へと踏み出した。

　子供達は、笑いながら後退り、そこにある荷車を牽き始めた。様々な形の赤い実がいっぱいに積まれている。私も、その脇に寄って、荷車を押した。赤い実はどうしたのか、と尋ねると、一番近くの子供が、盗んできた、と耳打ちし

た。逆に子供から、卵はどうしたのか、と尋ねられた。私は、卵をいっぱい詰めた網の袋を背負っていた。私も、盗んできた、と答えた。それからは、互いに黙り込んだ。いや、子供は始めから黙り込んでいて、私が独りで、子供の分まで喋っていただけではなかったか。そうに違いない。その内に、子供達は、子供達だけの道を進んで、私は取り残された。遠ざかる荷車の、私が体を寄せていた辺りだけが、色が沈んで見えた。私は、全身びしょ濡れのままだと気付いた。何時まで経っても乾かない、ヌルヌルした特殊な水で、全身を覆われているらしい。

　私には道はなかった。どちらに進んでいいか分からない。もう一人も、何処かで、行き惑っているだろうか。それとも、ちゃんと行く先を見定めているだろうか。その姿が見て取れれば、私を導いてくれそうでもある。見渡して、見て取れたのは、結局、腐り掛けて傾いた木の柵だけだった。その柵を越えて行けば、何か見通しが立つかも知れない。近付くと案外低くて、何とか乗り越えられるだろうと手を掛けると、手はツルリと滑った。足を掛けても、やはり滑った。背中の卵を一つ取り出して、柵にぶつけると、卵は割れて、そこだけ黒焦げになったので、蹴破って進んだ。

　小川が流れていて、子供達と私そっくりのもう一人が、水縁で立ち尽くしている。赤い実はどうしたのか、と尋ねたが、答えは何も返ってこなかった。私

は、小川の水で、全身のヌルヌルを洗い流そうと、彼らの直ぐ隣にしゃがみ込み、小川の水を掬おうとした。しかし、ヌルヌルした掌は、水を弾くばかりだ。どうしたいという考えもなく、背中の卵を取り出して、水に投げ込んだ。卵は、水の表面に当たった衝撃で割れて、水の上は、うっすらとした炎で覆われた。その水なら、掬う事が出来た。そうして、その炎の水を体に擦り込む内に、ヌルヌルした水は、ポロポロと肌から落ちて行った。私そっくりのもう一人が、何時の間にか私の直ぐ前に来ていて、私を押し倒すようにして抱き付いてきた。そうして二人で転げ回る内に、私の肌は、またすっかりヌルヌルに戻った。何とか離れたかったが、私より何倍も強い力で抱き付かれて、どうにも出来なかった。

　子供達が黙って歩み去るに連れ、小川も遠ざかった。その見たままを、もう一人の耳元に囁くと、やっと私は解放された。もう一人は、盛んに辺りを見回した。もう子供達の姿は、見えなかった。網の袋を背中から外すと、卵はどれも割れて潰れて、卵らしい姿も留めるのは、ほんの二、三個だった。その二つ半を取り出して、もう一人の骨張った背中にぶつけた。そいつは、立ったまま、透き通った炎を纏って、ゆっくりと、灰も残さずに燃えていった。そのせいで、地面も空も、どこもかしこも、ヌルヌルになってしまった。私は、とても立ってはいられず、ひっくり返って、幾らじっとして居ようと思っても、地面を転

げ回るばかりだった。
　何時まで、そうしていなければならないのか。私の体は独楽でもないし、転げ回るのも楽じゃない。絶えず誰かに、切れ味鋭く投げ飛ばされているようで、もうヘトヘトだった。地平線の向こうで、子供達が、そんな私の姿をクスクス笑っている声が聞こえる。それなら地平線の向こうは、ヌルヌルしていないのか。真っ直ぐ、その声の方へ、転げて行けばいいのだ。しかしどうやら、私の居る所は、殆ど目では捉えられないが、緩やかな窪地になっていて、私は、その中をグルグルと回るしかなさそうだった。
　私は舌を噛んだ。私からそうしたのか、弾みでそうなってしまったのかも、もう分からなかった。口から溢れて止まらない血も、やはりヌルヌルしているようだった。地平線の向こうから、子供達が嬉しそうに走り込んできた。側まで来ると、彼らは一斉に、口を開けて見せた。どれも舌がなかった。私は助け起こされ、荷車に乗せられ、地平線の向こうへと運ばれた。私の体は、荷車いっぱいに積まれた赤い実のように見えているに違いない。
　赤い実はどうしたのか、と私は尋ねてみた。盗んできた、と幾つかの声が返ってきた。今度は確かに、子供の声だ。舌をなくした者同士なら、言葉を交わせるらしい。卵はどうしたのか、と尋ね返されたので、私は、盗んできた、と答えた。それから、でももうみんな使ってしまった、と付け加えた。子供達は、

口々に、使ってしまったなんて嘘だ、と言い募った。そう言えば、ヌルヌルした地面が卵の黄身で、ヌルヌルした空が白身にも見えてくる。その事を言うと、子供達は、声を立てて笑い、それが響き渡って、白身の空をプルプルと震わせるようだった。地平線を越えると、地面は、急に硬くゴツゴツして、荷車はひどく揺れ、赤い実は、バラバラと零れ落ちた。赤い実よりも、子供達は卵を欲しがるようだった。それは、私も同じだ。（二〇〇二年三月九日）

＊　＊　＊

封筒

何日もモノを食っていないような顔をしていたようだ。夜、水を湛えた深い堀の直ぐ脇を歩いている女から、手紙を託された。何日もモノを食わずにいるような人間なら、余計な事は考えずに、頼まれた通り、手紙を真っ直ぐに届けようとするだろう。そう思われたらしい。私は、立ち止まりもせずに封筒を受け取って、そのまま女と別れ、堀の脇の柵を逸れて、緩やかな坂道を登り始めた。一歩一歩踏み出す度に、爪先にまで力が満ちた。モノを食っていない筈がない。振り返れば、柵を乗り越える女の姿を眺められただろうが、振り返らな

かった。それから、封筒を持っている右手の甲が、痛い程冷たく感じられたので、口元に寄せて息を吹き掛けた。手は冷たいままだったが、封筒は、息の水気を吸って、クネクネと拗って、最後は反り返った。それを月の光りに翳して、宛先を読み取ったが、所番地も宛名も憶えはなかった。今更立ち戻っても、女は今頃は、深い堀の水の底に違いない。それに、もし方向が違うなら、女が後ろから声を掛けて、それを注意したのではないか。この真っ直ぐ先に、手紙を受け取る相手がいるのだろう。勝手にそう決めて、そのまま坂道を登り続けた。

　登り切ると、何もない平地が、月の光を受けて白く拡がるだけだった。多分、城の跡だ。反り返っていた封筒が、クネクネと拗りながら、また伸びてゆく。読み取れた筈の宛名はなく、裏も表も真っ白だった。さっき読み取れたのは、月の光りに透かされた手紙の文面だったようだ。だからそれは、宛名ではなく、手紙文の中の場所と人の名だろうか。それとも、封筒の表に読み取れるのは宛名しかないと思い込んで、場所や人の名ではない文章の一部を、宛名と勘違いしたのだろうか。改めて、封筒を月の光に翳してみると、黒く浮かび掛けた文字は、直ぐに銀色になって、紙の中でクネクネと這い回り、その端々がキラキラと細かく輝くようだ。手紙を抓む指の爪までも、表面が明るい色に滲んで、砂のような細かな輝きを零した。しかし、爪が内から輝く筈はない。振り返ると、曲がり拗って長々と続く堀の水面の、月の光りの照り返しが、目に射し込

んだ。封筒を見直すと、中の文字がその照り返しの光りを、ジワジワと吸い取っているようだ。重なり合う文字がそれぞれに光りを吸い取るので、外から見ると、平たい紙の中で、銀色の小さな蛸が、縦横に整列して、八本の触手を絡ませ合いながら踊っているようではないか。

　照り返しの光りは更に延びて、平地の奥の方の縁辺りに萌え出ている新芽の薄い緑を、透き通らせている。そこまではずっと肌理の細かい砂地で、私は、二、三度、足を交互に前に送っただけで、滑るように、忽ちその縁の手前に辿り着けた。それとも、手紙の中の蛸共が、そこまで一直線の照り返しの光りの筋を、チューチューと吸いながら宙を飛んで、私をそこへと一気に導いたのか。私の直ぐ前には、短い草が、親身に手入れでもされているかのように、ほぼ円い形にびっしりと生えている。自然に任せたのでは、こうはならないだろう。ここできっと、何かが行われるのだ。ここに何かをしに来る者に、女は、手紙を書いたに違いない。待つ事にした。草の手前に、膝を突くと、熱心な一番乗りの観客のようでもあったが、草の甘ったるい香りに包まれるようで、直にひどい眠気が襲ってきた。瞼を塞ぐ訳にはいかない。眠っている間に、誰かに手紙を盗まれるかも知れない。歌を歌おう。手紙を翳すと、蛸共は、まだ元気いっぱいに踊り狂っている。それを歌詞に見立て、それをスラスラと読み取れている積もりで、デタラメな歌を歌い続けた。そうして私は、膝をジリジリと前

に送って、草の円いステージに身を送り出さなければ、気が収まらなくなった。

　そうしてもう、ステージの真ん中まで進んでしまっていて、草の香りは益々甘ったるく、眠気は益々瞼に重くのし掛かって来るので、私は、蛸を見習って、脚を八本生やした事にして、デタラメな歌に合わせて踊り出すしかなかった。しかし、ここはまるで牢獄のようではないか。私は、眠る事も、ここから出る事も許されず、苦役を強いられている。私はやはり、もう何日もモノを食っていないに違いない。腹の皮は、見事に凹んでいた。たとえ、ここから出られたとしても、もう何処へ行く力も残されていない。女の手紙を受け取るべきなのは、そんな私の他に誰が居るのか。ただ、確信にまでは至らない。勝手に封を切って、後になって言い訳は出来ない。私は、尚も踊りながら、照り返しの光りが最も効果を上げる角度に封筒の向きを保って、思い切り剥き出した目で撫でるようにして、整列した蛸共の踊りから、言葉を抽き出そうとした。そうして、その言葉を、自らの踊る姿の流れの中に刻んで、その体の動きを覚え込もうとした。踊りの中で私は、手紙を読んでいるに違いない。その踊りを体に覚え込ませれば、手紙の言葉は、私のものになるではないか。

　いや、そうなったとしても、女が手紙で伝えようとした用件が、私に伝わる訳ではない。それには、その言葉を私の体から出して、私の目の前に並べなければならない。私は、左手で、クネクネと拗る腹の震える生皮を抓んでは毟り

取った。そうしてそれを、左の掌に強く握り締めては、順々に重ね合わせて、蛸共の踊る姿に似せた形を、作り上げていった。いや、ただその積もりだった。そろそろ完成かと思って掌を拡げると、ただの丸っこい表面が皺皺の塊が、ふやけたように少し脹れるだけだった。腹の皮は、粗方取り尽くされて、更に凹んだ腹は、黒っぽい肉ばかりが剥き出しになっていた。まさかそれまでもちぎって、ハラワタをだらだらと食み出させる訳にもいかない。見渡したが、使えそうなものは何もない。

　仕方なしに、私は、ステージの真ん中の草を毟った。そうして剥き出された地面は、砂ではなく赤い粘土だった。腹の皮を重ねた塊を芯にして、その周りにその粘土をくっつけては、歌いながら、踊りながら、封筒の蛸共を目で撫でながら、それをまた、左の掌で何度も強く握り締めた。粘土の塊が片手に余る程の大きさになると、それは小さな獣の姿だった。しかしそれはきっと、手紙の文字でもあるに違いない。それなら、何とかそれを読み取りたいが、蛸とはまるで様子が違うし、何の言葉も頭に浮かばない。仕方なしに、私は、その獣の似姿を、腹に押し付けた。獣は、私の腹の肉を食い破り、ハラワタを貪るようだったが、そうして獣の腹が満ちると、私の腹も満たされるようで、腹の底から力が湧いてきた。その力があれば、もう歌ったり踊ったりしなくても、眠気を追い払えそうだ。

　私は、踊るのを已めた。月はもう傾いて、堀の水面からの照り返しの光りも逸れて、私からずっと離れた平地の縁を掠めるだけだった。そして、その光りは、その縁に、Ｖ字の影を切り出していた。ここが城跡なら、きっとそこから、秘密の抜け穴が通じているに違いない。私は、草のステージを踏み越え、その微かに輝く平地の縁へと、滑るようにではなく、一歩一歩砂を蹴って、走って行きたかった。しかし、体は少しも動かず、そう出来るまでの力は与えられないようだった。月の光りもすっかり朧になって、もう月に封筒を翳しても、銀色の蛸どころか、黒い文字一つ透けてこない。

　空が白み始めると、平地の縁のＶ字の影から、人の姿が現れた。暗く狭い地下通路を這い登って来たらしく、やっと広く明るい所に出られて、晴れ晴れとした顔付きになっている。それは、静かに真っ直ぐ、私の方に近付いている。そして、私の草のステージの直ぐ脇で立ち止まると、その一人にだけ気を取られていて気付かなかったが、草のステージは、すっかり人集りに取り巻かれて騒々しかった。この中に、手紙の受け取る者がいるに違いない。私は、手紙を翳してくるりと一回りした。誰も受け取る者はなかった。彼らは、私の体の動きに釘付けのようだったが、一様に、瞼が重そうだった。恐らく一晩中歩き詰めで、やっとここに辿り着いて甘ったるい草の香りを嗅がされれば、眠くなるのも当たり前か。中に一人だけ、目を見開いている男がいる。

「なぜ、手紙を受け取らない。」と、私は声を掛けた。
「知らない。でも、誰が受け取らないんだ。」と、男は言って、私から皺くちゃな封筒を受け取って、疑り深そうな目付きで封を切った。手紙を拡げて読むと、別に覗き込まなくても、私にもその内容は分かった。今日、誰にも分からないように自分の所に来て欲しい、と書かれてある。
「行かない方がいいだろう。」と、私は、堀の方に遠い目を泳がせて言った。
「眠いのは我慢出来るが、腹が減って死にそうだ。」と、誰かが言った。
「だから？」
「あんた次第だ。独り切りで、女から渡された手紙と、一晩中一緒だったんじゃないか。」
そう言われて私は、デタラメな歌を歌った。歌は、封筒の中の銀色の踊る蛸の姿を思い浮かべるだけで、スラスラと出て来た。それに合わせて彼らは、私が踊っていた通りの踊りを踊り出し、人集りは右に左に揺れた。釣られて私も、体が勝手に動いて、踊るしかなかった。或いは、踊らずにいられただろうか。揺れる人集りに囲まれて、独りじっとしていては、船に酔ったように気分が悪くなりそうだった。それが恐くて、進んで踊ったのかも知れない。直に、手紙を受け取った男の姿は見失なわれた。彼らは踊りながら、自らの腹の皮を毟っては、両手でそれを捏ねた。私は、順々に、その彼らの手に、私の腹の中の赤

い粘土をぶつけた。粘土は、私の腹の中にたっぷり埋まっていった。そうして、彼らの手の中で、獣の形の粘土の塊が出来上がっていった。しかし、彼らは、それらを自らの腹には収めずに、草のステージの縁に並べて置いた。日差しを受けてキラキラ輝く獣の似姿は、今にも草を食い出しそうだ。それから、彼らは、頬を赤らめ、ヌルリと赤い唇を舌で舐め回し、腹一杯のような恍惚の目付きで、連れ立って緩い坂を降りていった。雲が割れて、平地の上に強い陽が差し込む頃には、私一人が残った。ぐるりと土の獣に取り巻かれた円い独房に閉ざされて、誰も私の踊りを止める者も現れない。もう腹が空く事もなく、モノを食う必要もなかった。（二〇〇二年三月十一日）

＊

＊

＊

転がす

四角い箱を、たった一回、奥に向かって転がすだけの事だ。箱はそんなに大きくもないし、重くもない。ただ手を掛けて押せば済む。他の箱でなら、何時も巧く出来ていた。その箱に限って、転がってくれない。簡単に押されて転がり掛けるのだが、奥の面が床スレスレまで傾いて、殆どもう転がったも同じ姿

で、暫くそのままでいて、それから徐に、手前に起き上がってくる。起き上がり始めたが最後、幾ら押しても蹴っても体当たりしても、それは元に戻る。もう何度も繰り返した。

　他に遣り方があれば、もちろん試してみたい。素手で立ち向かうだけでは、どうしようもないようだ。道具を使うべきかも知れないが、だだっ広い部屋なのに、何も見当たらない。道具というなら、その箱が道具だ。その箱を一回、転がすだけで、その中に火が着いて、煙も立てず、静かに一握りの白い灰になる筈だ。その灰を掻き取って、真上に投げて、目を見開いて顔を上に向けていれば、空中に漂う灰が目の中に積もって来る。そうして、暫く何も見えないままで居て、涙で灰を全て押し流した目で前を見直せば、そこにまた、新しい箱が据えられていて、それを押して転がす。それを繰り返す内に、疲れて、眠る事が出来る。押しても押しても戻ってくる箱を押し続けるだけでは、疲れが幾ら溜まっても、少しも眠くならない。却って、箱が床スレスレから独りでに戻ってくるのを眺めていると、疲れは疲れのままでありながら、それとは別に、腹の底から、目を醒ます力が湧いてくる。

　どうしても転がらないなら仕方ない。火を着けて燃やすしかない。火がないなら、取りに戻るだけだ。箱が六面から出来ているなら、火も六つ要るだろうか。箱に背を向けて、二、三歩、進んだらだけで、横に並んだ三人の女が立ち塞

がった。三人とも、銀色に塗られた掌を、真っ直ぐ私の方に向けている。覗き込むと、どれも鏡になっているようだったが、何も映さなかった。それとも、灰を何度も被って、鏡に映るものを見られない目になってしまったのか。女の銀色の指の腹が、大きく瞠った両目に触れてきて、私の目玉を撫でさすった。ザラザラした感触が、目玉の表面を左右に何度も走った。指の腹の中に、小さな火が隠されているのが見えた。その火を目に移せたら、また鏡に映るものを見られるのではないか。

　指が目から離れた。多分、両手の人差し指か中指で私の目玉を撫でていただろう、真ん中の女の姿が、なかった。左右の女の四枚の掌を覗いてみたが、やはりただ銀色にしか見えない。私は、体を斜めにして、女と女の間を突っ切った。左右の女の掌が、私の肘の辺りを冷たく掠めた。二、三歩、進むと、ガラスの壁に取り囲まれたような、冷え冷えとした透明な狭い部屋に踏み込んでいた。椅子に掛けている女の背中が、直ぐ目の前にあって、その女が肘をついている楕円のテーブルに、赤ん坊が二つ、乗っている。赤ん坊は、互いの口や目に指を突っ込んだり、髪を毟り合ったりして、真っ赤になって争っていたが、女は少しも止めようとはしない。私は回り込んで、女の両手を掴んで、その掌を私の方に向けさせた。

「面白いでしょう。もうずっとこんな風だよ。」と、女が言った。

「どうする積もりなんですか？」と言って、私は、女の掌を、今度は赤ん坊の方に向け、それを覗き込んで、そこに赤ん坊の姿が映り込むなら、見て取ろうと思った。

「すごく嬉しそうじゃない。よっぽど、お互い、気に入ってるのね。大人になっても、離れられないんじゃないかな。」と、女は楽しそうに声を弾ませ、私に掴まれたままの手を、赤ん坊に近付けた。

「あなたの掌に、赤ん坊は映るんですか？」

「箱詰めにして、送ろうかな。」

「何処へ？」

「ねえ、来てよ！」と、女が叫ぶと、二人の女が、左右から駆け込んできて、早速、箱を組み立てに掛かった。

「そうしたら、あなたの掌に映りますか？」と、私が言うと、女は、女の手を掴んでいる私の手を振り払った。私の指は、凍ったように冷たくなっていた。もう女の手を掴もうにも、かじかんで無理だろう。

箱が出来上がると、全面鏡張りの立派なもので、赤ん坊を詰め込んだりするには、勿体ない。持って帰りたい程だ。二人の女が、赤ん坊を持ち上げて、箱に入れようとした。しかし、塞がった箱の何処から入れる積もりなのか。案の定、赤ん坊は、箱の角に強引に擦り付けられるばかりだった。赤ん坊は、ただ

眉を顰めて堪えていた。

「物じゃないんだから。」と、私が言うと、女三人は、口をへの字の曲げてピクピクさせながら、足を踏み鳴らして一斉に部屋から出ていった。箱の正面に、抱き合って一つの体のように見える赤ん坊の姿が、映っている。やっと鏡に映るものを見て取れた訳だが、生身の赤ん坊は行方知れずだ。女が、何処かに隠していったのか。

私は、箱に近付いて押してみた。ひょっとして、箱が転がらなくなったのは、この鏡張りの箱を転がす順番が回ってきていたからか。箱は簡単に、奥に向かって一回転がった。床に伏せられていた面が、正面に来ると、そこにまた赤ん坊が映った。その赤ん坊の横になって重なり合う腹の辺りから火が出て、箱は煙も立てず、鏡面の中だけを炎で満たして、静かに燃えて、一握りの銀色の灰になった。それを掻き取って真上に投げたものが、目の中に積もって目を塞ぐと、その灰の一粒一粒の中に、女の姿が一つずつ映り込んでいるのが、見えて来た。灰になっても鏡には変わりないらしい。女の姿はどれも上半身だけで、虚ろな目をして、絵のように動かなかった。私が呼び掛けると、それらは一斉に、銀色の掌を私の方に向けた。無数の掌の中には、体を丸めて心臓の側を下にして、蹲って眠る私の姿が映っていた。

何時の間にか戻って来た三人の女が、今度は三人掛かりで、新しい箱を組み

立てていた。六枚の掌が、箱の六面をそれぞれ受け持って、先程よりずっと精巧な箱になりそうだった。出来上がると、蓋が開けられて、小さく丸まって眠り込む私を、箱の中に収めた。私は、火になって箱を燃やした。（二〇〇二年三月十三日）

＊　　＊　　＊

息子

彼は、大きな川の、長く立派な橋の歩道を歩いていた。車道には、車が激しく行き交っていた。空は明るくて真っ青だったが、その青は眼に馴染んで少しも眩しくなく、澄んだ空気が心地よかった。彼は、この橋を車で渡ったのを思い出した。それはもう三十年も前の事だ。そうして彼は、自らの足取りに若さを感じた。三十年前の若さが甦った感じだ。彼だけでなく、周りも全て三十年前のようだった。しかし、それならなぜ、彼は歩いているのか。その時は、車に乗っていた。道はまるきり空いていて、橋の終わりまで見晴らして、気分良く行き過ぎた。ただ、彼は、助手席に乗っていた。

川面を見下ろすと、前日の大雨で、水嵩は恐ろしい程増していて、水は茶色

く濁って速かった。そこを、青い車が傾いたまま流されて行く。彼は、橋から飛び降りて、その車の屋根に乗った。彼の体は、ロープで橋の欄干と繋がれていて、彼は車に抱き付き、車の流れて行くのを止めた。それからロープを手繰って、車を橋の上まで引き上げた。車の中に、三十年前の彼の息子が閉じ込められていた。ドアが開かないので、窓ガラスを全部割って、バケツで水を掻き出した。水はどんどん溢れて、橋の上が水浸しになり、警察が出て来て通行止めにした。

彼は、胸まで水に浸かって、何とか、運転席に身をこじ入れた。助手席の彼の息子の顔は真っ白で、死んでいるようだった。エンジンを掛けると、その振動で、息子の体は上下にブルブル震えだし、頭が車の天井に激しく当たって、天井を突き破りそうな勢いだった。車は自力で進んでいるのではなく、橋の上の水が、車の向いている方に流れ出して、それに押し流されて進むようだった。電話ボックスが流れてきたので、彼は、窓から腕を出してそれを止め、息子を産んだ女が誰だったか、電話帳で調べだした。しかし女の名は載っていなかった。そこで彼は、息子が通っている高校に電話して、母親の名前を調べて貰った。その名前を息子に告げてみると、助手席のドアが開いて、息子は外に流れ出た。息子の体は、車よりずっと速く流れに乗って先に進み、車から出る訳にはいかない彼は、付いて行けなかった。

　息子は、橋を渡りきって、そのまま、通っている高校まで、その水の流れに運ばれた。そこでやっと、水は退いて、芝生が午前の陽を浴びて青々と輝く中に、その体は横たえられた。息子の体が乾く頃、やっと彼は、校門をぶち破って、そのまま芝生の上に乗り付けた。その前の校舎の一階では、職員会議の最中で、教師達は、息子が水死体のように寝ころんでいるのを指差しては、笑い合った。

　彼は、車を降り、息子はそのままにして、体育館で一人で待っている女の所に行った。それから、女に向かって、午後から人と会う約束があるから先に電車で帰ると言い残して、行ってしまった。女が、芝生に行くと、五、六人の生徒が、悪戯気分で、車を馬鹿馬鹿しい程にピカピカに磨いていた。女は、息子を抱き上げて運転席に乗せ、自分は助手席に乗った。生徒達が、奇声を上げながら、車を押して、校門から外に出した。すると、車を運転しているのは、その高校の理科の教師で、女は、助手席に乗っていた。女は、その高校に通う生徒で、二人は父娘だった。水死体は、何処かに消えた。二人は、車で綺麗に舗装された、ずっと真っ直ぐな道を進んだ。

　夜になって、海沿いの道を走っていると、湾の対岸で、花火が幾つも上がった。道は真っ直ぐなままだった。花火の中に、いきなり飛行機が浮かび上がり、直ぐさま海に墜落した。それを身じろぎもせずじっと見詰めていた理科教師の

父親は、死んでいて、助手席の娘が、無理な姿勢でハンドルを操作しなければならなかった。娘の息が父親の顔に吹き掛かると、死んだ父親は、彼女の高校生の息子になって、生き返った。免許取り立ての息子は、母親が通う病院まで車を運転して行く練習をしていた。だから隣に乗っている女は、母親ではなく、他の女だった。

　道が急に狭くなって曲がりくねった。息子は、道を間違えたと思って、辺りをキョロキョロ見回し、前を見るのが疎かになって、若い女を轢いた。助手席の女が、風船が割れるように弾けて、水になって、助手席をびしょ濡れにした。息子は、車から降りて、血塗れの撥ねた女を助手席に乗せた。助手席の天井の破れ目から水が絶え間なく漏れて、女の体に掛かった。その水と血の混じったピンク色の水で、二人は腰まで浸った。

　山を三つ越えて、やっと大きな病院に着いた。車を降りると、大怪我をしているのは彼の方で、すっかり血を洗い流した若い女は、彼には見向きもせず、何処かに電話を掛けていた。彼は、自分が怪我をしているのは何かの間違いだと思って、看護婦が追っかけてくるのを撒いて、病院の裏手の一日中陽が当たらなくてじめじめしている駐車場に、身を潜めた。それでもやはり大怪我をしたままのようなので、逃げている途中に年取った患者から渡された塗り薬を塗って、車と車の間に横になって、回復を待った。彼の体中の傷口からは、ずっ

と水が流れ出していたようで、彼の周りに水溜まりが出来ていた。その水の匂いを、探しに来た看護婦に嗅ぎ付けられて、彼は、担架で病室に運ばれた。病室で一人待っていた顔見知りの見習い看護婦は、彼が轢いた若い女だった。舌足らずな口調で、彼女に優しく話し掛けられると、三十年が経っていた。（二○○二年三月十五日）

*　*　*

時刻表

　陽も大分傾いた水辺で、女は、ちっぽけな時刻表を繰っていた。水縁で、間を置いて一度だけ跳ね上がる小さな波が、足元を少し濡らす。何を待っているのか、はっきりしない。電車かバスか船か、飛行機という事もないとは言えない。ただ、砂浜は狭いし、その先はゴツゴツした岩場の斜面が続くだけだし、水も浅そうで、どの乗り物も女の所まで遣って来られそうにない。そんな見掛けに騙されてはいけないのか。道路や線路など何時でも通せる。砂を掘れば、船着き場も作れるし、斜面を削れば、小型の飛行機なら簡単に降りられる。

　女は、水の方に向かって、二、三歩、踏み出した。斜めから強い風が吹き付

けて、瞬く間に左の頬を冷たくした。左側の水辺に、鼠が一匹打ち上げられて、脚で砂を掻くのだが、体が横を向いて前に進めずにいるのが、見て取れた。女が、鼠の方を向いてそこにしゃがみ込むと、水が急に深くなって、女の肩まで来て、時刻表を濡らさないために、それを持つ手を高く挙げなければならなかった。鼠の体は少しずつ起きて、ジリジリと前に進めるようになった。ただそうして見ると、鼠にしては変わっている。目の後ろにエラがあって盛んに呼吸しているようだし、脚には水掻きが付いている。その砂の上の軌跡は弧を描いて、頭を水の方に向けてきた。そしてもう、水縁を挟んで女と向き合っていた。

　女は、その鼠に似た奴から目を放し、頭の上で、また時刻表を繰った。時刻表の左半分だけが、手垢に塗れて黒くなり、捲れ上がっているのに気付いた。右半分は、糊付けでもされたかのように、強い風を受けても、硬く閉じている。一度に二頁捲ってしまわないよう、指の腹に神経を集中させて、女は、その真っさらな一頁目を捲った。真っ白な紙の上に、何本か黒い真っ直ぐな線が引かれて、交わっている。数字は、米粒くらいのものが、三つ四つうっすらと散らばっているだけだ。それでやっと、女は、自分が何を待っているか分かった気がした。それは、もう暫くすれば遣って来るが、まだ少し間がある。鼠に似た奴の前脚が水に触れ、奴の目付きは急に険しくなって、女を睨んだ。女もそれから目を放さないまま少し身を屈め、水を口に含んでは、水鉄砲のように、奴

に向けて水を飛ばした。奴は、水が恐いのか、後退った。
　そうしていてやっと、湾曲した水辺に沿って、背中に強い風を受けて、砂浜を女の方に駆けて来る者の姿を見付けた。女は、時刻表を閉じ、水に濡れないように、それを両の掌の中にぴたりと挟み込んで、拝むような恰好で、水の中に全身を沈み込ませた。それでも目を開ければ、水面を通して、近付いてくる者の姿は見て取れた。直ぐ近くまで来ると、そいつも女の姿が水の中に見えるようで、女の方を見下ろして、盛んに身振り手振りを繰り返した。女は、そこから何か意味を読み取ろうとしたが、さっぱり分からない。途中から、その身振り手振りがぎこちなくなってきて、もう女の方を見下ろしてはいない。仰け反って口をパクパクさせたかと思うと、飛び上がって女を跨ぎ越え、水に飛び込んだ。
　女は、慌てて立ち上がり、水から上がった。鼠に似た奴は、女の足元で砂に潜って、身を隠そうとしているようだった。女は、じっと見詰めて待った。そして、鼠に似た奴の姿が砂に消えると、身振り手振りを繰り返した者の砂の上の足跡が、女の目に付いた。時刻表のうっすらと散らばった数字も目に浮かび上がって、それらの足跡に重なった。それで女は、その足跡に沿って、順番を間違えずにステップを踏む事が出来た。両手はずっと拝むようにしたままだった。時々砂がゴソゴソと揺れて、砂の中で、鼠に似た奴が、女に踏まれないよ

うに忙しく逃げ回っているのが分かった。

　声がするので振り返ると、水辺からやや離れた水の上に、頭だけをポツンと出して、身振り手振りを繰り返していた者が、歌を歌っている。女は、その歌とそれに合わせて踏まれるステップを頭に叩き込んで、強い風に背を向けて、それに押されるままに、そこを離れた。鼠に似た奴が、地面の直ぐ下に埋もれて散らばる小さな水溜まりに、次々に身を滑り込ませては、女の後を付いてくるのが、分かった。風の中に、砂を掻く音と水を掻く音と鼻を鳴らす音を、聞き取れるからだ。鼻は、水の匂いを嗅ぎ取ろうとして鳴らされるに違いない。そして、それらが段々増えてきて、数えられなくなった。

　行く手に、森が見えて来た。森に入ってしまえば、その下を張り巡っている木の根っこに阻まれて、鼠に似た奴らは追って来られないだろう。そうしたら、地面から出て追って来るだろうか。それでも森の中なら、幾らでも隠れる場所がありそうだ。しかし、女は、森には入らなかった。そこを左に逸れて進むと、子供達が奇声を発して、先の尖った長い棒を構えていた。何をしているのか尋ねると、その棒で地面の下を泳ぐ鼠面の魚を刺して、獲って食うので、群れが来るのを待っていると言う。群れはもう迫っている。女は慌てて、そこを左に逸れた。左に逸れる度に、風は、女の真後ろに回り込む。

　砂地が終わって、草地になった。風の中に、地面に潜って追って来る奴らの

音を聞き取れなくなった替わりに、女は、歌を歌ってステップを踏みながらでなければ、前に進めなくなった。ずっと先を、荷物を背負って歩いている者を見付けたので、女はその後を追う事にした。その者が、池の畔に辿り着き、背中の荷物を開くと、画材一式が入っている。女が追い付く頃には準備が整って、その者は、キャンパスに色を乗せ始めた。角張った大きな頭をした、筋骨隆々とした体付きだった。池の絵を描くのだと女は思っていたが、その者は、池の右側の何もない辺りを向いて、床几に腰を下ろしている。池の畔は大方砂地で、また、風の中に、鼠に似た奴らの追っかけてくる音が直ぐ後ろに迫ってきた。女は、最後の一言の積もりで尋ねた。

「何を描くんですか？」

「吸う息と吐く息の色が違って見える、その息を吸ったり吐いたりするところ。それから、池の光りに風がねじ込んで来るところなんて、どうでしょう。それとも、風に光りが突き刺さるのかな。どっちにしても、あんたの姿かも知れない。でも、あんたがそこに居ると邪魔なんだよ。あんたの姿を借りて描くんだから。分かってもらえるかな？」

池が傾いた陽を照り返して眩しかった。強い風が、その池に向かって、尚もグングンと勢いを増す。女は、ずっと拝むようにしていた掌を開いた。時刻表は、汗が染み込んで汚れて見えた。右半分の二頁目を捲ろうとすると、

「それはもう要らないでしょう。」と、画家に言われて、女は、時刻表を渡した。

　それから、自分の手を見ると、水掻きが出来ていた。強い風に押されて、女は、水の中に入って行くしかなかった。風の中に、一斉に砂を掻くけたたましい音が聞き取れた。地面の上に、鼠に似た奴らの群れが現れたのだ。そこから奴らは、水の中を追って来るだろうか。女は、池の真ん中だと思う辺りで、後ろを振り返った。強い風が目に入って痛かったが、何とか見渡すと、鼠に似た奴らが、水縁で女の方を睨んで、ぐるりと池を囲んでいた。水底に足が着いたので、女はそこで、歌を歌いながらステップを踏んだ。鼠に似た奴らの目付きが鋭くなって、殆ど苦しみ悶えるような表情に見えて来た。それならもっと苦しめて、出来れば殺してしまおうと、声にも足の動きにも力が入った。　群れは一斉に、水の中に飛び込んで消えた。女は、口を閉じて立ち尽くした。

　鼠に似た奴らが、女の腰から下に、びっしり食らい付いて来るのが、その重みで分かった。食らい付くばかりか、もう女の肉の中に入り込んでいて、その肉の中を自由に動き回っているようだった。女は、自分が女ではないと思えてきた。どうして女だと思えていたのか。女とは、水辺の画家の直ぐ目の前で、髪を風に靡かせて、細い体を光りに晒して立っている者の事ではないか。画家が、その女を押し倒した。二人の体は、ぴったり一つになって、砂地

の中を埋もれ掛けながら転げ回った。いや、女というのは、池の真ん中から水辺を眺め回す者と、その肉の中の鼠に似た群れと、光る水を湛えた池と、水辺で組み合う二人までをひっくるめたものを、指すのかも知れない。
風が已むと、池の水以外は、消え果てた。（二〇〇二年三月十七日）

＊　＊　＊

線

　同じ賽の目を揃えてしまって、それっきり、冷たい地べたにへたり込んでいるしかなかった。他の者達は皆、何度振ってても違う目ばかりを出して、次々に先に行ってしまった。最後の一人を見失ってから、やっと腰を上げる事が出来たが、脇目も振らず後を追うしかない。出した賽の目は違っても、彼らはまるで同じ歩き方で、一本しかないピンと張った細い綱の上を渡って行くように、寸分違わず同じ方へと消えて行った。一人の人間が、何度も同じ事を繰り返していたとさえ思えた。しかし、私だけは、進む方向は変えられないまま、歩き方は全く違った。綱を渡っているなら、一歩ごとに綱から落ちるようなフラフラした足取りだ。そう言えば、彼らは、初め三つ、暫くしてから四つの賽子を

振っていたが、私が振った時だけは、誰かが隠したのか、確か二つだけだった。その二つ分の力しか脚に掛けられなくて、それで真面に歩けもしないのか。二つ分とは、二本の脚を立たせておくだけの力かも知れない。

朝からずっと居て私達の遊びを見物していた痩せた犬が、直ぐ後を付いてきて、私の踝辺りに、盛んに黒い鼻を擦り付けてくる。踝も足の甲も特に変わったところはない。足の裏を調べてみると、左右に二つずつ賽子が埋まっているのが見付かった。巧く歩けないのはそのせいか。私は、足の裏の皮膚から、賽子をほじくり出した。地面に転がった賽子を、犬は四つとも口に含んだようだ。或いは四つは無理で、一つか二つ、土の中に隠したか。犬が、口をモグモグさせ、定まらない音程で短く吠えると、私は、上りの急斜面の前に来ていた。一面、粘土質の地肌が剥き出しで、ツルツルしていて、とても登れそうにない。ただ、足跡こそ付いていないが、他の者達は皆、登って行ったに違いない。綱渡りか何かの工夫を凝らして、楽々と越えて行ったのだ。それで足跡もないのだろう。

犬は、だらだらと垂らしっぱなしの涎で、足元をびっしょり濡らしていた。そこを前脚で忙しく引っ掻くので、前脚は泥だらけだった。私は、自分の指に唾を垂らしては、少し前屈みになって、斜めの地肌の上に、そこを駆け上る人の姿を描いていった。思うように線を引けず、何本も線を重ねている内に、ガ

ッシリした体付きになりすぎた。もっと、ほっそりした体を描きたかった。その隣に描き直そうと思うが、唾がなかなか出なかった。私は、犬を押し退け、爪先で泥を掻き回して、埋まっているかも知れない賽子を探した。一つ出て来たが、二つに割れていた。その二つ共を口に含んで、舌の上で転がした。唾が湧いてきたが、泥混じりなので、それは足元に吐き捨てた。それから、また湧いてきた唾を指に付けて、細身の人の姿を描き始めた。

　その線は、直に赤くなった。泥混じりの唾を吐いた時、割れた賽子の鋭利な角で、口の中を切ったに違いない。いや、それだけではない。口の中で割れた賽子を転がす内、口中を傷付けていたのだ。舌の表裏から歯茎から口蓋から、口の中が一斉にズキズキと痛み出していた。口から溢れ出そうなものを、描き掛けの人の姿に向かって吐くしかなかった。それは、その人の姿の下半分にだけ纏まって、ぶちまけられた。下半身が爆ぜたように真っ赤に脹れて、駆け上るどころか、体が重くて身動き取れずに困っているかのようだ。細い線だけでほっそりしたままの上半身は、何の役にも立ちそうにない。一緒に吐き出された割れた賽子が、その脹れた赤い下半身の真ん中に、少しだけ間を開けて、白く横に並んでいる。私は、犬の下顎をひっ掴み、その口の中の賽子を三つ取り出し、その赤い下半身に向けて振り出した。賽子は三つとも、真っ赤な中に埋もれた。犬は、哀れな声で吠えて、泥の中を転げ回って、すっかり泥に埋もれて、何処

にいるかも分からなくなった。

斜面の上から、先に行った最後の一人が、こちらを見下ろしているようだった。私は、どうしたらいいのか、そいつに大声で尋ねた。一日したら何もかも全てなくなる、と言うのが答えだった。私は、何処から何処までが、何もかもなのか、と聞き返した。そいつは、腕を振り上げ、そこから見えるものを見渡すようにしながら、突き立てた指で空に大きな四角を描いて、それを示した。そんな事をされても、私には、何処から何処までなのかはさっぱり分からないが、ただそれが、限られた範囲だとは分かった。私は、そいつに向かって腕を振り上げ、斜面全体を示すように、指で空に四角を描いてみた。そいつは頷いたようでもあった。斜面だけがなくなるなら、一日待つくらい何でもない。

陽が高くなり、斜面の至る所から、盛んに陽炎が立ち昇った。その熱で直に、私の唾と血で出来た人の姿は、焼かれてしまうだろう。それより先に、足元がカチカチに固まった。犬はもう、生き埋めのまま、二度と地面に顔を出せないのか。犬の埋もれた辺りを踏み付けてみると、意外にも、柔らかく波打った。硬いのはごく表面だけで、直ぐ下はまだ泥だ。ただ幾ら踏ん付けても、硬い表面は破れず、それならやはり、犬はもう、息をしに出ては来られないのだ。それとも、その硬い表面は自ら呼吸していて、酸素を地面の下に送り込み、犬は、その酸素を泥から取り入れるような別の生き物になって、生き延びているだろ

うか。

その地面が熱い。犬の心配どころではない。足の裏を焦がさないためには、忙しく足踏みするしかない。斜面を見ると、二体の人の姿は、熱のせいか、少しずつ斜面を登って行く。更に、斜面の下の縁から、黒い犬の姿が浮かび出て、その後を追う。結局また、私だけが取り残されるのか。それなら待つ理由もなくなり、足の裏も限界で、もう留まってはいられなかった。私は、真っ直ぐ後ろを向いて、斜面ときっちり垂直に歩き出した。それで、来た道を戻れている積もりだった。しかし、直にまた、そっくり同じ、上りの斜面が立ち塞がった。ただそこは、陽が斜めにしか当たらず、熱くはなさそうだ。粘土質かも知れないが、滑るのを承知で、構わずに登り始めた。

四つん這いになって、滑っても滑っても、犬が前脚で地面を引っ搔くようにして登った。その内に、引っ搔き出された粘土が、体に纏わり付いてきた。そのままでは体が重くなって滑るばかりで、それを搔き落とすのが、また一苦労だった。それを搔き落としている間は、どうしてもまた、滑るに任せるしかない。そうして私の周りは、平らだった斜面が、私の付けた引っ搔き傷で、すっかりズタズタになった。そしてそこに斜めの陽が差して、クネクネした影を片側にだけ纏った、そこを這い登ろうとする人の姿が、幾つも見て取れるようだった。ただの目の錯覚の筈が、中にどうしても、さっきの斜面に描いたのとそ

っくりの、粘土で出来た二つの人の姿から、目が離せなくなった。掘り出そうとしてみると、その二体は、ちゃんと人の姿に掘り出されるのだった。ガッシリした方は、唾のように透き通っていて、もう片方は、やはり上半身が細身で、下半身が異様に脹れて真っ赤であるところまで、そっくりだった。犬の姿も散々探したが、それらしきものすら見付からなかった。

　その掘り出した二つを、無理にも背負うと、もう斜面を登り切っていた。その先には、土を固めて作ったような大きな竈があり、私は、背負っていた二つを、竈に放り込んで、火を焼べた。後は待つしかない。雨がパラパラ落ちてきたが、離れる訳にはいかない。粘土の人形は、何時、独りでに動き出して、竈を抜け出すかも知れない。濡れた体に目を向けると、私は、真っ黒な痩せた犬だった。犬なら、犬の姿の粘土を焼くべきだ。人と犬の違いなど知れている。立っているものをただ四つん這いにするだけだ。まだ間に合う。私は竈を開けて、火に包まれてはいるがまだ生焼けの人形を、押し倒しに掛かった。私は、濡れた毛で覆われていて、火の中でも平気だった。しかし、人形共は私に逆らった。どれだけの時間、竈の中で取っ組み合っていたか分からないが、結局、二つとも私を振り切って、外に飛び出した。私だけが、ぐったりと横になって、火の中で体を休めるしかなかった。竈の中から外を見ると、闇の中に、火に包まれた二つの人の姿が浮かび上がった。二人はずっと、竈の前で、絡み合いながら

踊っていた。二人がそこに居ては、私は、外に出られないのだ。濡れた毛も乾いて、私は、竈の中で燃えて灰になった。雨に濡れて、二人を包んでいた火は、少しずつ消えていった。

東の方から、また明るくなった。一日が経ってしまった。ガッシリした唖のように透き通った方は、露が乾くように、光の中へと走り去った。最後の一人が言った通り、何もかも全てなくなった。そのなくなった所に向けて、もう一人が、真っ赤な下半身を突き出すと、その腹の一番脹れた辺りの、二つに割れた賽子の狭い隙間から、真っ赤に焼けたままの賽子が三つ振り出された。その転げ落ちて行くのは、なくなった筈の斜面だった。熱い賽子に焦がされた三本の線が、粘土の上をクネクネと下って行く。（二〇〇二年三月二十三日）

＊　　　＊　　　＊

地図

ずっしり重そうな青い制服を着込んだ四人の男が、肩を怒らせてテーブルを囲んだ。テーブルに拡げられた地図には、虫眼鏡で見ないと分からないくらい細かく、等高線と様々な情報がびっしりと書き込まれている。北に背を向けた

男が、地図の上を指でなぞった。彼はそこに、時計回りに輪を描いた積もりだったが、西に背を向ける男と東に背を向ける男には、その指は一本の線を描くように見えた。しかも、その線の引かれる向きは、二人の目には逆だった。南に背を向けた男には、その指の動きは輪を描いて行くようだとは見えたが、途中で目を離し、顔を上げて、北に背を向けた男の後ろの、大きな窓からの景色を、見晴らした。部屋にはその窓しかなく、南に背を向けた男の顔だけが、ガラスも何も嵌っていないそこからの光りを真面に受けて、青白い顔色を際立たせている。北に背を向けた男は、それを見咎め、地図に目を向けるように注意した。南に背を向けた男は、腰を浮かせて前屈みになり、窓からの光りを嫌うように俯いて、地図を真上から見下ろした。北に背を向けた男は、もう一度、時計回りに地図をなぞろうとしたが、一所を指す指を動かせなくなっていた。

　止まった指を見て、西に背を向ける男と東に背を向ける男が、椅子を乱暴に引いて、立ち上がった。それから、西に背を向ける男は時計回りに、東に背を向ける男は時計と逆回りに、黙って歩き出したが、二人は直ぐに、北に背を向けた男の後ろでぶつかった。西に背を向ける男は、北側の窓から顔を背けながらも、その窓の方を指差した。それに釣られるように、東に背を向ける男は、その指差す方に顔を向け、初めて窓からの景色を眺めた。なだらかな禿げ山が、真っ青な空にくっきりとした輪郭を浮き立たせた。

「輪郭だけが、今にも山から浮き上がりそうだが、そんな風に見えてしまうのは、俺が、変な方向に回ってしまったからか。」と、東に背を向ける男は、窓の方に顔を向けたまま言った。

「地図を読むのだけが仕事だ。」と南に背を向けた男が、立ち上がって言った。

「そうとばかりは限らない。」と北に背を向けた男が、立ち上がって言い返した。

「そうとばかりは限らない。」と東に背を向ける男は繰り返してから、禿げ山の少し手前の草原を、東から西に真っ直ぐ流れている細く黒っぽい川を指差して、「あの川は、今に涸れるんじゃないか。」と呟いた。

私は、窓の側でずっと立っていた。彼らからの指図を待つためかも知れない。川を見ると、川は、禿げ山の麓の方へと、急に向きを変えるようになって、そこで涸れた。そこまでは、変わらずに水は来ている。ただ、私の目には、川は二本あって、草原を流れる川はそのまま西に向かって流れ続け、禿げ山の麓の川だけが、途中で涸れているようにも見えた。

「確かに。途中で涸れた。地図にはそんな川は載ってないだろ。どうなってるんだか、行って調べてみたいが、地図を読むのだけが仕事だ。」と、南に背を向けた男は言って、西に背を向ける男に目配せした。西に背を向ける男は、

尖らせた左肩で、東に背を向ける男の胸を、二度ばかり鋭く突き立てた。東に背を向ける男が窓の方によろけると、テーブルの二人は、また静かに腰を下ろした。東に背を向ける男は、東に背を向けるまま、窓を跨いで外に出た。私は、彼に目配せされた訳でもなかったが、当たり前のように従った。少し行って振り返ると、窓の中で、西に背を向ける男が、西に背を向けるまま、テーブルの周りを時計回りに回っていた。南に背を向けた男は、顔を上げ、禿げ山の頂き辺りを、ぼんやり眺めているようだった。北に背を向けた男だけが、背中を丸めて、相変わらず、地図に見入っているようだ。しかし、その窓と私達との間を、何時渡ったのか、もう広い川が隔てていた。

　私達は、草原を過ぎ、禿げ山の麓に来ていた。川はすっかり涸れていて、その跡も風に吹かれて、殆ど消え掛けていた。その代わり、禿げ山の中腹に女が居て、同じ所を時計回りに歩き続けている。そこへ向かって二人で登り始めると、遠くからは乾いて見えたが足元はひどく泥濘んで、膝の辺りまで冷たい泥に埋まり、禿げ山と言うより泥の山だった。女の所へ辿り着くのに、何時まで掛かるか分からない。特に、東に背を向けるままの男は、横を向いてしか登れないので、かなり辛そうで、ジリジリと私から遅れだした。私は、見かねて、

「あなたは、川を調べに来たんじゃなかったんですか？」と、尋ねた。

「そう、お前と二人でだ。いや、二人でならそうだが、俺一人では違う。大

体、地図も読めないくせに、俺に一人前の口を利くな。」
「でも、あの女が何を知ってるんでしょう。」
「知らない事以外は、全部。」と、男は言って、私から顔を背け、とうとう足を止めてしまい、ゆっくりと泥に沈んで行くようだった。
「そうだといいんですが。」
私はまた、北を見上げて一人で歩き出した。男はもう付いて来られないだろうが、二度と振り返らないと決めた。すると泥濘はどんどん浅くなって、足取りも軽くなった。近付いてみると、女は、山の中腹の一ヶ所を歩いているのではなくて、殆ど山の頂きに居て、その頂上の周りを、時計回りに巡っているのだと分かった。
「お手伝いしたいんですが。」と、声を掛けると、その声だけが山の空気の中でひどく濁って、自分でも、心にもない事を言っているように聞こえた。
「前に私が、測量しながらあの辺りの地図を描いていた時、あなたは何処で何をしていたんですか？」と、女は、頂上から目を離さずに早口に言った。
「あの辺りとは？」
「邪魔が入らないよう、遠くから柵を巡らしてくれていたんでしょ。」
返事に窮していると、思い掛けず、東に背を向ける男が、直ぐ側まで登ってきていた。そこでは男は、東に背を向けるのではなく、北の山頂の方を真っ直

ぐ向いていて、女を見据えて、胸をはだけて見せた。透き通るように白く真っ平らな胸は、二ヶ所、小さく赤く腫れ上がっていた。その胸はまるで、額縁に嵌った絵のようで、東から昇る太陽と西に沈む太陽が、透き通った一つの空の中に描かれているようではないか。その見立ては我ながら満更でもない。それを女に、身振り手振りを交えて大袈裟に説明すると、女は足を滑らせて、そこに跪いた。男は更に女に近付いて、女にも胸をはだけるように求めた。そうすれば、そこに同じ赤い腫れが二つ見付かるだろう。いや、そうして互いに確かめ合われては、私だけが除け者だ。私は、慌てて男を蹴落とそうとした。しかし、男ではなく、女の胸を蹴ったのかも知れなかった。しかも女の胸は、山の空気のように透き通っていて、空振りしたのと同じかも知れなかった。私は、山の北側の斜面を、独り転げ落ちていた。

　そこは南側より急で、すっかり乾いていて、白い砂に塗れた私の姿は、山頂の二人からは、ちっぽけなシミのようにも見えているだろうか。少しなだらかになったようなので、私は、斜面をずり落ちながらも、何とか腹這いになって、顔を上げ、脚を低い方に向けて、二人の姿を見て取ろうとした。途端に砂が目に入って、それでも無理に見上げると、東西南北から四つの小さな太陽が、誰も居ない山頂を照らすようだった。私は、目を擦って、目の中から光る砂を取り除いた。いきなり脚に衝撃が来て、体は急に止まった。脚は、柵を破り掛け

ていて、それは山腹を左右にずっと続いていた。それなら私は、元に戻って、また女のために柵を巡らすのか。立ち上がって、測量する女の姿を探した。替わりに見付かったのは、私の周りで柵を巡らしている四人の男だった。私の柵は、もうボロボロで役に立たないと言う事か。しかし、彼らは、私の周りに柵を巡らしていた。

　立派な柵が出来上がると、女がそれを乗り越えて、私に近付いて来た。私は、測量の邪魔にならないようにと、慌てて横になった。もし見付かれば、男共に摘み出されるだろう。横になるだけで、砂塗れの私の姿は、地表と見分けられなくなって、隠れてしまうようだった。女は、柵に囲まれた中のあちらこちらを、何度も何度も、時計回りに回り続けた。私も何度か踏み付けられたが、歯を食い縛って、何とか声を立てずに遣り過ごした。私の体の凹凸もまた、山の斜面として測量され、地図に描き込まれるに違いない。その地図の正確さを損なわないために、私はずっとここに、動かずに横になっているべきだろう。ただ、柵の外で、女の仕事を見守る男共の内、東に背を向ける男だけは、何かおかしいと感付いているのか。風が吹いて、目に砂が入ると、また四つの小さな太陽が現れて、女を四方から照らし、女の体を干涸らびさせてゆくようでもあったが、そのままにしておくしかなかった。（二〇〇二年三月二十五日）

*　　*　　*

沓脱ぎ

　何処からともなく現れて、昨日あたりから松林の中にテントを張っていた男共が、黒い棒を振り立て、獰猛な歓声を高々と上げて迫ってくる。逃げるには、曲がりくねった坂を登るしかない。両脇は、高い草がびっしり伸びて踏み込めない。肩に掛けた白い布の大きな包みが、踏み出す足の邪魔になる。登る程、歪な形の大粒の砂利がゴロゴロとばら撒かれていて、女の小さな足では、尚の事、歩き難い。一歩一歩踏み損なって足首を捻ってでも、前に進むだけだ。踝などは、何度も石ころに打ち当たって血塗れだろうか。確かめる余裕もない。

　少し先に、白い壁が見えた。その建物に逃げ込むまでに、何とか男共を撒いてしまいたかった。いや、それだけではダメで、奴らから、建物を隠すのだ。女は、左の胸のポケットに手を突っ込んだ。逃げている間、ずっとジャラジャラと鳴っていた。中から硬貨を全て掴みだす。もう使われていない珍しいものばかりで、大事に取って置いたのだった。女は、振り返った。耳障りに喚き立てている割りには、男共も、砂利には難渋しているのか。硬貨を両手にくるんで、思い切り振った。ジャラジャラいう音が、砂利道に跳ね返って響きながら

転げ落ち、奴らに降り掛かったのを見届けると、両手をパッと開いた。硬貨は、道とその両脇の草叢に撒き散らされる。男共の群れもまた、それを追ってパッと散った。素速く女は向き直り、白い壁の奥に走り込んだが、そこまではもう地面は平らで、白い砂だけだった。ちらりと足を見たが、傷一つなく、白くて綺麗なものだった。

　沓脱ぎの先は、奥に細長い。天井は頭が届きそうな程低く、右側はずっと白い壁で、板張りの左側の上の方に小さな切り窓が並び、光りを採っている。床が冷たくて足の感覚を奪う。歪な星を象ったような色違いの小さな衣装が、あちこちに散らばり、何人かの下着姿の子供達が、それに着替えようとしている。女は、自分も下着姿なのに気付いた。咄嗟の事で憶えていないが、男共の目を晦ますために、ここに入り込んで直ぐ、上着を脱ぎ捨てたようだ。替わりに着られそうなものはないか、子供達の間をウロウロ見て回ると、床に脱ぎ捨ててあるのが幾らでも見付かるが、どれも萎びた葉っぱのように薄っぺらで、踏ん付けても分からない。子供達は、着替えを済ませ、部屋の一番奥の板張りの階段をどやどやと登って、皆居なくなった。

　円椅子に掛けて、背中を白い壁に凭せ掛けている者が、一人残った。女は、その直ぐ横の円椅子に掛けて並んだ。皺くちゃな横顔を見上げなければならない程の大柄な男だった。男の着込んだ衣装は、そこら中に色とりどりの襞を取

って波打たせ、山あり谷ありの入り組んだ形のものだった。女は、相変わらず薄着だったが、何時着替えたのか、それは下着ではなくて、緑色の光る衣装で全身をすっぽり覆っていた。それでも白い布の大きな包みだけは、肩に掛けたままだ。細長い床を左右に見渡すと、衣装だと思っていたものが、どれも本物の萎びた葉っぱに見える。実際、葉っぱの匂いのする風が、部屋を吹き過ぎて行く。その風に頬を撫でられると、女はじっとしていられなくなって、立ち上がって、男の前でステップを踏んだ。唐辛子のように先の尖った、綿を詰めたフワフワの、真っ赤な靴を履いていた。それでも冷たいのは変わらない。肩に掛けた大きな包みがグルグルと振り回され、中から乾いた虚ろな音が漏れて出た。坂でも、砂利を踏む足音に掻き消されてはいたが、同じ音はしていただろうか。

　それは、女の耳には、水の揺れる音に聞こえた。そう聞こえてしまうなら、包みに水が入っている事にするしかない。水を切実に求めているのは、萎びた葉っぱだろう。女は、包みの口を少し開け、ステップを踏みながら細長い部屋を動き回り、葉っぱを拾っては、それを包みの中に押し込んでいった。そうして床に落ちているものが綺麗さっぱり片付くと、部屋の奥の方に、男がもう一人居るのを見付けた。その男は、殆ど灰色一色だった。女に見付かったと気付いたようで、直ぐに目を逸らし、板張りの壁際を、腰を屈めて鼠のように走っ

た。土足で、床に汚い足跡を残しながら、床をミシミシと鳴らした。そのまま沓脱ぎまで行くと、男は素速く靴を脱いだ。沓脱ぎには靴が溢れ返って、足の踏み場もない。逃げたいのなら、靴を踏ん付けて行けばいいものを、それが出来ないらしかった。いきなり舞い上がろうとでもする積もりか、そこで両腕を拡げた。結局、蹲くようにして靴の中に倒れ込んだが、今度はそこを泳ぎ渡ろうとでもするように、拡げたままの両腕をばたつかせた。靴が幾つも、飛沫のように跳ね上がった。

　このまま男を逃がせば、坂の男共に、ここの事を知らせないとも限らない。女は、近付けるだけ近付いてみた。どうしてもっと近付けないのか。足が動かない。ひょろりと長い赤い靴のせいだ。沓脱ぎの中の男に飛び掛かるには、男に倣って、自分も靴を脱がなければならないようだ。その靴は、脹ら脛の直ぐ下まで、ぴったりと足に密着している。密着どころか、すっかり皮膚に溶け込んでいる。白い脹ら脛と赤い靴の境目がぼやけて、ピンク色になっている。靴を脱ごうとするなら、そのピンクの辺りを引き破って、足の皮膚を丸ごと剥がすのと同じ事になりそうだ。そうして、女が、ただ足元を眺めるしかない内に、男は、何とか靴の海を渡り切って、外に出て、裸足で走り去った。

　白い壁の奥から、子供達の喊声が伝わってきた。沓脱ぎの脇にも、板張りの階段があって、そこから星の姿の子供達が、お喋りをしながらどやどやと戻っ

て来た。皆、晴れ晴れとした表情で、女の前で星の衣装を脱ぎ捨て、沓脱ぎの前に集まった。それから、それぞれ色違いの分厚い葉っぱのような形の靴を脱ぎに掛かった。それを女はじっと観察したが、やはり、靴は、皮膚のようになってしまって脱げないようだった。中に一人だけ、脱げた子がいる。その子は、別の子に何かを渡して、先程の男のように、靴の海に飛び込み、外に向かって泳ぎ始めた。渡されたのは小さな刃物のようで、それで、靴と皮膚の境に切れ目を入れて、そこから皮膚同然の靴を引き剥がすのだった。刃物は順々に手渡され、子供達は、靴を脱いでいった。女は、最後の子供からそれを受け取ろうと待ち構えたが、どの子が最後なのか分からなくなって、刃物も見失われた。色の着いた皮膚そっくりの破れた葉っぱの形の靴だけが、幾つも残された。

　大仰な衣装の大柄な男が、そうしないと頭が天井に閊えるからだろうが、背中を丸め腰を屈めて近付いて来て、女の手を取った。そうして、部屋の奥まで進み、板張りの階段を二人で登った。階段は、狭い中で右に曲がっていて、五、六段も登ると終わり、その先は直ぐ舞台で、客席には坂で女を追っていた男共が陣取って、黒い棒を打ち合って騒いでいた。

　森の書き割りの真ん中に腰を下ろす大柄な男は、多分、森の主か何かで、だとすれば、女は差詰め、それに仕える妖精といった役回りか。星達が舞台を去ったなら、夜が明けようとしているのだ。男は、やっと女の手を離し、

「籔を引きに来たんだろ。さっさとやったらどうだ。日が暮れて、すっかり暗くなってしまった。」と、芝居掛かった怒鳴り声を上げた。
女は、肩に掛けたままの白い大きな包みに手を突っ込んだ。その手が掴み出したのは、歪な形の大粒な砂利石だった。
「やり直し、やり直し。」と、客席の男共が、棒を打ち鳴らして、喚き立てた。
男共などに言われなくても、やり直したい。その石ころを足元に投げて、また包みに手を突っ込んだが、何度やっても、出てくるのは砂利石だった。ただどれも、草の匂いがして、耳に当てると、中から水の揺れる音が聞き取れた。しかし、他には何の変哲もない。女はもう、男共の声など聞こえなくなって、包みから別のものが出て来るまでは、何が何でも已められなくなった。その内、舞台の上は砂利が敷き詰められて、草の香りが立ち昇った。男共は、その香りに酔ったようなトロンとした目付きで涙を浮かべ、棒と棒を打ち合わせるだけではなく、互いの体を棒で激しく打ち始め、水の足らない草のように、段々とぐったりしていった。それを見て女は、砂利を思い切り踏んで、舞台の上を歩き回った。水の揺れる音が響き渡って、たっぷりした地下水の速い流れを、間近に引き寄せたようだった。男共には、決して水は回さない。
森の主の役の男が、いきなり幕を引き、女の手を引っ張って、二人して舞台

裏へと引っ込んだ。細長い部屋で、何人かの男女が、お尻を床に着けて、お菓子を食べながら談笑している。お尻が冷たくないのかと女は心配になったが、彼らは、二人を見ると立ち上がり、沓脱ぎの方に向かった。その一番後ろの者が、

「足は、冷たくないんですか？」と、笑いながら、女に声を掛けて来た。

唐辛子のような赤い靴は、何処かに行ってしまって、女の素足は、血で真っ赤だった。舞台の上で、散々砂利を踏ん付けたからだ。彼らは、まだまだし足らなそうに、楽しそうにお喋りしながら、普通に靴を脱ぎ、脱いだ靴を沓脱ぎに綺麗に揃えて、出て行った。

二人だけになると、白い壁を通して、男共が騒ぎ立てているのが聞こえてきた。男は女の手を取って、部屋の奥の階段を登り、また二人で舞台に立った。男共は、騒ぎ立てているのではなく、互いに棒で打ち合い過ぎて、萎びた草どころか、彼らの皮膚は硬い樹の皮のようになり、それを尚も棒で打って、中が空っぽのような乾いた音を、盛んに鳴らしているのだった。女は、白い包みに手を突っ込んだが、もう何も掴み出せなかった。それを逆さにして振ると、たっぷり水を吸って舌ビラ程も厚みのある、濃い緑色の葉っぱが、何枚も何枚も、ポロポロと零れ出た。男共の体が一斉に揺れた。その葉っぱ目掛けて飛び掛かりたいところだろうが、彼らの姿は、まるきり低くてずんぐりした、どす黒い

樹の幹のようで、そこに根を下ろしてしまったかのようだ。彼らはただ、その体の中で、ジャラジャラいう音を鳴らすだけだった。女の耳にはそれが、女の持っていた珍しい硬貨の音ではなく、在り来たりの安物の硬貨の音だと直ぐに分かった。（二〇〇二年三月二十七日）

*　　*　　*

赤ん坊

　何度も復唱した筈だったが、歩いている内に、忘れてしまっていた。道は、ただ真っ直ぐで、しかもずっと、僅かな下り勾配に違いない。歩き出したら、速くなる一方の足を緩めようにも、どうにも出来ない。段々それが恐くなって、どうしたら足を止められるかで、頭が一杯になってしまって、忘れてはいけない事が、何処かへ行ってしまった。そう気付くと、忘れたまま先へ進むのも、また恐くなる。速すぎる足への恐さだけにしておきたいが、そうもいかない。忘れてしまった恐さが、速すぎる足よりも、先へ先へと駆り出される。しかし、仮に踵を返す事が出来たとして、何処へ戻れるのか。決して戻れないから、念には念を入れて何度も復唱したのではなかったか。それならもう、恐れる事も、

綺麗さっぱりなくなっているのだろうか。

そう思うと初めて、女は、間近を飛び過ぎる空気より少し先まで、目を向けられた。ずっと何も遮るものもない道だったが、その少し先に、葉も何も付けていない黒く細い木の枝が一本、左から鞭のように伸びている。それは、直ぐに、目の前に迫った。女は、目をしっかりと見開いて、強く両手でそれを掴んだ。枝から決して目を離していない積もりだが、枝どころか道までも、ぐるりと回って、女の前から消えた。その歩く勢いのまま、体が急に、どのようにか道から逸れたようだ。

公園のベンチの端っこに腰掛けている男が、そっぽを向いた。それなら女は、道の脇の公園に入り込んだのだ。男は、背中合わせに赤ん坊を負ぶっていた。赤ん坊は、目を大きく見開いて、高い所を見上げている。女は、枝を握ったままで近付いた。枝は、女が前に進むだけ、ズルズルと伸びる。枝ではなくて、蔓のようだ。赤ん坊は裸で、荒縄一本で男の背中に縛り付けられていて、女が直ぐ側に寄って行っても、高い所を見上げたままだった。腹に巻かれた荒縄は、腐り掛けていて、その縄を千切りさえすれば、男から赤ん坊を奪える。女は、蔓を放し、少し前屈みになって、その縄に手を掛けようとしたが、手は別のものを掴まえていた。それは、女がずっと懐に抱いてきたもので、前屈みになって、懐から零れそうになったのだ。赤ん坊の顔が、直ぐ間近にあって、その黒

い瞳の中に、女の姿が映し出されていた。その頬の痩けた女の顔の下に、亀の甲羅の模様が細かく浮かび出た。それなら、懐に抱いているのは、海亀か何かだろうか。小さな瞳の中の甲羅の模様は、ジリジリ動いて何かを狙っているようだ。前には、赤ん坊しかいない。そのふくよかな肉が目当てに違いない。

男はそっぽを向いたままで、顔を手で覆い、ひょっとしたら啜り泣いているのかも知れない。全く取るに足らない。問題は、赤ん坊が見上げている先だ。そこには恐らく、赤ん坊を見下ろしている者がいるに違いない。その者の目に触れるままで、懐の海亀に赤ん坊の肉を食わせる訳にはいかない。女は、赤ん坊の目を片手で塞いだ。そうしてしまえば、その見上げる先もなくなって、誰も赤ん坊を見下ろせなくなるのではないか。赤ん坊の閉じた瞼の表面が、震えるように細かく波打つのが分かった。その下で、目玉が動き回っている。女は、自らの両手の人差し指の腹を、そっとその両瞼の上に乗せた。指の腹に、目玉の動きが一々はっきりと伝わった。それは、順々に文字をなぞっている。知らない文字だったが、女はそれを、頭の中に刻み付けていった。暫くして、目玉の動きは元に返った。それを、頭に刻み付けた文字と照らし合わせてゆくと、間違いは一つもない。文字の列は、正確に女の頭の中に並んでいた。

それを読めないのは、復唱した事を忘れてしまったからだろうか。復唱出来て、文字を読めていれば、ここで何をしたらいいかも分かっただろう。自分に

読めないなら、書き表すべきだ。読める者が誰かやって来るかも知れない。女は、蔓をまた手に取って、それをグルグルと巻いて棒を作ろうとした。初め巧く行かなかったが、途中から巧く行った。ただそれは、自らの体に蔓を巻き付けたからだ。そうして、先の尖った棒が出来上がったが、女の体は、上から下まで蔓でグルグル巻きになっていた。しかしそれで、何の支障がある訳でもなく、女は、自らの体を使って、地面に文字を書いていった。それを見詰める赤ん坊が、赤ん坊と同じくらいの大きさのものを抱いていたが、海亀ではなさそうだ。

書き終えると、蔓は独りでに解けた。それでもまだ、蔓は体に纏わり付いたので、女は、手足をバタバタさせ、やっと全て取り除けて足元を見ると、書いたばかりの文字を、すっかり掻き消してしまっていた。赤ん坊の泣き声が聞こえた。見ると、ベンチの真ん中に仰向けになって、手足をバタバタさせて泣いている。男が、その脇に立って、懐に何かを抱き抱えている。切れた荒縄が、死んだ蛇のようにベンチの脚に絡まっていて、女が、そのクネクネした形を目でなぞると、文字の列は、女の頭から消え失せた。男が、懐に目を落として、仰々しく聞き慣れた文句を唱え始めた。女が復唱させられたものだ。それを書き付けたものを、女はずっと懐に抱いていて、それを見ながらなら、何時でもその文句を唱えられる。女が忘れていたのは、その事だった。しかし、見知ら

ぬ男にそれを勝手に唱えさせておいて良い筈がない。女は、男に駆け寄ったが、それより早く、男はベンチの後ろに身を翻した。女は直ぐに追おうとしたが、荒縄が足に絡まって、無理に進もうとしても虚しく体が浮くだけだ。体重が軽すぎて、縄を断ち切れないのだ。赤ん坊を懐に抱くと、縄は直ぐに切れた。

　ベンチの後ろは、真っ直ぐな道が続いていたが、ひどく暗くて歩き難かった。蔓が手に触れたので、それを掴むと、それに導かれるように、自ずと足が前に出るようになった。男の姿も見えないし、声を聞こえないし、果たして男を追っているのかどうか分からないが、蔓を手放したら、愈愈どうしていいか分からなくなるので、そのまま進むしかない。まさか来た道を戻っている訳でもあるまいが、どうやら道は、僅かな上り勾配のようだ。鳥の鳴き声が、周りから聞こえて少し明るくなった。鳥の口の中が光っていて、それが道を照らすようだった。手元を見ると、赤ん坊が蔓でグルグル巻きになっている。女の手はずっと、赤ん坊の体に蔓を巻き取っていたのだ。そうと分かっても、已められない。足を止める訳にはいかない。赤ん坊はすっかり、先の尖った太い棒のようで、それでも更に蔓を巻くと、段々と細長くなって行くようだった。

　鳥の口に照らされて、男の姿も見えた。近付くと、男は倒れ込んでいて、腰から下しか見えなかった。足を持って引っぱると、穴に埋まっていた腰から上が出て来た。懐には何も抱いていない。穴を覗くと、奥の方から赤ん坊の泣き

声が聞こえてきた。女は、穴に頭を突っ込もうとした。鳥達が、一斉にけたたましい鳴き声を上げた。赤ん坊の泣き声が消えかけた。女は、すっかり細長くなった先の尖った棒を、順々に投げ付けては、鳥を一羽一羽落としていった。それから、胸に穴の開いた鳥達を全て集め、それを先に穴の中に放り込み、また穴に頭を突っ込んだ。鳥達の血糊で、穴はヌルヌルしていて、女の体は、穴にするりと入って、そのまま狭い中を、鳥達の後を滑っていった。

瀬死の鳥達が鳴くたびに、穴の中は照らされたが、そのせいで、赤ん坊の泣き声は聞き取り難くなる一方だった。しかし、滑って行けば何時かはそこに辿り着けるに違いない。急に目の前が明るくなると、行き止まりだった。穴の中はそこだけ少し膨れていて、体の自由が利いたが、鳥達が一纏まりに積み上がっているせいだ。鳥達を掻き分けると、段々とまた狭くなった。掻き分けた先に、間近に赤ん坊の泣き声が聞こえた。女は、その声のする辺りを懐に抱こうと、蛇のように身を拗らせた。その内に、棒の蔓が解けて、中から赤ん坊が出て来たが、赤ん坊は三人になっていた。赤ん坊の背丈を三人分足せば、ちょうど棒の長さだろうか。女は、ひとまず蛇の真似は已めて、三人の赤ん坊を、蔓で体に縛り付けた。それから、また、その体を、声のする辺りに擦り付けると、三人の赤ん坊の六つの柔らかい手が、女の体の脇腹や腋の下を掻いた。女は擽ったくなって、甲高い笑い声が止まらなくなった。それは、狭い穴を震わせ、

そのままでは、その自らの笑い声に圧し潰されてしまいそうだ。瞬きすると、震える穴の表面から、亀の甲羅の模様が、止め処なく滲み出るようだった。仕方なく、小さな六つの手をもぎ取って、笑いの止まらない口に押し込んだ。

笑いが収まると、穴の行き止まりで、独り泣き喚く赤ん坊だけになった。その小さな喉が嗄れ果てると、頭の中では、女の復唱させられた文句が、何度も何度も繰り返された。（二〇〇二年三月二十九日）

＊　　＊　　＊

家

凍った道の端っこをノロノロ戻って、家の前まで来た時、潮の香りをプンプンさせた泥塗れの子供が、小さな紙の箱を差し出した。そこは庇の陰で暗くて、箱に何か書かれてあるようだが、読めなかった。子供が気を利かして、掌の中の小さな火を翳した。少し地面が揺れて、火が直ぐに風に消えると、ずっと荒い息遣いのままの子供は、がっかりした顔で、「中の物を食って欲しい」というような事を、聞き慣れないアクセントでぼそぼそと呟いて、名残惜しそうに背中を向けた。その立ち去って行く先は、ここよりずっと明るくて、洋服屋が、

斜めに逸れて行く緩やかな下り坂に沿って、軒を並べていた。箱を渡されたままの女は、もし箱を返そうと子供の後を追っても、服を買わされる羽目になるだけのような気がして、そんな金はないので、煤けた硝子戸を開けて、自分の家に入った。

　硝子戸の奥は、誰も居なくて、何時も何か薬品のような匂いがしていて、狭い。薄っぺらな板の壁に囲まれるだけで、そこには窓もドアもなく、部屋は何処とも通じていない。女は、硝子戸の方を向いて、一つだけある木の円椅子に掛けた。箱を開けると、銀紙の包みが幾つも入っていて、銀紙を開くと、中から赤い肉が出てきた。道を隔てた黒い塀に、殆ど裸の男達が何人か、間隔を開けて、へばり付くようにしている。黒い塀を、黒く塗り直しているようだった。女は、硝子戸越しにそれを眺めながら、炭火で肉を焼いては、何の味付けもせずに独りで食べていたが、男達の仕事振りの鈍さが、段々気に障ってきた。ちっとも動かないナメクジの一団のようにさえ見えてくる。肉を食い尽くすと、女は硝子戸を開け、人も車も通っていない道を渡って、真ん中辺りの、男の一人に近付いた。男が刷毛を上げ下げする度に、肉付きのいい背中の、白く柔らかそうな肌が、女の目の前で、クネクネと躍った。女は、息が上がっていて、微かに雪混じりの冷たい風が鼻へも口へも吹き込んできて、話し掛けようにも口が動かなかった。また地面がぐらついたが、先程より揺れは大きく、女は、

足を滑らせそうになって、塀に手を付いた。塀は、塗り立てのペンキでヌルヌルしていて、まだ足元の定まらない女は、付いた手に体重を掛けて、塀を押すしかなかった。そこから塀全体が、ミシミシと音を立てて波打った。そのせいで、男達は皆、パタパタと地面に落ちた。彼らは、脚立に乗って作業をしていたのだった。女が話し掛けようとした直ぐ側の男だけが、そのままだったが、女を見下ろすと、

「臭い息を何とかしろ。」と、怒鳴った。

女は、顔を上げ、風に逆らって男に向かってその息を吐き掛けた。男は知らん顔で、また塀を塗りだした。女は、脚立を思い切り蹴ったが、蹴倒す事は出来なかった。左右を見通すと、地面に落ちて腰を打ったかして立ち上がれずにいる、どの男の所にも、肉付きのいい色白の女が一人ずつ駆け寄って、男を抱き起こそうとしている。

「もう使い物になるのは、あんただけじゃない。」と、女は言った。実際、女の力では男のでかい体を起こす事は出来ず、それぞれの場所で、何時までも抱き合っている恰好だった。

「何で、あんただけ落ちないの？」

「お前の息を何とかしろって言ってるだろ。自分で臭いのが分からないのか。」

「でも、そっちの方が風上じゃない。」と言って、女は脚立の上の方を掴ん

で、体重を掛けて揺すぶった。

　男は、グラグラする脚立から降り、女の風下に回り込んで、わざとらしく顔を顰めてから、ペンキをたっぷり含ませた刷毛を、女に向けて振り回してきた。黒い筈のペンキが、女には真っ赤に見えた。ペンキは、女の胸から腰にかけて斜めに掛かり、それはやはり赤かった。この塀では、赤を塗り込める程、黒が際立つに違いない。塗られた途端に、赤は黒の中に隠れて、黒を、ただ黒であるだけよりも黒くするのだ。女は、今度こそ面と向かって男に息を吐き掛け、腰を抜かして噎せている男から刷毛を奪い、それを塀に投げ付けた。そこだけ、塀が真っ赤になった。それを見た男は、女の臭い息に喉をやられたようで、だみ声で苦しそうに笑い出した。肉付きのいい色白の女が、男に駆け寄ってきて、笑いが止まらず地面を這いずっている男を、軽々と抱き起こした。二人は、抱き合ったまま、洋服屋の並ぶ坂の方に歩き出した。他の男女は、もうその先を行っていた。

　女は、刷毛を拾い上げて、塀に押し付けた。地面が横に揺れ、押し付けた刷毛が滑るまま、横一文字が赤く引かれたが、その最後の辺りは掠れていた。ペンキを入れたバケツを探したが見当たらない。息を吐き掛けると、冷たい風に吹かれて硬くなり掛けた刷毛の先が、ペンキを含んだように赤々と脹れた。女は、刷毛に息を吐いては、塀を赤くしていったが、何度も激しく息を吐きだし

たせいか、その内に吐き気を催して、手を止めるしかなくなった。塀を見渡すと、赤と黒の横縞の模様が出来ていた。横線ばかり引いていたのだ。それは、男達から理不尽に仕事を取り上げたという女の悪行を、自ら暴き立てているようでもある。吐き気など直ぐに収まり、また刷毛に息を掛けてその横縞を消そうとするが、目の前の横縞に釣られて、どうしても手は横に掃いてしまう。女は、刷毛を投げ捨て、素手で、まだ乾いていない赤い線を掻き回したが、横縞はビクともしなかった。その代わり、両掌が真っ黒になった。余りに黒すぎて、影だけ残して、掌がなくなってしまったかのようだ。そのままにしておいたら、本当になくなってしまうかも知れない。何とかしようと、刷毛を拾って、掌にペンキを塗り付けたが、全く影のように見難いままだった。刷毛を右に左に持ち替える内に、ペンキが垂れて、肘から先が、ペンキ塗れの真っ黒になっていた。女は刷毛を捨てた。

　掌と思われる辺りに狙いを定め、息を吐き掛けてみた。見えない指先に息の温かさは伝わって、手はまだ、なくなってはいないようだが、黒すぎるのは変わらない。息に反応するのは赤だけで、黒くなってはどう仕様もないのか。塀の赤い線に息を吐き掛けてみると、そこだけウルウルと濡れてゆくようで、急いでまた、そこに掌を擦り付けた。すると、小さな赤い塊が、黒いままの掌の中に掴み取れた。それは、生の肉片に違いなく、ひどく臭かった。女は、赤い

線に息を吐き掛け、掴めるだけの肉片を掴んでは、塀から赤を毟り取っていった。横縞は、所々ぼやけはしたが、少し離れて見れば殆ど変わっていない。一方、塀の前には、女が投げ捨てた生肉が散らばって、幾ら冷たい風に吹き払われても、臭い匂いが立ち上った。息を吐きすぎて嗄らした喉が、冷たい風にやられてズキズキと痛み出し、もう息も吐けなくなった。女は、腰を落とし、散らばった赤い肉を拾い集めて回ったが、ただ他に出来る事がないので、そうしただけだった。

　洋服屋の並ぶ坂の方で、短い音が鳴った。見ると、その屋根の直ぐ上の低い空に、小さな花火が上がっていた。明るかった筈が、そちらの方がずっと暗くなっていて、洋服屋の店内には明かりが灯り、店の前の道を白く輝かせている。花火が合図なのか、どの店の中からも人がゾロゾロと出て来て、女の塀の方に向かって歩いてくる。花火は、間を置いては一つずつ上がり、その時だけ皆、のろのろと後ろを振り返るが、その時には、花火は殆ど萎み掛けている。女は、生肉を抱えて、花火と、一塊りになって近付いてくる者達を、ただ眺めていた。女の居る方に、彼らは先ず、夜を運んできた。それから風が已んだ。

　黒く塗られた塀は、闇の中に溶け掛かり、赤と黒の横縞も暗くぼやけた。遠くからは子供の声も聞こえたが、間近に来ると、彼らの中に子供は居なかっ

た。男と女が入れ替わりに、通り過ぎざま女の懐に腕をにょきっと伸ばして、女の抱える生肉を一片ずつ掴み取り、立ち去っていった。殆どの者が笑顔さえ見せて、誰も臭いなどと言わなかった。全員がそのようにして、また誰も居なくなり、女の抱える肉片も全て捌けた。改めて塀に目を凝らしたが、横縞は少しも見て取れなかった。洋服屋の店の明かりが段々と消えて行ったが、花火はずっと同じ調子で続いた。

　店の明かりが全て消え、坂道もすっかり闇に沈んで花火だけになると、そちら側の塀の一番端の辺りに、小さくチカチカと二つ、光る点を見付けた。時々消え掛かったりして、何時見失われるか分からない。女は、それに向かって走った。脚は、今にも折れそうな、腐りかけの棒のようだった。地面が揺れて、塀全体がミシミシと高く虚ろな音を長々と響かせた。その音を聞く限り、脚が折れるより先に、塀の方が余程、今にも崩れ去って、粉々になりそうではないか。二つの点は、塀から顔を覗かせている子供の目だった。子供の見ている方を振り返ると、塀の反対側の端を過ぎた辺りから、道は何本にも分かれ、その細く拗って下って行く先にある、それぞれの家の明かりの中で、一組ずつの男女が、肉を焼いて食っているのが見られた。

　そちらでも花火が上がった。暫くすると、その家々の明かりは、萎びて行く花火のように、闇に流れて別々の方向に消えた。（二〇〇二年四月一日）

*　*　*

滝

　右の頬に何回か針を刺して、そのまま冷たい横風に暫く吹き晒した。犬に背負わせた青い硝子の壺の表面に顔を映すと、その頬一面に、赤い模様が浮かび上がっている。それから周りを見渡し、見て取れた地形と赤い模様を頭の中で重ね合わすと、女は、自分が何処に居てどちらに向かって進めばいいか分かった。そちらに踏み出すと、犬が哀れっぽく鳴いて後退りした。仕方なく、硝子の壺を犬の背中から外し、壺を腋に抱えて独りで歩き出した。殆ど白一色だった。元々白っぽい土の上に、そこに叩き付けられた霙がそのまま凍ってへばり付いていたり、北を向いて傾く所ではうっすらと粉雪が被っていたり、低い所では泥水の氷が張っていたりした。しかしそれらは、光りの作用か、それとも女の目が色を見て取れなくなったかして、そう見えるだけなのかも知れない。実際、空はどこもかしこも真っ白く輝いて、地上を一様な白い光りで照らしている。それなら大抵の陰も掻き消されそうだが、女の目は、その光りを受けるものの表面の、その傾きに応じたそれぞれに違う微かな陰り具合を炙り出し、

その濃淡から、ものの形をくっきりと見て取った。

急に重くなった足が止まると、壺も、するりと腋を滑り降りて、自ずと地面に据わった。腰を屈め、足元の雪か土か分からない柔らかいものを手で押し退けると、透き通った氷の表面が現れた。顔を近寄せて覗き込むと、透き通ってはいたが、氷の中は白い光りを拒んで、全く暗く沈んでいた。女は、その暗い中に目を凝らした。目の前の氷の表面がそこだけ小さく窪んで、そこから、色の着いた糸のような光りの筋が、一束に纏まって暗い中に伸びた。束は、直に一本の糸のように撚り合わされ、すっかり細くなったが、色の量は変わらないようだ。女は、自分の目の中の光りが、暗い氷に全て流れ落ち、そのまま目が見えなくなってしまうようで、その光りの一筋を手繰り寄せようと、思わず腕を差し延べた。その光りの筋のすぐ脇に、それに照らされて色の着いた、自らの掌が現れた。それならそこは、氷ではなくて、水なのだ。温かくも冷たくもない。指で軽く光りの筋を撫でると、微かに温かみを感じたが、それきり掌は動かなくなって、暗い水の真下へと止め処なく落ち込んで行く目の光りを、掌で遮るような事は出来なかった。

それでも、そこからゆるゆると浮き上がるように、掌は引き上げられた。掌に着いた色も引き上げられたが、目から落ちる光りの筋は、目をそこに釘付けにして、ビクともしなかった。女は、その蹲った姿勢のまま、その水溜まりの

周りの白く柔らかなものを手で掻いては、そこを掘り起こしていった。水溜まりと言うより、どうやらそこには、水を満たした四角い硝子の水槽が、埋まっているらしかった。顔の位置は、水の表面の真ん中辺りから動かせないが、体は、そこを中心にクルクル回れた。直に、水槽の側面がすっかり剥き出しになったが、側面からも白い光りは拒まれて、中は暗いままだ。深さは、女の腕の長さよりやや浅い。そこで、水槽をきつく抱き締めて腰を上げられたら、足はもう軽くなっているのだから、水を真下に見下ろしたままの恰好でも、先へは進めるだろうか。女は、両腕を、水槽の側面に巻き付けようとした。すると、腕は、その側面を透き通り、横から水の中へと沈み込んだ。水槽ではなくて、ただ水だけで、氷のように四角い形を保っているようだ。両腕は、水の中で輪を作って、垂直な光りの束を囲んで止まった。それより光りの束に腕を近付ける事も、腕を解く事も出来なくなった。それなら、光りの束とその周りの水を、きつく抱き締めているのではないか。冷たい風に吹かれてすっかり固まってしまった、ずっと屈めたままの腰に力を込め、ゆっくりと背筋を伸ばしていった。

　立ち上がると、自ずと腕は解けた。顔を上げると、その目を向けた方向だけが暗くなって、そこに色の着いた目の光りだけが、細く真っ直ぐに伸びた。その先に何を見通せるのでも、その一条の光りが、その行き着く先に何かを照らすのでもない。だから、足元の四角い水が埋まっていた辺りを見下ろしても、

暗いだけで、そこがどうなっているかは分からない。その暗い周りが、相変わらず白いばかりの光りで照らされているのまでは見て取れたが、そこにあるものの形は、一つも捉えられなかった。

　女は、手探りで壺の首を掴んで引き寄せた。それに目を向けても、暗いだけで壺の形は見えて来ないが、女の目の光りが、点のように小さな壺の口に、一筋になって注ぎ込まれてゆくのは分かった。その光りの筋はもう、様々な色の糸を撚り合わせたようには見えなくて、ただ壺の口を見失わないように光ってだけいた。その代わり少しずつ壺の形が見えて来て、その中では、青い硝子を通してでも、様々な色がぼやけた泡のようになって、上へ下へと動き回っている。そして、女の目から光りが途切れ、その切れた端が壺の口に吸い取られると、暗い周りを囲んでいた白い光りも退いて、何処もただ暗いばかりになって、壺だけが、色とりどりに輝いた。ただそれは、その外のものを一切照らさない。壺の首を掴む女の手さえ、暗い中に溶けたまま朧にも見て取れなかった。壺を抱え上げても、それだけが宙に浮くようだ。いや、女の姿は全く見えなくて、それを抱えているのかどうかも、分からなくなってしまった。

　見失われた自らの体を確かめるには、もう壺をどうこうしてもダメなら、ただ地面を踏みしめて前に進むしかないようだ。女が一歩を踏み出すと、そこに地面はなかった。女の体は宙を捩れて、頭からその地面のない方へ、引っ張ら

れた。逆様の壺が、次第に遠ざかって行く。耳元でガサガサと音がして、その壺の姿も見失われ掛けて、見失われる瞬間、壺は砕けたようにも見えた。そして、その何処もただ暗いばかりの中で、女は、自らを見出した。それは、四角い水の姿だった。そうであると分かるのは、その四角い水の中だけが、暗くないからだ。ただ、周りが暗いので、その暗さの中に埋もれてはいるが、もしこの四角い中に、何かが落とし込まれれば、忽ちそれを照らし出して、その形をあらゆる角度から描き出せるに違いない。女はそれを待ったが、何かが近付く気配もない。雪か土かの柔らかいものの中に、埋もれてしまったのだ。先程、女のしたように、先ずはそれを誰かに掻き取って貰わなければならないが、ずっと一緒だった犬さえ嫌がった所に、誰がやって来るだろう。それより、この四角の何処かに穴を開けて、そこから光りを洩らせば、その光りになって、四角い姿から自らを解き放てるのではないか。

　遠くに小さく、光りの束が流れているのが見えた。やはり、壺は砕けたのだ。それは、撚れた糸のようではなく、様々な色の細い糸を隙間なく縦に並べたようだった。それは、真下に向かっていたが、直に途絶えて、極彩色の細長い凍った滝のようだ。ただ、そのようなものが見えて来るのなら、何処かから、光りがそちらに向かって洩れているのではないか。いや、女は、もうそこへ向かって歩き出しているのではないか。女は、自らの真っ白な足を見付けた。しか

し、それは、四角い水の底の縁を、グルグルと経巡っているだけだ。そして、四角い水の中の何処にも穴の開いていないのを、確かめていた。足は、少しずつ磨り減り、遠くの極彩色の滝も、細って行くようだった。

　女は、足に、歩くのを已めさせ、水の側面を蹴らせた。すると、足は、簡単にそこを蹴破って外に出た。足に続いて体も外に出て、ただ、目だけが、その四角い水の中に残った。その目を通して、水の外の自らの姿を見て取れた。その体を操って、四角い水を、雪か土かの柔らかいものの中から掘り出し、それを担ぎ上げて、今度こそ、極彩色の滝へと歩き出そうとした。しかし、その滝はもう何処かに、掻き消えている。周りが、何処も、様々な色に満ちて輝いているからだ。急に重くなった足が止まり、外に出ていた体が、またジリジリと、担ぎ上げている水に沈んだ。四角い水の中だけが、外の色の光りを拒んで暗かった。女を入れた水は、ズルズルと凍った斜面を滑り下って、先を転げ落ちて行く青い硝子の壺を、追い越し掛けた。壺の中が空っぽなのを、追い越しざまに見て取ると、女の半分は、その壺の中を満たす暗い水だったが、その暗さは青い硝子越しにならば、外の光りを拒む程ではなかった。残りの半分は、形を失ったまま更に流れ下って、色の届かない所にまで至り着いて、クネクネと延びて凍った。

　何を見ても、ものの片面は暗く沈んで青く、もう片面は色がなく冷たく歪ん

でいた。ただそのようにしてだけ、ものの形が見て取れた。右目が壺の水の中に閉ざされ、左目が色のない氷の底に沈んでいるからに違いない。その二面の間に、冷たい横風に晒される極彩色が輝いているのは分かってはいたが、そこに目が向けられる事はなかった。もしも、青い壺が、色の届かない所にまで転がり落ちて、割れて、中の水がそこの氷を溶かしたりすれば、極彩色どころか、ものの形さえ見失い、一切はただ、何処となく暗く冷たいようなだけになってしまうだろうか。しかし、壺は、横風に弄ばれながらも、斜面をコロコロと転がるしかないのだから、直にそうなってしまうのではないかと、ビクビクしているしかない。（二〇〇二年四月三日）

*　　　*　　　*

砂塵

　砂が舞って、辺り一面霞んでいるが、どちらを向くかで色が違う。黒っぽい景色だったり、赤っぽい景色だったりする。四方から一斉に、違う種類の砂が、風で運ばれてくるようだ。風同士が打ち消しあって、ここだけにはどんな風も吹き寄せず、ジメジメした熱い空気は淀んで、腐った汗水の匂いが立ち込めて

いる。砂と共に風で運ばれてきたのか、ベタベタした肌に砂をこびり付かせた人の姿が、犇めいて、風の吹く所に戻りたくないなら、行き場を失って、喚きながら互いを押し退けようとするしかない。その口から絶え間なく唾の飛んでくる所に、女は、独りしゃがみ込んで、踏み荒らされる地面を見詰めていた。その女もまた風で運ばれてきた口だろうが、押し合ったりはしない。恐らくは、誰よりも先にここに来ていたか、一人だけずっと遅れてここに来たかだ。

　掌を上に向けるだけで、蹴散らされた砂が乗ってくる。砂は、黒と赤と透明と、後、何色とも言えないような濁った色の、四種類だった。女はそれを選り分けて、順々に口に含んで、舌の上で転がした。埃っぽい苦味は感じ取れたが、唾は全く出なくて、砂は口の中をヒリヒリと傷付けた。それから、血の味はしてきたが、血は直ぐに固まって砂に混じるようで、渇き果てた喉に流れ込むような事はない。砂ごと吐き出すと、その瞬間から血の味は一切口に残らず、口の中はカラカラに渇いて、舌ビラなどは薄っぺらな軽石のようだ。最後に口に含んだ、濁った色の砂だけが、口の中で直ぐに柔らかくなった。しかし、溶ける訳ではなく、吐き出すと、どれも角が取れて丸い粒になっていて、微かに緑掛かって、更に濁った色に見えた。舌全体がねっとりして、口の中は僅かに湿りを帯びた。他の硬いだけの砂と違って、その砂は水分を含むようだ。女は、四方を見回し、何色とも言えないような濁った色の景色の方に、水を求めて歩

き出した。

　向かい風なので、次々にその濁った色の砂が目に入ったが、涙で直ぐに柔らかくなって押し流されたので、目は少しも痛くなかった。その代わり、見えるものの輪郭が皆ぼやけて、微かな緑色に滲んだ。その滲みは、薄ぼんやりとしか見えないのに、ひどく眩しくて、その滲む辺りに手を差し伸べると、ベタベタしたものが手にこびり付いてくる。女は、それを刮げては、腰にぶら下げた銀色の丸い小さな器に入れていったが、そうする程に眩しさは増して、ものの輪郭など全て溶けて、景色はただ緑色が滲むばかりになった。銀色の器がいっぱいになると、その器に蓋をして足を止めるしかなかった。

　風が已んで、緑が滲むだけの中から、人の姿が輪郭を見せた。何人か固まっていて、皆、内側を向き合って背中しか見えず、頭の上と肩の上に、濁った色の砂が降り積もっていた。何かを取り囲んで押さえ付けているようで、時々、背中と背中の間から手が覗くと、それはすっかり緑色に塗られていた。女は慌てて銀色の器の蓋を開け、中のものを両手に塗り付けた。緑色には見えなかったが、構わずに、彼らの背中と背中の隙間に、体を押し込んだ。両隣の体は、木のように硬くて、女の体は潰されそうだったが、何とか両腕を中に突っ込んで、彼らが押さえ付けているものに触れようとした。それは、女の体付きをしていて、それに触れた女の手より更にずっと柔らかかった。

触れた女と触れられた女が一つになったのか、触れた女が、その瞬間、木のように硬くなってしまったのか、女は、独り、木のように硬い者達に囲まれて、緑色のベタベタしたものを、裸の肌に塗られていた。肌の表面は、塗られたものを直ぐに吸収してサラサラになるので、肌をベタベタに保つには、何時までも塗るのを已められないようだった。しかし、女が持ち込んだ銀色の器の中のものを塗ると、女の全身はベタベタのままになった。その体を振り回すと、女の周りの者達は、丸太のようにゴロゴロと倒れた。辺りは、風の全くない中、濁った色の砂が静かに降るだけだった。眩しいどころか、すっかり暗くて、また、ものの輪郭は失われていた。倒れた者達は、みるみる砂に埋まった。しかしその砂も、ベタベタした女の体にだけは少しも積もらない。ただ、降り積もる勢いは速いので、時々足踏みをして、埋まり掛けた両足を砂から引き抜かなければならなかった。そうして、女の体だけが、砂の上に持ち上がって行った。

降る砂の密度は濃くなる一方で、それに連れて、砂の落ちる速さは緩くなった。そしてもう、空中を砂が降るのではなく、砂の中を縫って無数の空気の筋がジグザグに昇って行くように見えて来た。そこに息を吐くと、吐いただけの窪みが出来た。女は、足踏みを欠かさずに、目の前に息を吹き付けては、そこに文字を書き付けていった。文字は、書かれた順に、遠ざかりながら昇っていって、砂に消え掛ける度に、そこを強く見詰めると、砂が払われて、文字はま

たくっきりと姿を現した。その最初の文字が、そこに打ち付けられたように動かなくなった。すると、幾ら息を吹き付けても、文字は書けなくなった。足踏みを続け、その最後の文字が足元まで来ると、女は、その文字の列の上を、斜めに垂れた綱を渡るように登って行った。

　行き着いた最初の文字の、そのまた上には、もう砂は降っていなかった。女はやっと、砂の上に出た。足元は砂の地面だったが、そこは尖った頂上で、どちらを向いても、空との境まで延びる砂の急斜面が下っていて、ちょっとでもバランスを崩せば、そこを延延転げ落ちて行くしかない。しかし女は、特に恐いとも思わなかった。そこの空気に、全身のベタベタした肌を、貼り付けられる気がした。空が何色とも言えないような濁った色になって、冷たい風が裸の体に吹き付けた。震えて腕をさすると、その肌は、サラサラしていた。女の体は、緑色に輝く砂になって、空中に舞った。

　もう一人の女が、その緑の砂がキラキラと風に流れて行くのを、砂に埋もれた中から見上げていた。その女は、銀色の器の中に体を丸めて閉じ籠もっていて、その器は、文字の列の途中にぶら下がっていた。しかし、女が、輝く砂の流れを目で追ったせいで、器はそこから転げ落ちていた。転げながらも、女は器の蓋を開けて、中から飛び出た。するとそこは、砂など一粒も落ちていない、濡れた岩肌の緩やかな斜面で、見上げると夜空だった。遠くに緑色の星の群れ

が流れて、空の向こうに消えて行くのが見えた。拳で岩を打つと、岩の表面が割れて、水が滲み出た。女は、這い蹲って、そこに口を付けて水を舐めた。そうしながら、緑色の星が消えたのと反対方向の遙か先に、砂塵が舞い上がっているのが暗く見て取れた。その下では、点のような人の姿が、右往左往しているようだった。そこにはもう決して戻れない。それを分かった上で、風に向かって、水を求めて歩き出したのだったかどうか、女は考えてみたが、答えは出なかった。

　岩から滲む水は、直に濁って、臭くて飲めなくなった。他の所を拳で打ったが、岩場は硬いばかりでびくともせず、指の骨が折れたのか、痛くてもう拳を握るのさえ難しくなった。岩の割れ目から、臭い水は、段々と勢いを増して湧き出し、斜面を流れ下って行く。何処かでその水が漉されて、また飲めるようになるかも知れない。女は、その出来たばかりの、岩場をクネクネと走る細い川に沿って、水の後を追うしかなかった。

　暫く行って、斜面を見上げると、水の流れは、一綴りの文字の列のように見えた。女は、足を止め、それを読もうと、空中に向けて、フーフーと強く息を吹き付けた。その息は、初めゆるゆると斜面に沿って昇り、その側を吹き過ぎようとする風を惹き付けては、段々と強く大きな風に脹らんでから急旋回し、砂塵を舞い上げている方へと、逃げるように流れて行った。

湧き出ていた水が途絶えたようで、川は涸れてしまっている。手が潰れるのを覚悟で、腰を屈めざま、足元の岩場を拳で強く打った。澄んだ水が、甘い香りを伴って滲み出た。素速くそこに口を付けて啜った。口の中で水が躍り、痺れた舌が、文字をなぞった。それを読み取ろうとする内、頭もまた痺れてきた。仰向けに身を投げ出すと、緑の星の群れが戻って来て、地上の文字を探し当てては、読んでいるようだった。岩場で全身を痺れさせてのたうっている、白く濡れた女の体もまた、文字として読まれて行くに違いない。（二〇〇二年四月五日）

＊　　＊　　＊

羊の角

中の見えない篭を幾つか持ち寄って、男達は、篭に何が入っているか当てる遊びをしていた。女も二人呼ばれていて、凍ったような作り笑いを浮かべ、奥の壁際に並んで張り付いて、出番を待っていた。自分の持って来た篭の中身を他の誰かが当てれば、篭を開けてみせなければならない。最後まで残った篭の持ち主の勝ちだが、昼過ぎから初めてもう暗くなり掛けているのに、篭はまだ

一つも開けられていない。男達は、疲れ果て、互いの勘の鈍さを呪い合って、イライラを募らせていた。男の一人が、血走った目を釣り上げて細身のナイフを取り出し、それを順に、篭に突き刺してはどうかと言い出した。それで、何か分かるだろう。しかし、私は、篭の中に赤ん坊を入れて来た。そんな事をされては困るが、それを口にすれば、真っ先に篭の中身を当てられてしまいそうだ。篭の中で、赤ん坊はずっと泣き声を上げていて、それを他の者達が赤ん坊と分からないのが不思議なくらいだ。それとも、それを赤ん坊の泣き声と聞こえるのは、私だけか。いや、そうではない。泣き声が聞こえ出して直ぐ、一人が、私に、泣いているのは赤ん坊だろうと聞いて来た。私はそれに、赤ん坊ではないかも知れないと答えた。それから、彼らの言う事は、的外れになるばかりだった。その時私は、赤ん坊ではなく、赤ん坊と一緒に篭に入れた筈の蛇の事を考えていた。その蛇が、とぐろを巻いては、赤ん坊の泣き声を真似ているような気がしたのだ。私がそんな風であるように、他の者達も、紛らわしい受け答えを繰り返しているのかも知れない。

　ナイフを刺すにも、部屋が暗すぎる。灯りを点けると、窓の外がすっかり暗い。少し休んで腹に何か入れようと言う事になった。二人の女が黙って動き出し、篭の置かれた大きな楕円のテーブルに次々と料理を運んできて、男達は、女にお酌をされながら、鳥の脚などをガツガツと食った。私だけは、独り離れ

て窓に寄り掛かり、外を眺めた。遠くに大きな川が見えて、その向こうの海に流れ込んでいた。空も手前の地面も真っ暗だったが、海だけはまだ明るくて、帯のように横に延びていた。河口付近で、チカチカと小さな光りが噴き上がっている。花火のようだが、遠すぎて音も聞こえない。

　真下が明るくなった。ここは二階で、庭先にも灯りが点されたようだ。見下ろすと、光る渦巻き状の模様が、庭いっぱいを占めていた。その外側から渦巻きの中心へと、渦に沿って、男達が、体を寄せ合いながら、危なっかしい足取りで歩きだした。どいつも、旨いものをたらふく食って、好きなだけ酒を呑んだようなうっとりした顔付きで、時々奇声を発したりした。渦を回りながら進めば、当然その通る幅は段々と狭くなる。彼らの体は、それに合わせて、棒のように細くなって頼りなげに揺れた。危険を知らせようと声を掛けたが、遅かった。庭の中心に押し詰められるばかりの彼らの体は、一纏めに擦り潰され、煙のように光りの渦に吸い取られた。残った微かな煙が、光りに炙り出され、渦の上を細々とたゆたうだけだ。その煙を邪魔臭そうに手で振り払い、杖を突いたずんぐりした男が一人、真っ直ぐに庭を横切って、建物の中に入って来た。私は目を背け、部屋の方へ向き直った。

　奥の壁に、でかい油絵が掛かっていて、ケバケバした筆使いの光る渦巻きが、画面の大半を占めている。その下で、女二人が、テーブルに向かって肩を並べ、

椅子に掛けていた。男達は居ない。料理のすっかり片付けられたテーブルの真ん中に、篭が一纏めに集められていて、どうやらどの篭にも、ナイフで刺した細長い傷が付けられている。私もテーブルに付いた。

「立派な角の羊ですね。」と、私は、油絵に一瞥してから、やや年長の方の女に向かって言った。

「ウチで飼ってました。触ってみます？」と、女は、私に笑い掛けながら言って、腰を浮かせた。

一瞬断ろうと思ったが、女のするに任せる事にした。女も、私の躊躇を見て取って、浮かした腰を止めたが、私が何も言わないのを確かめたような目付きを見せてから、立ち上がって背を向けた。

「ナイフは、持って行ったんですか？」と、私は、篭の一つに手を伸ばしながら、やや若い方の女に尋ねた。その女は、私の後ろの窓から見える遠くの花火でも眺めているような目付きで、黙ったきりだった。壁に掛かった分厚く物々しい額縁をガタガタ揺すりながら、やや年長の方の女が、

「あれは、動物の骨で出来ていたんですね。」と、壁を向いたまま声を張った。その声が、部屋の何処かで谺したように聞こえて、私は、天井をぐるりと見回した。天井は、真ん中が緩く窪んでいて、骨のように真っ白だった。

「動物の骨を薄く削って、ナイフにしたんですよ。」と、女は、向き直って

言った。額縁を外すのは諦めたようだ。庭を通ってきたずんぐりした男が、二階に上がり込んでいて、やや若い方の女に、後ろから抱き付いていた。女は、眉を顰め、少し前屈みになるだけで、じっとしている。

　手に取った篭は軽かった。傾けただけで、蓋が開いて、中は空っぽだった。私は立ち上がり、次々に篭に手を伸ばしては調べていった。どの篭も、細長い傷が付いていて、空っぽだった。内側に血の付いている筈の私の篭はなかった。

「何やってるんだ。まるで行儀作法がなってないな。」と、女に抱き付いたまま、体を左右にゆるゆると揺すっているずんぐりした男が、細長く尖った白い目で、私を鋭く睨み上げ、唾を飛ばして怒鳴った。やや年長の方の女が、けたたましい笑い声を立てて、

「仕方ないじゃない。」と言ってから、テーブルに身を乗り出し、篭を一つ無造作に取って、蓋を開けて見せながら、私に差し出した。受け取って見ると、中にはあちこち血が付いていて、骨で出来た薄いナイフも刺さったままだ。私は、それを引き抜き、テーブルをひっくり返して、三人に向かってナイフを振り回した。三人は、何事もないように私のする事を見ていたが、ナイフの刃は、彼らの肌の上を滑るだけだった。一度、研ぎ直さなければならないようだ。私は、傾いた額縁の前へ行って、絵に描かれた雄羊の角の渦巻きの外の縁に、ナイフの刃を当てた。それから、刃先の角度と力の入れ具合に注意を払いながら、

渦の中心へと、渦に刃を沿わせて行った。渦の中心まで達すると、見た目にも骨のナイフは、切れ味鋭く研ぎ澄まされたと分かる。試しに、油絵に突き刺してみると、刃はするりと刺さって、そのまま独りでに渦を巻いて、羊の角を渦に沿って切り取っていった。それがまた中心まで行って、絵の具を盛り上げた螺旋の布切れが、クルクル踊りながら床に落ちると、パンパンと鳴る音が響いた。

　振り返ると、誰も居ない。窓から見える花火が、先程より随分近い。川のこちら側の岸で上げているに違いない。テーブルは、四本とも脚が折れて、どうしようもなかった。篭を調べ直したが、血の付いたものはなかった。下で、女の甲高い笑い声がする。窓から見下ろすと、光る渦巻き模様に上で、ずんぐりした男とやや若い方の女が、手を取り合って踊っていた。やや年長の方の女は、二つに折られた男の杖を打ち合わせて、腰を振って拍子を取っている。その庭が先程より小さくて、窓は、二階より高くなっていないだろうか。花火がまた近付いた。その明るさで、頬が火照る程だ。私は、花火に向けて、篭を、蓋を大きく開けては、次々に投げた。花火まで届く筈もなく、それらは闇に消えた。それから、テーブルの四本の脚も虚しく投げた。最後に、羊の角に描かれていた、螺旋の分厚い布切れを投げ付けると、それだけは宙に舞って、遠ざかっても、花火に照らされてはキラキラ輝いて、見失われる事はなかった。

それから直に、花火大会も終わり、下の庭もすっかり暗くなり、そこに時々のろりと動く人影が見えたが、それはずっと小さくて、まるで高い塔の上からでも見下ろしているようだった。

　その庭から急いで目を背け、部屋の方に向き直り、下の階に降りる階段を探した。ドア一つ見当たらない。緩く窪んで骨のように真っ白な壁を押して回る内、脚をなくしたテーブルの縁に、脛を強か打ち当てた。意外に柔らかな感触だった。私は、しゃがみ込んで、その楕円のテーブルの、表裏を覆って糊付けされている分厚い布を、骨のナイフで剥がしていった。全て剥がしてみると、それは布ではなく、どうやら動物の皮のようだった。皮を剥がされたテーブルの表面は、ギザギザの溝が幾つも拗り、その溝の底が僅かに濡れて、そこから、腐り始めたような獣の生肉の匂いが、ジリジリと立ち上った。窓が開いていても、その匂いは部屋に充ちて、息苦しくなった。剥がした皮で鼻を押さえると、皮だけは違う匂いがした。色々な匂いが染み込んで入り交じっているようだが、その皮の匂いさえ嗅いでいれば、楽々と息が出来る。私は、剥がした皮を巧く丸めて、その中に潜り込んだ。それだけではまだ、獣の肉の匂いが入り込むので、中から破れ目を縫って、すっかり皮の中に自分の体を縫い込んだ。そうして、やっと獣の肉の嫌な匂いから解き放たれると、一日の疲れが来て、急な眠気に襲われた。私は、眠気と戦いながら、皮にくるまれた中で、何度も窮屈に

寝返りを打った。
　その度に、握り締めたままの骨のナイフが、私の肉を裂いたのだ。何とか、眠気に打ち勝って、また皮を破って外に這い出すと、私の体は、羊の角にそっくりの、渦巻きの形に整えられているようではないか。窓を見上げると、暗い空の何処かに、まだ宙を舞い踊っている螺旋の布切れが、ぼんやりと見分けられたようではないか。もっとよく見ようと、窓から身を乗り出すと、直ぐ下で、渦巻きの模様が、庭いっぱいを占めて輝いている。誰かと挨拶を交わす太い声がして、ずんぐりした男が、杖を突き突き、その庭を真っ直ぐに過ぎて、門の外の往来へと消えた。（二〇〇二年四月七日）

＊　　　＊　　　＊

硝子瓶

　硝子の棚に、広口の硝子瓶が三つ並んでいる。足がなかったので、這ってそこへ近付こうとした。腰はクネクネと動いたが、少しも先に進まない。足は、ないのではなく、そこに埋まっているようだった。私は、大きな木の箆で、腰の少し下辺りを掘って、足を取り出そうとした。体が少しずつ、前に押し出さ

れた。足は、地面に埋まっているのではなく、水に沈んでいて、木の篦が、櫂のように水を掻いていたようだ。そのまま腰が寝かされてしまうと、開いた口に水が流れ込んできた。口を塞いだら、それきり息が出来なくなるようで、幾ら水を呑んででも、口は開けっぱなしでなければならない。

　硝子の棚の向こうに、男達を何人も乗せた一艘の小舟が、こちらに向かっていた。舟は楕円形で、透き通って見えた。それは、うねる波に乗って、直ぐにも硝子の棚にぶつかりそうだ。私は、声を上げ、呑んだ水を、小舟に向かって一気に吐いた。その水の塊は、硝子の棚を砕き、広口の硝子瓶は、クルクル回って、どれも水の中に消えた。男達は、透き通った長いパイプを急いで銜えて、身を乗り出し、誰かの一声を合図に、一斉に、硝子瓶の消えた辺りの水の中へ、パイプの先を突っ込んだ。私は、木の篦を水の中で振り回し、そのパイプの先を、ポキポキと折っていった。男達は、折れたパイプを引き揚げ、それでもそのパイプを銜えたままの口を開けらず、息が苦しいのか、身を仰け反らせるしかないようだ。

　中に一人だけ、パイプを銜えていない者が、男達を掻き分けた。合図の声を上げた者だろう。他の者達より、ずっとほっそりした体付きで、女のようでもある。そいつは、苦しがっている男達の重たそうな分厚い胸ぐらを掴み上げては、次々に水の中に突き落とした。そして、全員を突き落とすと、小舟の中に

倒れ込んだ切り、動かなくなった。覗き込むと、慣れない力仕事のせいか、上体も腕も脚もボロボロで、動けないのも無理はない。動かそうと触っただけで、バラバラになりそうだった。抱き起こして、舟から抛り出すにしても、先ずは、バラバラにならないまでの体の回復を待つしかないか。舟をひっくり返そうとしたが、殆ど傾きもしない。それ程、私には力がなかった。木の篦を、手放してしまっていたからだ。

　水に潜ってそれを探そうとしたが、私の体は逆に、水の上に跳ね上がった。浮き袋のようなものを背負っているからだ。外して、水の上に横にすると、舟の中に倒れている者と同じような体付きの女だった。ゴムで出来たようなツルツルした青い服で、首から下をすっぽり覆っている。体に密着していて、成る程服にも見えるが、それが廃棄物を入れる袋であるのは、直ぐに分かった。それなら私は、ここに、この女を捨てに来たのだ。それとも、知らない内に、女を背負い込まされたのなら、私が捨てに来たのは、先ずは、私自身だろうか。そんな私に委ねれば、女もついでに、捨ててしまえるという寸法か。

　私は、女の体を包んでいる袋を、破れないように丁寧に脱がせ、その袋だけを手にして舟に乗り込み、倒れている者の体を、バラバラになったらなったで構わずに、袋の中に詰め込んだ。そこまではすんなり行ったが、その袋を持ち上げる力がなかった。木の篦を探しに、また私は、水に入るしかなかった。入

れ替わりに、女が、派手に水飛沫を上げて、舟に乗り込んだ。女は、私の木の篦を持っていて、それで直ぐに漕ぎ出し、舟は、私から少しずつだが遠ざかって行った。私は、まるで泳ぎ方を知らず、少しずつ横になって行く体を水に浮かせて、それを見送るしかなかった。

　そうして、開いたままの口にどんどん水が流れ込んできて、重くなった私の体は、水に沈んで行った。浅い水底に、二つの広口の硝子瓶は直ぐに見付かり、私の真下の辺りには、折れたパイプの先と砕けた硝子の棚の破片が、散らばっている。私の体は、水底に達する前に止まって、俯せのまま、上にも下にも行けなくなった。それでも腕を伸ばせば水底に届いたので、私は、折れたパイプの先や硝子片を拾っては、体のあちこちに突き刺していった。浮きも沈みもしなかったが、それで何となく体が軽くなったように思えて、頭を向けた方に進んで行けた。パイプの先と硝子片が、鰭のように独りでに水を掻いてくれているのかも知れない。それで、硝子瓶の真上まで行って、それを拾い上げようとしたが、手が滑って巧く行かない。瓶の蓋を開けるだけなら出来そうに思えて試したが、駄目だった。

　少し先で、青い袋が水に投げ込まれて沈んで行くのが見えた。硝子瓶は後回しにして、そちらに向かった。体中の鰭が、鋭く水を切って、グングンと速度は増し、直ぐにそれに近付けた。袋も、私と同じように、水底までは沈まずに、

途中で止まっていた。それを掴んで、袋の口を開けると、中には、二つに折られた木の箆しか入っていない。私は、それを取り出し、折れ目を合わせて、そこを何度も何度も噛んで、折れ目を見えなくした。それからまた袋を覗くと、空っぽだと思ったのが、硬そうな細かな骨が、数え切れず、カチカチと当たり合って、中で泳ぎ回っている。私は、吐き気がして、袋の中へ水を吐いた。少しだけ赤味を帯びた水が、青い袋を満たしていった。それで骨は、少しは柔らかくなったのか、当たっても音がしなくなった。私は、その塞いだ袋の口を握り締め、もう片方の手には、木の箆の繋げた折れ目の辺りをしっかり握って、また硝子瓶の方へ戻った。途中、硝子片が、体からパラパラと零れ落ち、最後はただ惰性で進むだけで、何とか硝子瓶の上まで来て、体は独りでに止まった。それでも、折れたパイプの先だけは、まだ突き刺さったままのようだった。水の中で息をするのに必要なのかも知れない。

　袋を開けると、中の水は透き通っていて、その代わり、骨が皆、少しだけ赤味を帯びて、何処となく膨れているようにも見えた。その一片を手に取ると、小さな骨なのに、大きな石のように重い。袋から出そうとしても、出せない。無理をすれば、反り返った腕の骨が折れそうだ。私は、すっかり一本に繋がった木の箆を、水底にしっかり突き立ててから、袋の中に潜り込み、首だけ出して袋の口を閉じた。そうしてしまうと、骨はどれも軽くなって、手探りでも自

由に扱えた。ただ、袋に入った私の体は、水底に届き、ゆっくり滑って横になって行くのを、どうにも出来なかった。
　その姿勢のまま、他に出来る事もないので、手当たり次第に骨を手に取っては、それを撫で回して、一つ一つの形を憶えていった。そうしている内に段々と、その数は相当のものだったが、どの骨とどの骨が繋がっていたのか、分かってきた。それを順に並べようとしたが、狭い袋の中では巧く行かない。思い切って、頭も袋の中に入れて、袋の口をぴったり閉じた。すると袋の中は、案外広々としていた。私は、骨と骨を合わせては、その継ぎ目を、何度も何度も噛んで、継ぎ合わせていった。そうして、全ての骨を繋げてみると、出来上がったものは私よりも大きくて、袋の中は窮屈で、私は全く身動きが取れなくなった。それは、人の形とも獣の形とも似ていなかった。
　どうやらこの骨組みは、人に組み付いて、人を動けなくさせる形に出来ているらしい。袋の口の方に腕を伸ばそうにも、関節を決められて、全く動かせない。肩に刺さったままの折れたパイプの先を一本、何とか口に銜えて引き抜いた。その先を、袋に突き刺したいが、届かない。仕方なく、目の前の骨に突き刺すと、骨組みは、いきなり袋の中で暴れ出した。半端ではなくて、私は、首をグルグル揺すられて、目の前の一切は、激しく飛び回るだけになった。
　やっと動きが収まって、最初に、硝子瓶が目に入った。三つの硝子瓶の一つ

一つが、同じように見て取れた。その蓋を、三つ同時に開けて覗き込むと、外から見るより、中は随分広々としている。骨組みから逃れるには、取り敢えずここしかない。一瞬の躊躇いが命取りだ。窮屈を覚悟で、急いで飛び込み、中から蓋をしっかり閉めた。隙間は全くなかった。硝子を見通すと、少し離れた所にある三つの硝子瓶の中に、バラバラになった私が、三等分されて瓶詰めにされている。それを互いに見合っていて、三つは、全く同じように見えた。赤味を帯びた骨は、粉々になって、辺りに散らばっていた。

　三つの硝子瓶は、ゆっくり時間を掛けて近付いて、瓶と瓶が触れ合うと、私はまた、一繋がりの私に戻れた。声を出せたし、手足を動かせたし、もちろんどのようにも動き回れた。ただ、触れ合うまま決して離れない三つの瓶から、外に出られないだけだ。木の篦を自らに打ち付けて、瓶を割ろうともしたが、木の篦は直ぐにまた二つに折れて、使い物にならなくなった。しかし、それで良かったのではないか。もし硝子瓶が割れて、外に出られたとしても、私はまた、その私を何処かに捨てに行かなければならなくなる。硝子瓶の中に留まっていれば、別に何をする必要もない。三つ揃ってじっとしているだけで、何の邪魔も入らず、何の痛みもなく、自らの全てを受け止めていられるなら、他に何を望み得るだろう。（二〇〇二年四月九日）

＊　＊　＊

肉屋

　薬屋の二階の窓から見下ろすと、真向かいの肉屋だけが、真っ暗な中に灯りが点っていた。その日の肉屋は、その日の肉を売り切らない限り、幾ら遅い時間になっても、気分次第では店を閉めなかったりする。昼間はひどい暑さだったので、肉は大分傷んでいるだろう。どうやら今夜は、粘る気配だ。女は、このところずっと、草や草の根や茎ばかり食っている。肉を食いたくなった訳ではないが、肉を手に取って触ってみたくなった。部屋中に散らかった、昼間採ってきた草を避けて、下の階に降りたが、薬屋はもう疾っくに店を閉めていて、薬特有の嫌な匂いが籠もっているだけで、誰も居なかった。裏の窓から這い出て、暗い中、幅の狭い長い石段を降り、ドブの縁に沿った泥濘を回り込み、そこからまた、建物の壁と壁に挟まれた、石段よりもっと狭い埃っぽい坂道を登って、通りに出た。空には、月も星もなかった。

　薬屋の二階からは見えなかったが、肉屋には先客が何人も居た。ガッシリした体付きの汗臭い女ばかりで、狭い店の中はいっぱいだった。その一番後ろで背伸びして、やっと覗けた肉屋は、無精髭を生やした顔に脂が浮いていて、瞼

がひどく重そうで、肉を切り分けたり包んだりする手付きは、殆ど止まっていた。もう寝たいが、客を捌かない事には店を閉められずにいるらしい。ずっと待たされた挙げ句、やっと最後の先客が青い紙に包まれた肉を受け取ると、その先客は、振り返りざま微笑んで、「私でおしまい。」と言って、背も高く横幅もあるその体で、女の直ぐ目の前に立ち塞がった。女は、肉屋に確かめたかったが、目の前のでかい体を躱さない限り、肉屋とは面と向かえない。

「その代わり、これを上げる。」と言って、その先客は、子供のシャツくらいの白くフワフワした大きさの布切れを、女の頭に被せんばかりに掲げた。女は、前々からそんな白い布を欲しかったのを思い出して、直ぐに手に取った。

「もちろん、タダなら頂きますよ。でも、何処で手に入れたんですか？」と、女は、その肌触りにうっとりしながら尋ねた。

「多分、誰かから借りたか、そうでないなら、誰かに何かを貸して、そのカタに取ったのかも。でも、あなたの方が詳しいんでしょ。後でいいから、分かるように説明して貰える？　約束してくれたら、これをあなたに上げた事は、誰にも黙ってようかな。」

「ええ、ええ、お手紙を差し上げられるでしょう。それも、私からじゃなくて、その道の詳しい人から。でも、取るに足らないですよ、あなたにはきっと。それに、その道の人って、悪戯半分にわざと間違ったりしますよね。尤もそれ

を見破れたら、何かの足しにもなりますかね。」

「手紙なら要りません。字は読めない事にしているので。」と、先客は横柄な調子で言って、女を店の外に押し出した。

「じゃあ、専ら、盗み読みですか。」と、女は、立ち去り掛けた大きな背中に声を掛けたが、それは直ぐに闇に消えた。振り返ると、肉屋の灯りは消えていて、灰色のカーテンが下ろされていた。

女は、通りを渡り、建物の壁と壁に挟まれた狭い坂道を、真っ暗な中、一気に駆け下った。そこを抜けると、幾重もの色違いの雲間から、微かに月明かりが漏れて、ドブの縁に沿った泥濘を照らし、そのあちこちに、肉屋の青い包みが幾つも散らばっているのが、ぼんやりと見て取れた。やはり肉は腐っていて、それに気付いた客達が、捨てていったのだろうか。しかし、ここは、滅多に人の通る所ではない。包みはどれも破れていて、中の赤い肉が覗いていた。女は、白い布は首に巻き付けて両手を使えるようにし、包みを一つ一つ調べていった。泥濘の水が腐ったような匂いはしたが、肉の腐った匂いは嗅ぎ取れなかった。肉だけ拾い集めると、両手にいっぱいになった。それを持って、狭い石段を登り始めたが、途中雲がすっかり晴れて、月明かりにくっきり照らされた石段の数が、幾らでも増えてゆくかのようで、見上げても、なかなか薬屋の裏手は近付いて来ない。

手の温もりの中で、肉が少しずつダラリとなってゆくようだが、少しも変わらないままのものもあるようだ。女は、腐った匂いのし出したものから、口に入れ、口の中がいっぱいになると、一度も噛まずにそれらを飲み下していった。空っぽで固くなって動かない女の腹の中は、外の空気よりずっと冷たくて、そこなら保存が利くように思えた。後で吐き出せば良い。腐り掛けを全て腹に収めてしまうと、残りの半分以上は、当分腐りそうにない肉だったが、腹の中ばかりか、両手も冷えて感覚がなくなって、その肉を持ち切れずに、ボトボトと石段に零して行くしかなかった。それが、両手からすっかり滑り落ちると、薬屋の裏手は直ぐそこだった。

石段を登り切って、見下ろすと、月にまた、様々な濃淡の雲の群れが絡み掛かるのか、二重三重の月明かりに照らされる石段全体は、クネクネと拗って見えて、石段と石段の間がずれて、その中に肉片が取り込まれてゆくようだった。そこを下から登り始める者の姿があって、濡れているのか、その頭が光って、尖って見えた。女は、そんな者に見付かったりしないようにと、慌てて、窓から中に入り、窓に板を打ち付けた。

薬屋の奥の方には、小さな檻が、天井までぎっしり積み上げられている。店の一部を使って、ペット屋を始めたのだが、金が返せなくなって、借金のカタの動物達を持って行かれて、檻はどれも空だった。その中に白い兎を一羽、見

付けた。後ろ脚の怪我が治らず、ひん曲がったままで売り物にならないので、置き去りにされたのだ。女は、その檻を抱えて、二階に上がり、床中に散らかった草を蹴散らして、部屋の真ん中に檻を置いた。それから、首に巻いた白くフワフワした布切れを取り、本物の兎をじっくりと観察しながら、その布で、兎の縫いぐるみを作っていった。と言っても、窓からの月明かりだけが頼りなので、何処まで実物を引き写せたか覚束ない。最後に腹の中の冷やした肉を吐いて、口移しに、縫いぐるみの中に入れる事にした。肉を吐くと、ダラリとした形のまま固くなった肉片が、草の上にポトポトと拋り出されてゆくばかりだった。見回したが、兎の縫いぐるみは見当たらなかった。女は、自分の体を、縫いぐるみの中に縫い付けてしまっていた。引き破ろうにも、ただ白い胸を、短い前脚で撫で回すのが精一杯だった。

　下でガタガタ音がする。石段を登ってきた者が、窓の板を打ち壊しているのか。その音は直に、コトコトと階段を駆け上る音に変わった。女は、手近な肉片を、せめて一つだけでもと飲み込んで、硝子窓に体当たりし、そこから真っ暗な下の通りへ飛び降りた。二階からは目に付かなかった、大きな兎の絵の肉屋の看板が、見上げられた。振り向くと、壊れた窓から、尖った坊主頭の上半身裸の男が、兎を胸に抱いて、こちらを見下ろしている。手には、形の整った、まだ腐っていない肉をどっさり掴み上げていて、それを兎の口に押し付けよう

とている。艶々した肉の表面が、兎の目に映って、兎の目は、ギラギラと輝いた。兎は、牙を剥いて、肉に食い付いた。それはもう、別の動物ではないか。それとも、暗い中で見誤っただけで、檻の中に居たのは、初めから兎ではなくて、白くて丸々とした小型の肉食獣だったのかも知れない。後ろ脚にしても、ひん曲がったのではなく、初めからそんな形だったのではないか。ずっと四つ足の姿勢で、縫いぐるみの中に閉じ込められていたせいか、腹の中が熱を持って、柔らかくなって動き出したようだった。飲み込んだ肉を吐こうとしたが、それはもう、腹の中で消化を始めていた。女は、ひどい空腹を感じ、道端の草に食らい付いた。何時も甘かった草が、苦くて舌を痺れさせ、食えたものではない。

　女は、二階の窓の男に向かって、肉を投げてくれるよう、大声で頼んだ。男の手に盛られた肉を貪り食う獣は、逆立てた毛並みを艶々と輝かせていた。男は、ただ薄笑いを浮かべるだけで、請け合わなかった。その代わり、白い獣が肉を平らげると、その獣を肉屋の方に放り投げた。女は、直ぐにそれに飛び掛かったが、すばしこく闇の中に逃げられた。

「直に腐る肉と、何時まで経っても腐らない肉があって、腐らない肉だけ食っていれば、そのままで居られる。直に腐る肉を食えば、そのままでは居られない。それだけだ。簡単だろう。この事を、さっきの女達に伝えると約束出来

るなら、肉を投げてやろう。」と、男は、声を低めて言ったが、辺りは静まり返っていて、それを女は、一言一言はっきりと聞き取った。

「約束する。」と、女は声を張り上げてから、もう耳を地面に当てて、さっきの女達の足音の響いてくる向きを、闇の中に見て取っていた。

男は、腐り掛けの肉を、女に向けて放り投げた。女は、放り投げられたものから順に、直ぐさま飲み込んでいった。男の言葉を唱えながら走り出す内に、冷たい肉は熱い腹の中でどんどん消化され、さっきの女達の姿はまだ遥か先なのに、目は霞み、薄れた意識は、月明かりとは別のもっと強い光りへと、引き込まれて行くようだった。（二〇〇二年四月十一日）

*　　*　　*

器

　篭を背負って山に草を採りに行ったが、収穫はなかった。疲れて戻ると、部屋には、白い皿が大小幾つも並び、その上に乗っているのは、食い物の形はしているが、泥を固めたばかりのように見えた。そんなものは食いたくないので、女は席を立って、壁際まで後退った。皿は、テーブルではなく、何もない狭い

部屋の真ん中に据えられた、大きな円いベッドの上に並べられていた。それを囲む膝を付いた三人の男が、上体を乗り出し、泥の料理の一つ一つを手に取って、細かな所まで指で撫でたり、そっと息を吹き掛けたりしては、少しでも本物に似せようと手直ししているようだった。その一つが、女の目にも、泥でないように見えた。女は、それを仕上げた男の後ろに回り込み、しなやかな手付きで、男に気付かれないように、それを男から取り上げた。男は直ぐに、泥の塊にしか見えない別のものを手に取って、それに熱中するようだった。そうして、女は、男達から幾つか泥の料理を取り上げ、持ち切れなくなると、背中に背負っている籠に入れていった。途中、さすがに男達も気付いて、泥の料理を新たに手に取るのさえ已めてしまった。

　女が籠を降ろし、中のものを、人の頭程の大きさの、透き通った卵形の器に入れ替えようとすると、一斉に男達が、荒い息遣いで飛び掛かってきた。男達は、我先に、女の持っている器に手を突っ込んだ。男達に圧し潰されながら、女が強引に器の蓋を閉じると、男達の手首が千切れて、六枚の手と荒い息が、器の中に詰め込まれた。籠から零れた泥の料理は、踏み付けられたりしてグジャグジャになった。男達は、恥ずかしそうに女から手首を隠し、頭からベッドの中に潜り込んだ。皿が、ベッドから滑り落ちて、床の上をクルクルと転がったが、直に丸くなって、どれも白い泥団子になってしまった。

　女は、また空の篭を背負い、卵形の器を抱えて、外に出ようとした。しかし、ドアも窓もなく、白い壁が、ぐるりと円く部屋を取り囲むだけだった。それなら、ベッドの中が、この部屋の出入り口であるしかない。掛け布団を剥ぎ取ると、三人の男達が、体を丸めて横向きに寝ていた。両腕は胸の中にきつく折り込まれていて、手首は見えなかった。女は、ベッドに乗って、それらを転がしてベッドの真ん中に集め、出来る限りくっつけて三角形に並べた。女が体を揺すると、男達は目を覚ましたが、互いの体が邪魔して、三角形から身を振り解けず、そのまま体を丸めているしかない。女が、「どうしたら動けるようになると思うか」と尋ねると、男の一人が、「火を着けて燃やすしかない」と答えて、女にマッチの仕舞ってある所を教えた。女は、ベッドから降りて教えられた所を探したが、空っぽだった。振り返ると、男達の体は、その重みで、ベッドの中に殆ど埋もれ掛けていた。

　女は、急いでベッドの縁に飛び乗った。そこが波打って、男達の体は、少しだけ浮き上がった。マッチがないのを伝えたが、誰も答えなかった。女はまた、ベッドから降りた。男達は、ジリジリと沈んで、白いシーツの中に消えた。女は、そのシーツを剥がし、その下のマットも剥がした。その下には、小さな木切れがびっしりと敷き詰められていて、手に取ると、先が尖っていて、筆記具のようにも見えた。女は、ベッドの周りに散らかった、泥団子やら潰れた泥を

掻き集め、それを片手一杯ずつに掴み取り、両掌に挟んでペタペタと打っては、平らな泥の板を拵えていった。そうして、床にへばり付いていた泥を、全て板に変えて積み上げると、その板の表面に、木切れの先で、卵形の印を付けていった。木切れは、一度切りしか使えない。卵を一つ描くと、それだけで、すっかり先が丸く磨り減って、使い物にならなくなる。その木切れは、背中の篭に投げ込んだ。

　印を付けた泥の板は、そのままその辺りに放っていたが、端から順に並んで、床に敷き詰められていた。一方、ベッドの中は空っぽになっていた。女は、その空っぽな中に向かって、男達を呼んだ。白い泥の壁を外からドンドンと叩く低い音が伝わってくるので、女は、そこに耳を当てた。「尖った木切れを採って来たから中に入れてくれ」と言っていた。女は、木切れで一杯の篭を降ろし、それを、マッチの仕舞ってある筈の所に、篭ごとそっと隠してから、壁に押し付けた唇を震わせながら、床を泥の板で敷き詰めた事を伝え、「尖った木切れなどが何の役に立つのか」と付け加えた。壁の向こうで、男達が怒鳴り声を上げているのが聞き取れたが、他に出来る事もないのだろう。

　向き直ると、部屋の真ん中に、空っぽな円いベッドが大きく場を占めているのは、何とも目障りで、女は、それを畳む事にした。やった事はなくても畳み方は自ずと分かって、手はテキパキと動いて止まらなかったが、すっかり畳ん

でみると、円かったものが三角になっただけだった。しかも、その三つの角は、どれも壁際まで迫って、却って大きくしてしまった。円い方がマシだった。そこに入ってみる気にもなれない。代わりに、男達の手と荒い息を詰め込んだ卵形の器を投げ入れると、それは、三角の縁を跳ね返っては、派手な音を立ててベッド全体を震わせながら、何時までも転がり続けるようだったが、何とも退屈な眺めではないか。せめてもの慰めは、その震動で、天井から細かな塵が落ちて来る事くらいか。しかし、見直すと、三つの角のそれぞれに、卵のように丸まった男の体が、縦になって挟み込まれている。女は、三角の中に入って、首に手を掛けて男の体を引っこ抜こうとしたが、どれもビクともしない。卵形の器を何とか掴まえて、中を開けようとしたが、それも開かなかった。

　ベッドはもう震えていないのに、塵はどんどんひどくなる。見上げると、天井は、三角形だった。そこへ向かって壁が少し窄んでいるなら、ベッドと同じ大きさではないか。今に落ちてきて、ぴったり空っぽなベッドに嵌まり込むのではないか。ベッドから出ようとしたが、ベッドの外はどちらを向いても直ぐ壁だった。壁には、卵の印の付いた板が、タイルのように張られていた。叩くと、その震動は天井まで伝わって、天井をグラグラと揺らした。女は、卵形の器をきつく抱き締めて、自らも卵のように体を硬く丸くして、空っぽな三角の真ん中で、横になって蹲るしかなかった。

　それを、立ち上がった三人の男達が、取り囲んで見下ろしている。男達は直ぐに、卵の殻を剥くように女の体を引き剥がし、中の卵形の器を取り出した。器手首から先のない腕が、六本の指のように器用に動いた。しかしそれでも、器を開けるのは難しく、男達は、互いを罵り合うだけだったが、天井が傾いたせいで、三面の壁が一ヶ所ずつ裂けると、器を投げ出して三方に散り、それぞれ選んだ裂け目の奥へ消えた。

　天井が丸ごと崩れたが、空っぽな三角の中に落ちてきたのは、その細かく砕けた塵ばかりだった。そこから卵形の器だけが浮かび上がり、女は、暫く、そのフカフカした塵のプールの中を、潜ったまま泳ぎ回ったが、女の体もまた、細かく砕けて塵になって行くようだった。それから直に雨が降ってきて、フカフカに積もった塵は、段々と粘土のように固まって行き、雨が上がって陽が照ると、更にカチカチに固まった。壁の三つの裂け目もまた、塵で埋まって、すっかり固められた。その固められた奥から、男の声がそれぞれに低く響くと、硬い床の真ん中に置かれた卵形の器が、独りでに割れて、無傷のままの柔らかそうな六枚の手が、男達の息に包まれて、トロリと零れ出た。その掌の肌触りを、床全体で感じ取った女は、堪らずに短い声を上げた。壁の中に閉ざされた男達にも、その声は聞き取れたようで、三方の壁の低い響きはピタリと已んだ。しかし、女の声はそれ一度切りで、六枚の掌も、時と共に干涸らびて、塵にな

って風に飛ばされるしかない。開いたままの卵形の器だけが、人の声を聞こうと、何時までも耳を峙てているようだが、床と壁からは、その崩れたり剥がれたりする音がするだけだ。女などはもう、ひび割れた床の裏側から、その下の地面へと流れ出てしまっただろうか。（二〇〇二年四月十三日）

＊

＊

＊

鋏

撓って揺れるアルミ製の長い梯子を、踏ん張って、しっかりと押さえ付けていた。梯子は、建物の西側の、艶々と磨き上げられた、高い石の壁に寄せ掛けられている。見上げると、急くように、梯子段を荒っぽく踏み付けて降りて来る女が、私の方を見下ろして、黙って、大きな鋏を放った。鋏はクルクル回りながら、私の足元から少し離れた所に、高い音を響かせて叩き付けられ、跳ね上がりざま、開いた刃が空気を裂いて唸った。女と私とで、その西側の壁の上半分に、今日中に、森の絵を描き上げなければならない。山から下りてくる冷たい風が、真面に強く吹き付け、梯子に登ると、直に体が冷えて全身が強張るので、交代で梯子を登って行って、ほんの一筆かそこら描いては、直ぐに降り

て来るのを繰り返していた。
　女は、鋏を放ったきり、梯子にしがみついて目の前の壁を見詰めたまま、降りるのを已めてしまった。同じ服を着た男が二人、私の側に走って来て、鋏に傷付けられた地面を調べ始めた。私には見える傷が、彼らには見えないようで、彼らは、私の周りをただウロウロと歩き回った。梯子を押さえていなければならないので、私は、そこを指差せなかった。男達が代わりに梯子を押さえるなら、私は、その傷を教えられる。彼らにそう言うと、早速彼らは、私の両側に身を擦り寄せた。私が手を離すと、梯子は急に激しく揺れて、男達は直ぐに、腰を低くし、首も腕も腰も梯子にきつく巻き付けて、それを押さえなければならなくなった。
　私は、傷を真上から見下ろした。地面もまた、壁と同じように、艶々と磨き上げられた石で出来ていた。男達は、今にも弾き飛ばされそうで、それどころではなさそうだが、一応、先ずそこを指差した。少しだけ斜めに見ると、そこから地中深くへ、亀裂が走ってもいるようだ。鋏は、壁際で、私の方に向かって分厚い刃を思い切り開き、柄は、その後ろに殆ど隠れている。下手に手を伸ばせば、襲い掛かって来そうだ。しかし、女は、絵の具を詰めた小さな壺を腰に付けて、絵筆だけ持って、梯子を登って行った筈だ。鋏は、何処から出て来たのか。女から聞き出すしかないが、風の音でとても声は届かない。ブルブル

と全身を震わせ、左右から梯子を抱き締めている二人の男は、脂汗を垂らし顔は殆ど土気色で、何時まで持つか分からないが、そこを登って行くしかない。一段目に足を掛けると、目の前をフラフラする女の片足が見えた。登らずに済みそうだ。女の尻を見上げ、鋏はどうしたのか尋ねると、壁に埋まっていたと言う。梯子の揺れは已んでいた。

　私は、女に場所を空けるために一歩後退ったが、女は、降りて来るどころか、また梯子を登り出した。それを見た男達も、先を争って後を追った。二人は、相手の体を引っ張り合って、組んず解れつしながら登って行った。梯子は、誰も押さえていないのに、少しも揺れなかった。真下からでは、女の姿が男達に隠れるので、私はまた幾らか後退った。女はもう梯子の一番上に居て、強風に髪と服を靡かせ、体を突っ立たせたまま、爪を立てた両手で、盛んに石の壁を掻き毟っていた。こうして見ると、森の絵はすっかり出来上がっているようで、そこが石の壁であるとは、もう少しも見えない。女の姿も、森の真ん中で、俯せになって藻掻いているようではないか。男達は、その森の手前で止まっていたが、そこでも互いに譲らずに、組み合っている。

　女が、どうやら掘り当てた鋏を、石の壁の中から引っ張り出そうとするらしく、殆ど梯子から浮かした体を、激しく振り立て始めた。鋏が引っ張り出されれば、女の体は、宙に放り出されるに決まっている。男達もそれに気付いて、

二人抱き合ったまま、女に声を掛けるようだった。いや、もう宙に浮いて見えた。その小さな手が、大きな鍬の柄を握り締めて、辛うじてそこに繋ぎ止められている。腹を反り返らせ、両脚を跳ね上げている姿は、釣り上げられたばかりの魚のようだ。男達が、へっぴり腰でジリジリと後退りを始めると、梯子は左右に揺れだした。それでも、森の中に差し上げられた方は、余り揺れずに、下に行く程揺れるようで、地面に着いている所が、右に左に忙しく滑り出し、その振れ幅は拡がる一方だった。わざわざその下に向かおうとする男達は、周りが見えていないのだ。そうして、梯子は、その左右に振れきった所で地面から浮き上がるようになり、それから直に、真ん中を猛スピードで通り過ぎる時だけ、シュッと音を立てて、石の地面を掠るだけになった。まるで振り子だ。それも、振り立てられた先で、鞭のように撓る。

　女は遂に、石の奥から、自分の体と同じくらいの大きさの鍬を引っ張り出した。反り返った女の腹は益々反り返り、そのままなら、鍬の刃を下に向けて、頭から真っ逆様だろうが、その引っ張り出された鍬は、そのまた奥に埋まっている鍬と、縺れ合っているようだった。その奥の鍬は、直ぐ様、引っ張り出された。するとまた、石の奥に、鍬が繋がっている。鍬の列は、激しく身を拗らせるままの女を先頭に、緩やかな放物線を描きながら、石の壁からジリジリと突き出てくる。私は、その放物線の全体を見渡そうと、後ろ向きにジグザグに

走っていた。そうして、何度も空中に指で線を引き直しては、その放物線の、やがて地上に届く地点の当たりを付けた。そこまで行ってもまだ、艶々と磨き上げられた石の地面が拡がっていた。私は、それに勇気を得て、スラスラとそこに森の絵を描き始めた。強風の梯子の上と違って、物凄い速さで手が動いて、みるみるそこに暗い森を繁らせた。

　眺め回すと、その出来映えには非の打ち所もなかったが、何かが足らない。鋏なのか。或いは、鋏でないかも知れないが、鋏の他に思い付かない。私は、真っ直ぐ走って、壁際に戻ろうとしたが、そこまで来た通りのジグザグにしか進めなかった。壁際まで来ると、人の体がすっぽり落ち込む程も幅のある、震える裂け目が、石の地面に口を開けていた。女の放った鋏の傷から、拡がったものに違いない。後ろを振り返ると、その裂け目は、ジグザグに、私の描いた遠い森の手前まで続いていた。それに沿って、ジグザグに戻って正解だったのだ。真っ直ぐ戻っていたら、忽ち、その裂け目の餌食になっていた。

　梯子の振り子は、相変わらす猛スピードで往復していたが、真ん中に来ても、もうずっと地面より上で、ただ空気を裂く口笛のような音を立てて行くだけだった。男達の姿は、梯子の途中に、骨と皮だけになって、辛うじてへばり付くだけのようだが、振れが速すぎて、そう見えるだけかも知れない。鋏はまだ、壁際にくっついて、刃を、私の方に向けて拡げていた。その上を、梯子の端が

風を切って行き過ぎる度に、鋏は、シュッシュッと音を立てて、素速く開いたり閉じたりした。とても近付けない。

私は、ずっと横に回り込んで、壁際を、壁に沿って走った。そうして、一番低くまで振り下ろされて来た梯子が、真横を行き過ぎようとする瞬間、それに身を預けた。私の上半身は、確かに、振り上げられて行く梯子の縁に飛び移れた。しかし、腰から下はどうか。その瞬間に、私の直ぐ前で、鋏が口を開けていたのだ。私の体は、上と下に真っ二つだろうか。恐る恐る下に目を向けると、まだ下半身があるかどうかは分からないが、下半身のあるべき所に、大きな鋏が、開いた刃を振り立てていた。それは、私の新しい二本の脚のようでもある。元には戻らない。なるようになるだろう。私は、上を向いて、一段一段をしっかりと握り締めて、梯子を登った。二人の男は、骨と皮ではなかったが、私に跳ね飛ばされて、抱き合ったまま梯子から落ちた。

壁の森に入ると、揺れは収まった。改めて、下半身を見直すと、腰の下に二本の脚がちゃんと伸びている。ただ鋏の柄が、腰の辺りに縺れて、脚と同じ長さの二本の鋏の刃も、脚のように腰から下に伸びていた。そして、森の中では、生身の脚よりも、その鋏の脚を使った方が、歩き易かった。垂直の壁ではなく、水平な地面に描かれた森の上を歩き回るようではないか。梯子など要らなかった。却って邪魔なので蹴落とした。壁に沿って横向きに倒れて行く梯子を、下

で受け止めようと、二人の男が、走り回るのが見えた。その地面から、ジグザグの裂け目が、物凄い速さで、壁を這い登ってくる。このままでは、その裂け目は森を駆け上り、森を裂いて、更に石の壁全体を真っ二つにしてしまうだろう。

　女を先頭にした放物線を見上げても、まだまだ私の描いた地面の森までは届かない。私は、鋏の脚で壁を駆け回り、壁に描かれた森を切り取っていった。その森が壁から浮いて剥がれて、裂け目は、その森の下の石の壁だけを突き上がって行き、壁は二つに割れた。地面でも、裂け目の幅はどんどん拡がって、男達が、その中へ梯子を降ろしている。絵に描いた森が、そのまま宙に浮いていられる筈もない。それに、壁から剥がれては、鋏はもう出て来ないので、放物線がそれ以上伸びる事もない。私は、また鋏の脚で森を駆け回り、それを二枚の翼を拡げた形に切り揃えようとした。しかし、私は、足を滑らせて何も出来ないまま、地面に落ちて行った。少し先で、放物線の先が、急にお辞儀をして、女もまた、鋏の列を引き連れて、真下へと落ちて行くようだった。ただ、私は、下半身の鋏が翼の役を果たし、真下を向いていた頭は段々と横を向いて、落ちる速さも和らいだ。

　私は、裂け目へ落ち込む事もなく、そのジグザグの上をするりと飛び過ぎて、私の描いた石の地面の森へと、滑るように着地を果たした。女は、鋏諸共こん

がらがって、ガチャガチャと音を立て、裂け目の中へと転げ落ちた。裂け目の底で、男二人が、女に駆け寄って行く。男達によって、女は鋏の中から助け出されたが、男達は、鋏の刃で体中を切って、真っ赤になって倒れて、それきり動かなくなった。女は、梯子を登って、裂け目から抜け出し、裂け目の縁に沿って、ジグザグに、地面の森まで歩いて来た。その森の真ん中で、私を押し退けて、女はまた、石を掻き毟り、鋏を掘り出し始めた。

　石の壁から剥がされて宙を舞っていた森が、地面の森の上に落ち掛かって来るようだった。穴掘りに夢中の女など放って置いて、私だけ、森の外に逃げようとした。森と森は、激しく擦れ合って火を噴いた。その中に挟まれた女が、火達磨になって転げ回る。私にも火は迫ったが、燃えたのは、下半身に絡む鋏だけだった。鋏はまるで、紙のように燃えた。身軽になった私は、炎に包まれた森を走って、そこから抜け出した。森も女も全て灰になって、私だけが残された。私の生身の脚は、先を尖らせ、すっかり硬くなって、開いたまま全く動かせなくなっていた。遠い建物の方を向いて、磨き上げられた冷たい石の地面の上に、ずっと脚を投げ出しているしかない。地面を走るジグザグの裂け目は、何時の間にか、綺麗に閉じ合わされている。建物の、西を向く四角い壁一面が、落ち掛ける陽に微かに映えて、艶々と一点の曇りもない石の輝きを示した。（二○○二年四月十五日）

*　*　*

溝

　舗装された広い道だったが、渡ろうとすると、ゴミが散らかっていて、ひどく歩き難い。真向かいの凸凹した白い塀の奥から、腹の底に響く地面を揺らす音が鳴り渡って来る。塀もまた、継ぎ目継ぎ目でガチガチと耳障りな重い音を立てて揺れ、それが鉄の板であると分かる。ゴミは恐らく、その塀の所々の隙間から、風に吹かれて転げ出て来るらしい。私は、その塀を横目で睨みながら、道を斜めに渡って、塀の先の、溝の手前で立ち止まった。

　立ち止まらなければ、余所見しながらでも、一跨ぎに出来ただろう。どうして、立ち止まったのか。改めて足を前に運ぼうとすると、足が、どうしようもなく弱っているのに気付いた。もし跨ごうとしていたら、その幅の狭い溝の中に転げ落ちて、嵌り込んだまま、出られなくなっていたのではないか。それ程深くない溝の底には、汚い水が菱形の波を細かく並べて、流れているだろう。それを確かめようと覗き込むと、覗き込んだだけ、溝は深くなって行くようで、その底は、私の目を逃れて暗い中に姿を隠した。溝の直ぐ先は、また溝だった。

身を乗り出せば、その溝も覗き込めて、その底に水が流れているのは、確かめられる。よく見ると、その先にもう一本溝がある。その溝は更に浅くて、斜めからでも底が見えた。湿ってはいるが、水は流れてはいないようだ。

　足だけでなく腰も弱って、前に傾けたままの体を支えられずに、私は、その横三列の溝の上に、倒れ込んだ。それでも、あるだけの力で脹ら脛を引き締め、出来るだけ体を前に投げ出すようにしたので、頭は、三列目の浅い溝の向こうまで届いた。ただ、首にぴったりの短い首飾りをしていて、それがちょうど、三列目の溝の角に当たって、首飾りの鋭く角張った玉で、激しく喉を突かれた。堪らず、首を無理に捻ると、首飾りは首に巻き付いてきて、喉を締め付けた。指をこじ入れて、首飾りを外そうとすると、指は、首飾りが三重なのを感じ取った。ジリジリと仰向けになると、真昼の日差しに目が眩み、体はそれきり動かなくなった。

　少なくとも、二人以上の誰かが、私の頭と足首を掴んで、私を持ち上げたようだった。体は棒のように強張っているらしかった。両目の中に光りの粒が投げ込まれたように、目は眩んだままで、何も見えないが、声は聞こえた。

「何処へ運ぶか、聞いてるか？」と、低い声が尋ねた。

「いいや。先ず、溝を埋めてからだ。」と、もっと低い声が答えた。

それなのに、私の体は、直ぐにどちらかへ、真っ直ぐに運ばれているようだ

った。足音はザクザクと同じ調子で続き、踏み惑ったりよろけたりする事はなさそうだった。

「見たものを、持って来た。」と、これは、私の声だった。声は出せるのだ。締め付けた首飾りが、勝手に喉を震わせるのか。

「だろうな。そうでないとしたら、ゴミだ。」と、低い方の声が言う。

「そうだとしても、最後はゴミだ。」と、その声は、低い声を真似るようだった。

「それは、何でもそうだ。」と、低い方の声が、逆に高く掠れた声を作った。

「そんな風に思うのは、初めからゴミしか見えてないからだ。そのゴミにしても、お前が何をそう呼んでいるのかも、分かってないだろう。こんな事をお前に言っても仕方ないから、こう言う事が、初めからゴミだが、それをゴミかどうか碌に聞き取れないお前こそ、真っ先にゴミだ。」と、これは、私も含めて、誰の声か分からなかった。

　眩んだままの目が、目の中の光りの粒が見せる特別な輝きだと見ていたものは、どうやらそうではなくて、輝く空に向かって垂直に突く立てられた真っ白な棒のようだ。私は、それを、殆どその真下から見上げていて、その高さも太さも見当も付かなかった。地面に横たえられ、取り敢えず独りだった。

「見たものを、持って来た。」と、私の声が言った。

　その声に促されて、私は、体を半回転させながら立ち上がり、白い棒と間近に向き合った。指で喉を引っ掻くと、首飾りの玉が、バラバラと首から零れ落ちた。慌てて腰を屈め、それらを掻き集めたが、手の中に残ったのは、左右に一つずつだけで、どちらの玉もスベスベしていて丸かった。丸すぎて、何時また、手から零れ落ちないとも限らない。他の角張った玉は、みんな何処かに行ってしまった。その二つの玉を、棒の先に突き刺さない限り、安心は出来そうにない。棒に触れてみると、その先端は、ずっと高くに見上げられた。玉を口に含んで、棒を攀じ登ったが、なかなか登り切れない。そんなに高い棒なのか。横を向いて見下ろすと、地面は直ぐ下で、そこを、角張った玉が幾つも転げ回って輝いている。それに向かって声を上げそうになった弾みで開いた口から、丸い玉が二つとも零れ落ちて、呆気なく角張った玉に混じった。

　降りようとして、また棒と向き合うと、目の前に、尖った棒の先が、高い日差しを受けて焼けた鉄のように輝いていた。見たものを、持って来たなら、それをそこに示すべきではないか。指で喉を引っ掻くと、首飾りの玉が、首から零れた。慌てて手で受けると、左右に一つずつ、また丸い玉が残った。それを尖った棒の先に突き刺そうとしたが、手が滑って、二つとも落としてしまった。その落ちて行くのを目で追うと、地面は遥か下で白く輝いて、二つの玉は、その輝きに溶けるように消えた。私は、最後の首飾りに慎重に指を掛けた。しか

し、それは千切れずに、力を入れて引っ張る程首を締め付けて、元に戻らなくなった。指でなぞると、その首飾りには玉は一つも付いていなかった。革紐を巻き付けたように、それは首にきつく食い込んで、目玉が飛び出そうになった。
「見たものを、置いて行け。」と、私の声が言うので、私は、棒の先の輝きに顔を擦り付けて、飛び出た目玉を、二つとも、その棒の先に突き刺した。
　その目玉は、私が跨げなかった最初の溝の方を、真っ直ぐに見下ろした。今度は、溝の底まで、見通せた。首飾りの角張った玉が、ばらけて水のように無数に流れ込み、その上で足を滑らせそうになった男が、その男の手を取っていた細い体付きの女の方に倒れ掛かかり、棒のような女の腰にしがみつくと、女の腰は、くの字に折れた。そうして、上体を倒した女の顔が、溝の底に着くと、そこを流れる角張った玉が、女の目を二つとも刳り抜いていった。それを見た男は、女の上にのし掛かりながら、自ら進んで顔を溝の底に着け、角張った玉で自らの目玉を刳り抜かせ、その目玉に、女の目玉の後を追わせた。それからやっと、男は、女を放して立ち上がり、足元を流れる角張った玉を拾い上げては、次々にその穴に細い革紐を通して、長い首飾りを作り、それで自らの首をグルグル巻きにして、力の限り、首を絞めた。足腰が震えだし、前のめりに倒れると、男の体は、女を置き去りにして、角張った玉の流れに乗って、大きな音のする白い塀の奥の方へと運び去られた。残された女は、くの字のまま天を

見上げ、助けを求めて叫ぶようだったが、その隣の浅い溝を水に流されて行く二人が、低い声を絡ませ合うだけだった。恐らくそれは、女の耳には届かないだろう。その二人を流した溝は、直に埋まってしまった。三列目の溝は、初めから埋まっていた。

　私は、力の限り、棒にしがみついていたが、段々と力が抜けて、ズルズルと棒を滑り降りるしかなかった。ただ、それに連れて、棒もまた短く縮んで行くようだった。棒を降り切ると、私はその棒の真ん中辺りを強く握っていて、棒の先に刺さった私の目玉はもう、溝の底のくの字のままの女に、狙いを定めていた。その棒が女に投げられる前に、目玉を取り戻したかったが、そう思って見直すと、棒の先は尖っているだけで、もう目玉はなくなっていた。棒は、槍のように放たれ、暫く眩しい日差しの中を飛んで、溶けるように見失われ、その日差しの中で改めて狙いを定め直されたか、溝の中へ、私には思いも寄らないの角度で突き進んで、女の体を貫いた。串刺しの女の体は、腰から二つに折れた。角張った玉の流れは収まっていて、動かなくなった女の体は、棒に貫かれたまま、角張った玉を敷いた溝の底にジリジリと埋もれていったが、裂けた女の腹から、ほんの少し透き通った小さな袋が押し出され、それだけは、水に浮くように角張った玉の上に乗ったままだった。

　それが見えるなら、私の目玉は多分、私の目の穴の中に収まっているのだ。

小さな袋は、ゴソゴソと蠢いて、その中に、男と女の四つの目玉が絡み合っているようにも、見透かせた。袋を開いて、その四つの目を一繋ぎにして首に掛ければ、私はまた、私の見たものを持ち運べて、ゴミにならずに済むだろうか。誰かに拾われる前に、そこに行かなければならないが、それには、私の体が、日差しの輝きの中へ、槍のように放られるしかない。（二〇〇二年四月十七日）

＊　　　＊　　　＊

缶

大勢の中に混じり、地面を揺らす甲高く騒がしい音を鳴らして、私は、硬い地面を踏み付けていた。濡れた布切れで、時々口を湿らせるだけで、朝から少しも休んでいない。その上には空しか見えない高い鉄板の塀に囲まれていたので、外から見られる心配はなかったが、無数の高い音が軋み合い渦を巻くように唸って、隣の者が何を喚いていても聞き取れない。私達は、ギラギラと石粒のように光らせた互いの目の奥を覗き込んでは、言葉の代わりにした。それとも、日焼けした裸の体から噴き出す汗が、言葉の代わりだったろうか。それで、一切が伝わるに充分だったようでもある。日が暮れる頃になると、私達が地面

を揺らし続けたせいで、塀は捩れて隙間だらけになっていた。そこから冷たい風が吹き込んで、濡れた体を急に冷やされては、私達は、痩せた身を寄り添わせてブルブル震えるしかなくて、その日の作業は終わった。私は、その日一日同じ所を踏み続けて拵えたバケツを一個ぶら下げて、塀の外に向かった。その土を、ただ足で踏むだけで、バケツの形に整えたのだった。バケツの元になるような土を、大勢で固まって踏み付けていたのだから、その金属音にすっかり縛り付けられたようになって、同じ事を繰り返すだけで、そこを動けなくて当たり前かも知れない。

　塀沿いの道は、左に緩く曲がり、そこを行けば家に辿り着ける筈だ。他には、三人だけ一緒で、それ以外の者達は、塀の別の方向の隙間から出て行ったのだろう。三人が手にぶら下げているのは、大きさは私のバケツとそれ程変わらないが、どれも口を塞いだ缶の形をしていて、中からチャポンチャポンと水の揺れる音がする。私のバケツだけ空っぽで、その底に触れても、濡れてさえいなかった。その私に、三人は見て見ぬ振りをするようで、どうも話し掛け難い。言葉を掛けなくても、彼らの目を覗き込めばいい。彼らは、一斉に顔を逸らした。そこから先に道はなかったが、家の方向は分かった。ただ、三人は戸惑っているようだ。

　私は、戯れに、バケツの底に向かって話し掛けた。覗き込むと、バケツの底

は暗くて見えなかった。手を入れると底が抜けている。その下にスッと降りた指先が、温い水に触れた。それは、家と反対方向に、緩やかに流れているようだ。暫く、指先の感触に従って、その流れの向かう方へと歩いてみる事にした。地面は、真っ暗で何も見えないが、恐らく大きな石ころがゴロゴロしていて、それを踏み外しては足首を捻った。水の流れは、右に左に大きく小さく拗ったが、帰るべき家の方向は、磁石が頭の中に埋め込まれたかのように、見失われる事はなかった。指先が、キラリと光ったように見えた。水が、私に、何か話し掛けるよう催促しているのではないか。もう忘れてしまったが、ずっと前に、水と言葉を交わした事があるような気がしてきた。次第に、指先だけでなく、バケツの中の水の流れ全体が、透き通って輝くようだ。指先の周りの細かく震える水面の模様が、言葉の代わりだろうか。

　そして、その水面の模様が、二桁の数字の形になるようだった。その数字を呟くように読むと、居なくなってしまったようだった三人が、三方から私に身を寄せて来て、「何処からその数字を割り出したのか」と、問い詰めるように言い募る。私は、彼らに、「缶を開けてみればいい」と、静かな調子で答えた。私のバケツを覗き込んで、その水の光りを受けて闇に浮かび上がる三人の顔は、どれも怯えたように歪んで見えた。それから、各々、「缶を開ける訳には行かない。自分にはまだ時間が必要であって、その理由はこれこれである。」と、

クドクドと述べ立てた。私は、いい加減聞き流し、「水とだけ話したいので、暫く消えていてくれないか」と言った。私の言った数字について、それを右から読むべきだの左から読むべきだの真ん中から読めないのはどうしてだのと議論しながら、三人固まって、私の側から離れた。

　水面の模様が、今度は一桁の数字を見せた。私は、謎が解けたように思えた。三つの数字を三角形に並べれば、どちらから読むなどと言う事で、頭を悩ませずに済むのだ。真ん中から、三方に向かって読む事も、そうしたければ出来るだろうし、その逆でもいい。それきり、水面から模様は消えた。私は、立ち止まって、指をバケツから引き上げ、その場で地面を踏み始めた。線のように細い水の流れが、私を円く取り囲むのが、輝いて見えたかも知れない。三人がまた戻って来ていたが、その水の円を跨ごうとはしなかった。私は、三つ目の数字を、彼らに聞こえるように言った。彼らは、私を三方から取り囲み、三つ揃った数字を、一人一つずつ唱えた。すると、その三つの数字は、合わさってゼロになって消えた。それから、三人固まって、私の家の名を呼びながら、私の家の方へ一目散に駆けた。その家の名も、ゼロになってしまった三つの数字から成っていた。

　踏み付けている地面が、捲れ上がって、闇の中で煌めいた。すっかり剥がすと、それは、薄い金属で出来た服ではないか。着てみると、上から下までぴっ

たりで、余りに肌に密着して、しかも指先までも包み込み、私の体の熱を凄い勢いで奪ってゆくようだ。私は、水の円の中に飛び込んだ。線のように細くても、金属の服はそこをするりと擦り抜けて、私の体は、地面の直ぐ下の、深く広い水脈に潜り込んだ。そこでも水は温かったが、どちらに流れるでもなく、気紛れに、至る所で、大小の渦を湧き起こしていた。私は、巻き込まれないよう、行く手を阻む渦に、底の抜けたバケツを被せながら、家の方に真っ直ぐに泳いでいった。

　私の家は、写真でしか見た事のない石造りの城塞のように聳え立っていて、三人が、その前で見張っていたが、私は、彼らに知られずに、水脈から家の井戸を抜けて、中に入った。薄い金属の服を脱ごうとしたが脱げなかった。外よりは少しはマシかも知れないが、やはり、体の熱はどんどん奪われた。震えの止まらなくなった手が、バケツを投げ出すと、渦だけの水が、バケツから数え切れずぶちまけられて、巨大な独楽のように家中を走り回った。壁に激しくぶち当たっては跳ね返り、城塞のような家全体をグラグラと揺らす。それらが、壁にしかぶつからなくて分かったが、どちらを向いても壁ばかりで、人一人、家具一つ、見当たらなかった。壁を跳ね返った渦は、私の方にも飛んで来るので、私は、床に俯せになった。石の床は、空気よりは少しは温かくて、その分、熱は、奪われずに済むようだ。床に片耳を当てると、外の三人が、三方に逃げ

て行く足音を聞き取れた。私は、石の床に押し当てた唇を、トランペット吹きのように震わせて、家の名である三つの数字を叫んだ。遠い三方の足音が、よろけるのが分かった。壁が崩れ、天井が落ちてきたが、衰えない水の渦が、一晩掛けて瓦礫を押し退け、私を助け出した。

　東の空が白み、びしょ濡れの瓦礫の山の前で、三人が私を待っていたが、金属に身を包んだ私の姿は、彼らには見えないのか。彼らに話し掛けたが、私の声は、恐らく余りに冷たすぎて、彼らの耳では聞き取れないらしい。結局、待ちきれずに、三人だけで、またあの塀の中の耳を劈く作業場へ向かうようだ。明け初めたばかりの薄い朝日を浴びた青い一本道が、瓦礫の前から塀の前まで、真っ直ぐに伸びている。そこをテクテクと歩いて行く三人に、途中、何人も次々と合流して来るのが見えた。私の中にはもう、どんな熱も残っていなかった。バケツも井戸も水の流れも見当たらない。突っ立っていても仕方ないので、彼らと同じ道を、作業場に向かう事にした。

　私は、その道の上を滑るようにして、直に追い付いた。彼らは皆初めから、チャポンチャポンと水音を立てる缶を手にぶら下げて、塀の隙間から、肩を寄せ合って中に入っていった。そして先ず、その缶を、腰にしっかり結わえ付け、塀の歪みを直してから、互いに声を交わし合って、鑿と金槌で、硬い地面から石を採り始めた。私独りが、その音のうるささに耐え切れず、その場で足踏み

を始めたが、気に留める者もなさそうだ。

陽が段々高くなると、私の金属の服は、日差しの熱を蓄え込んでいった。その熱さで、頭がクラクラして地面に倒れると、何人かの鑿と金槌が、私の体をバラバラにした。いや、バラバラになったのは、金属の服だけで、私はやっと助け出されたのだ。そこでまた、昨日のようにせっせと地面を踏み付けて、バケツを拵える事にしたが、周りの者達は、自分が背負えるだけの石を採ると、それを背負って、易々と垂直な塀を攀じ登り、次々に出て行った。腰に結わえた缶が、塀に当たって、カチカチと音を立てた。彼らの体は、まるでその音に押し上げられるようだった。陽が真上に来た頃には、物音一つしない中、私独りになった。ズタズタの金属の服を丸めて踏み付けても、銀色の粉が、ゆっくり静かに舞い上がるだけだ。乾き果てたゴツゴツした石の地面と、それを隙間なく囲む鉄の塀と、太陽が照るだけの青い空しかない。水を相手に、数字の遣り取りなどしたのが、いけなかったのか。ずっと前の事で、数字ももう忘れた。

（二〇〇二年四月十九日）

*　　*　　*

夜の散歩

夜、男が追い付いてきて、カレンダーを拡げて見せた。日付は暗くて分からないが、小さな丸が並んでいるのは、ぼんやり見て取れる。男は、その丸の一つを指差したが、それきり、口をモグモグさせるだけだ。そこに書かれてあるらしい、今日の私の予定を読み上げたいのか。それなら、分かっている。静まり返った中、ゴトゴトと音がするので、下の階に降りて灯りを点けると、壁にカレンダーが掛かっていた。一月から十二月まで全て揃ったままで、今日の日付を見付けるのに、その一月から十二月までを、何度も捲り直さなければならなかったが、やっと見付けた今日の日付に、赤い丸が打ってあった。その赤丸の日は、夜中、散歩に出る事にしている。すっかり忘れていて、危うく床に着いてしまうところだった。早速、外に出ようとしたが、散歩用の靴が見当たらない。夜も更けていて、時間をムダには出来ない。ゴミ箱をあさって、クシャクシャに丸めた紙を何枚か拡げ、それで足を包んで、外に飛び出したのだった。

私は女で、子供に手を引かれていた。子供は、暗がりにポツンと見える遠くの窓灯りに向かって、グングン進もうとする。男の方を振り返ると、そちらにも、遠くにポツンと窓灯りが見えたが、男が、両腕を上げて真ん前に立ち塞がった。私に、その窓を見られるのが嫌なのだろうか。私は、子供の手を振り払い、筋骨逞しい男の体から身を躱して、その窓を、もっとよく見ようとした。

明るさも色も形も大きさも、二つの窓はまるで同じに見えたが、ただ、そこまでの距離が分からなかった。殆ど反対方向なので、二つを同時に見比べられない。同じ遠くでも、小さな窓なら、それ程でもないし、巨大な建物の壁の全面を占めるような窓だったら、夜中中歩いても辿り着けないくらい、離れているだろう。

　男はもう、立ち塞がったりしなかったが、子供が、腰にしがみついて来るので、振り払った。その振り飛ばされた子供が、急に見えなくなった。暗くてはっきりしないが、穴にでも落ちたらしい。足元の低くから、呻くような歌うような小さな声が聞こえる。男が、その辺りを見下ろして口笛を吹くと、声は已んだ。私は、二人を放って置いて、夜の散歩の続きをしようと思うが、どちらに向かえばいいのか分からなくなっていた。空は、夜にしては妙に明るくて、月も星もない。二つの窓も、どちらがどちらか、分からなくなってしまった。

　男は、まるで子供の息の根を止めたいかのように、しつこく口笛を吹き続けた。男が、首を振り立てると、男の長い髪の毛がバラバラと青い顔に掛かった。私は、男の後ろに回り込み、その髪を掴んで束ねた。男は、私よりずっと背が低かった。私は、慣れた手付きで、その髪を丸く結い上げた。柔らかそうな後れ毛がフワフワと逆立ち、細い項が剥き出しになると、女のようではないか。口笛がすっかり掠れて、男が、私の方を振り仰いだ。間近に見下ろす顔付きは、

頬など艶々と透けるようで、すっかり女だった。寧ろ、私の方が男かも知れない。

その直ぐ後ろの穴の中に、子供の後ろ姿が浮かんだ。そこで子供は、マッチでも擦って、小さな火を手に入れたようだ。男か女か分からなくなってしまった者も、直ぐに気付いて向き直り、また口笛を吹こうとするが、シューシューと歯の間から息が洩れるだけだった。私は、そいつの華奢な背中を押して、穴に突き落とした。光りが激しく動き回って、その俯せの背中の上に、子供が乗った。素速く身を翻したのだ。それでも、後ろを向いたままで、そこにしゃがみ込んだ。私は、声が出掛かったが、下手に係わらない方がいいと思い直し、た、だ黙って、暫くその丸い小さな背中を見下ろしていた。直に、子供の足元から、殆ど透き通った煙が昇った。焦げ臭い匂いからして、私の結った髪を燃やしているに違いない。シューシューと微かな音が聞こえてきた。穴の中が、更に明るくなった。

私は、二、三歩、後退って、ぐるりと遠くを見回した。初め目を凝らしても真っ暗で何も見えなかった中から、まるで私に催促されたかのように、それぞれの方向の二つの窓が、ノロノロと明るさを増して行く。その窓のせいで行き惑っているのかも知れないのに、その灯りを見付けて、私は少し安心出来た。斜めから見る穴も、明るさを増して行くようだ。私は、男か女か分からない者

が持っていたカレンダーを探す事にした。しかし、穴は、明るくても地面を照らす訳ではなく、四つん這いで地面を撫で回して行くしかない。なかなか見付からずに、焦って諦めようとすると、真っ暗だった地肌が微かに見え始めた。その分、燃えるようだった穴の明るさが、勢いを失ってゆくようでもある。空を見上げると、一番高い所に、星が幾つか、ひそひそ話でもするように寄り集まって、輝いている。

　星明かりは、穴から激しく立ち昇る煙をも、照らし出した。煙はすっかり灰色で、それを照らす星を目指すかのように、一筋に高く伸びていた。穴から、子供だけが這い出した。全身、灰色だった。その子供が目を向ける方に、紙の筒が転がっている。私は、慌てて、四つん這いのまま駆けずって、それを掴み取った。カレンダーに違いない。焦げ臭い匂いのする子供もまた、その端を掴んでいて、ビリビリと紙の破れる音もしたが、何とか私は、子供の手を振り切った。カレンダーは、破れた形跡はなかったが、巻き癖が付いていて、真っ直ぐ拡げようにも、巧く行かない。その捲れた縁に目を遣ると、去年の年数が書かれてある。私は、それを子供に投げ付けた。子供は、柔らかい手付きでそれを受け止め、乱雑に拡げ掛かったのを元に戻してから、ゆっくりと真っ直ぐに拡げていった。覗き込むと、やはり去年のカレンダーだった。子供はそれを、興味なさそうに穴に投げ込んだ。穴はまた急に明るくなって、そこから男が出て

来た。長い髪も肩まで垂れて、体の何処にも燃えたような跡はない。灰色で焦げ臭い子供のように、煙で燻されたような風でもなかった。その男がノロノロと腕を伸ばせば、その手はもう、私の胸ぐらを掴んでいた。私は、振り回されて、穴に放り込まれた。

　穴の底で、カレンダーが炎に包まれていた。巻き癖は大分取れて、ほぼ平べったくなったその一番上の紙が、黒焦げになって、捲れ上がって行く。それを素速く手で振り払うと、炎を纏っていてもまだ燃えていない、最初の月の頁が見られた。日付の上に、幾つか赤丸が打ってある。直にその頁が黒焦げに捲れ上がり、それを除けると、また、燃えていない次の月を見られる。そうして、最後の月まで見終わって、カレンダーは全て黒焦げになったが、頭の中には、赤丸の日付が全て、今見て取ったまま、記憶されて並んでいた。それは、壁に掛かっていたカレンダーの赤丸の日付と、そっくりと同じに違いなかった。燃え滓は燻り続けて、穴の中の明るさは、それまでと余り変わらない。しかし、燃え滓だけでは、明るすぎる。ひょっとして、私が燃えているのか。

　その自らの体は顧みずに、穴の縁から首だけ出して、外の様子を窺った。子供が、女の手をグイグイと引いて、二人は、遠い窓の灯りの方に進んで行く。幾ら遠くても、その窓には見覚えがある。先程の窓と、明るさも色も形も大きさも同じだが、確かに私の部屋の窓だ。長く細い脚が縺れて、女は何度もよろ

けそうになり、その度に甲高く響く短い笑い声が、私の所まで届いた。声は、少しずつぼやけて直に聞こえなくなったが、二人の姿は、小さくなっても見失われなかった。窓の側まで来て、女は、子供に微笑みかけながら、その手を振り払い、一人、部屋に入ったようだ。子供は、癇癪を起こして、暫く地面に大の字になって手足をバタバタさせてから、周りに誰も居ないと分かると、小走りに何処かに立ち去った。それから、ゆっくり窓が開いて、真っさらな去年のカレンダーを壁に掛ける、女の姿が窺えた。赤丸を打つのは、まだこれからだ。それならそれは、去年の私の姿に違いない。

　私は、後ろを振り返った。そちらにはまだ、もう一つの窓灯りが、それまで通りにあった。他に、私の向かう先があるだろうか。もう、何時夜が明けてしまうかも知れない。私は、穴を出て、早足でそちらに向かった。穴を出ても、周りの明るさだけは変わらなかったが、窓は、何時まで経っても近付いて来ない。

　足が燃えているから、明るいままなのだ。いや、足を包んでいる紙が燃えている。足を止めて、その一枚を剥がして、拡げてみる。炎は、熱くも冷たくもない。紙は、カレンダーを破いたものだ。日付には、赤丸が打ってある。頭の中に並べた赤丸の日付と照らし合わせるが、まるで一致しない。次の一枚を剥がすと、一昨年の年の数が大きく読み取れる。手足が急に熱くなって、慌てて

歩き出すと、直ぐに熱は収まった。炎の熱から逃れるには歩き続けるしかなさそうだが、その歩いているのが、一昨年の私では、何時、窓に行き着けるか知れないし、行き着いてどうなるのか。もう一夜の事でもない。（二〇〇二年四月二十三日）

＊　＊　＊

蜘蛛の脚

夜まで歩き回った末に、やっと見付けた部屋に入った。私の他には、男と女が二人ずつ居た。彼らも、今着いたばかりに違いなく、上着は砂埃に塗れていて、古ぼけたソファーに腰を沈め、重そうな靴を脱ごうとしている。恐らく、家を失った者だけが、この部屋を借りられるのだ。彼らに確かめるまでもない。皆同じような、尖った虚ろな目をして、目の前のものをただ見詰めようとしては、見詰め損なってばかりいるではないか。私の家は、大水が出て倒れた。それとも、誰かに火を着けられたのだったか。その両方かも知れない。もちろん、彼らに、家を失った訳など尋ねるべきではないし、私にしても、よく思い出せない事に色を着けて、それを初対面の相手に話したりしたくない。

私は、喉が渇いていた。靴を脱ぐより先に、水が欲しかった。彼らの姿を暫く眺めただけで、一言の挨拶も交わさないまま、一人廊下に出て、灯りのない狭い階段を降りると、天井の低い入り組んだ形の広い部屋で、何人かが往き来していた。その内の誰かを捕まえて、水の事を聞きたいが、巧く行かない。ウロウロ歩き回っていると、ゴロゴロと大きな音がして、横を向いた壁の、エレベーターの大きな扉が開いた。中は、私達の部屋よりずっと広く明るくて、ボサボサ頭の太った女が、水と料理を積み上げた、大きな鉄のワゴンを押し出そうとしていた。私は、その積まれた中から五人分の水を取って、懐に抱いた。その水は、缶詰に入っていた。太った女が、尖った頬骨を更に尖らせて何か言いながら、私に、分厚い刃のナイフを五本渡した。缶詰の表面には、そのナイフを使った缶詰の開け方が、絵に描かれてある。私は、それも懐に抱いて、階段に向かった。

　入り組んだ壁に階段は幾つもあって、迷っていると、鉄のワゴンを押し出す太った女がのろのろと側を通り掛かり、「さっきのエレベーターを使えば近道だ」と教えてくれた。エレベーターに戻ると、ドアは開けっ放しになっていて、乗り込むと、斜め奥は広い厨房で、何人かが忙しく立ち働いている。厨房ごとエレベーターの中に収まっている筈もない。エレベーターの奥の壁が、ぶち抜かれているのか。一つ上の階のボタンを押すと、扉が閉まってエレベーターは

昇り出したが、厨房は、斜め奥にそのまま見えていた。ただ、そこに居る者達の動きが、止まってしまったようではある。

　扉が開くと、それ程奥行きもない狭い廊下で、鉄のドアが幾つか並んでいるだけだった。一番奥が、私の部屋だろう。固いドアを押すと、どうやら別の四人が居て、三人は男だった。女だけが、後ろ向きに立って何かをしているようで、男達は、頬杖を突いて床に寝そべっている。側の男が、面倒臭そうに私を見上げ、「そこに置いていけ」と言った。私は、部屋の真ん中のテーブルまで進んで、缶を置く振りだけして、そのまま部屋を出た。エレベーターの扉は閉まっていて、その前で待っていると、部屋から、さっきの男が出て来て、私に、果物の皮と食い滓を乗せた皿を渡した。私が、「水はどうしました？」と尋ねると、男は、「水がどうした」と言って、壁に張り付いている土色の大きな蜘蛛を指でつついた。蜘蛛はひどく弱っているようで、脚が五本しかなく、節くれ立った長い指をした人の手のようだった。部屋から女が出て来て、男に大振りの空のコップを渡し、「用事が出来たので、三十分したら戻る」と男に言って、廊下の奥へ消えた。

　廊下は、行き止まりではなく、何処かに通じていたのだ。男は、蜘蛛をコップに入れるのに掛かり切りで、女には見向きもしなかったが、私は、女の後を追った。しかし、廊下はやはり、行き止まりだった。振り返ると、直ぐ脇の壁

に狭い隙間があって、鉄格子が嵌っている。その奥はまた広い厨房で、女の姿も見えた。鉄格子を押すと、奥に跳ね上がった。廊下の男が声を上げた。蜘蛛を捕まえた事を、私に知らせようとしているのか。係わるべきではない。私は慌てて、鉄格子を潜った。水を吹き付けて床の汚れを洗い流している者の横を通って、厨房を抜け、厨房より明るい所まで来ると、そこはエレベーターの中だった。一つ上の階へ行くボタンしかなく、それを押した。振り返って、昇って行くエレベーターの床と厨房の床を見詰めていても、ずっと一続きのままだった。広い厨房の隅まで見通せたが、女の姿はなかった。

　扉が開くと、また同じ狭い廊下で、一番奥の鉄のドアは開けっ放しになっていた。その部屋に入ると、男女二人ずつの四人が、目を輝かせてテーブルを囲んでいる。テーブルの真ん中に大振りのコップが乗っていて、中の蜘蛛は、死んだように動かなかった。「水を遣れば、生き返るかも知れない」と、私は言って、五つの水の缶詰をテーブルに置いた。四人の目が、急に曇った。私は構わず、ナイフを振り立てた。ナイフは、缶詰ではなくて、コップを這い出した蜘蛛の脚を突き刺した。少し藻掻いただけで、その蜘蛛の脚はもげた。私は、二本目のナイフを取って、今度こそ缶詰の上に突き刺そうとしたが、また蜘蛛に脚を刺してしまった。「もういいでしょう。」と、女の一人が言ったので、私は已めた。二人の女は、蜘蛛の脚の刺さったナイフを二本ずつ取って、「捨て

てくる」と言って、出て行った。男二人は、私から皿を奪って、果物の皮と食い滓をしゃぶった。
「ひょっとして、それは、蜘蛛に遣る積もりのものだったかも知れませんよ。それより、水は欲しくないんですか。」と、私は話し掛けたが、答えは返ってこなかった。
それから私は、女達が気になって、部屋を出た。エレベーターの扉が開きっぱなしになっていて、女二人が中で立ち竦んでいる。私も乗り込んで、一つしかないボタンを押すと、エレベーターは降り始めた。中はそこそこ広かったが、四方をピカピカの銀色の壁が囲んで眩しかった。女二人は、その眩しさから目を逸らすように抱き合っていたが、エレベーターが止まった弾みでよろけた。そのまま二人はバランスを崩し、銀色の壁にぶつかって倒れた。互いの腹を、持っていたナイフで刺したようだった。それきり動かなくなった二人を残して、私だけ廊下に出た。私の懐には、まだ三本ナイフがある。
一番奥のドアを開けると、また男が寝そべっていたが、男ばかり四人だった。一人が、面倒臭そうに、「そこに置いていけ」と言った。私は、テーブルにナイフを三本置く振りだけして、部屋を出ようとした。すると、「二度も黙れされるバカがあるか」とえらい剣幕で、私は四人に囲まれてしまった。
「そうですか。別に構いませんよ。」と言って、私がナイフを見せると、

「何で、三本なんだ。後一本はどうした。」と、一人が、ナイフに手を差し延べながら言った。

「女の腹の中です。」

「デタラメ言うな。」

「蜘蛛の脚にしても、残り後三本ですよ。ナイフが四本あっても、仕方ないんじゃありませんか。」

「何で、蜘蛛の脚が三本なんだ。」

「蜘蛛の脚も女の腹の中です。」

「デタラメなんか聞きたくないって言ってるだろ。よく見て数えてみろ。俺達は四人なんだから、四本だ。今直ぐ、もう一本、持ってこい。」

「そう仰るんなら、そうしましょう。」と言って、私は、素速く部屋を出た。

ナイフは三本とも、私が持ったままだった。

エレベーターの扉は閉まっていて、ボタンのランプが消えていた。私は、廊下の奥から狭い階段を降りて、天井の低い入り組んだ形の広い部屋に出た。もう誰も居なかった。横を向いた壁のエレベーターの扉は、ほんの少しだけ開いていて、ボタンのランプは消えていた。扉を押し開けて中に入ると、そこは直ぐに厨房で、灯りの殆どが消されている。遠い奥の方の一ケ所だけが一際明るく、動く人の姿もあるので、そちらに向かった。三十分経ったようで、そこに、

女が戻って来ていて、刺々しく脹らんだ紙袋を抱えたまま、紺のスーツを着込んだずんぐりした皺だらけの顔の男と、笑いながら話し込んでいる。女は、私が近付くと話しを已め、私と擦れ違うようにして、エレベーターの方に向かった。私は、紙袋の中はナイフが乱雑に詰め込まれていると決め付けて、「ナイフがもう一本要るそうだ。ついでに持ってってくれ」と、女の背中に声を掛けた。それから、男の方を見て、「通じただろうか」と尋ねた。男は、「さあ、どうだか」と言って、通用口の方に向かい掛けた。私は、男に、「これで、自分の腹でも突いておけ」と言って、ナイフを一本渡した。男は、嘲笑うように私を見返し、鮮やかな手捌きで、それをスーツの胸の内ポケットに仕舞い込んだ。それが最後の一人で、厨房の中は非常灯だけになった。

　私は、女の後を追った。エレベーターは動かないので、広い部屋に出て、幾つもある階段を見回すと、女の脚が、一瞬辛うじて見えた。私は、その階段を駆け上った。廊下の一番奥のドアを開けて中に入ると、男が二人だけ居た。テーブルに向かい合って、目を輝かせている。テーブルの真ん中に置かれた大振りのコップの中で、三本脚の蜘蛛がノロノロと蠢いている。その脇には、水の缶詰も五本揃って並んでいる。さっきは、缶詰を狙って、蜘蛛の脚にナイフを突き刺してしまった。同じ失敗はしない。逆に、蜘蛛の脚を狙えば、ナイフは、缶詰の蓋に突き刺さるかも知れない。蜘蛛を目掛けて、ナイフを振り下ろすと、

蜘蛛がコップから飛び出て、ナイフは、その蜘蛛の脚に突き刺さった。蜘蛛が藻掻くと、直に脚はもげた。ナイフは、後一本しかない。蜘蛛も缶詰もダメなら、コップを狙うしかない。ドアの奥から、廊下を通り過ぎて行く女の足音が聞こえた。その音を逃れようとするかのように、蜘蛛が素速く、コップの中に入り込んだ。ナイフは、狙い通りコップに命中し、コップは粉々に割れた。そのナイフは、蜘蛛の脚を突き刺してもいて、藻掻くと、その脚ももげた。

　男二人は、蜘蛛の脚の刺さったナイフを一本ずつ持って立ち上がり、じっと体を寄せ合って、ナイフの先を擦り合わせたりした。私が、「女の後を追うべきではないか」と言うと、二人は慌てて部屋を出たが、ドアから廊下に出た所で足が縺れ、抱き合ったまま転んだ。そのまま動かないのは、互いの腹をナイフで刺したからか。テーブルの真ん中の蜘蛛は、残った一本の脚を使って、コンパスのように、同じ所を何時までも回り続けた。ナイフはやはり、後一本足らないらしい。（二〇〇二年四月二十五日）

*　*　*

縦縞

狭い部屋の真ん中で、低く小さな机に向かい、何も乗っていない机の上を見詰めていた。南側にだけある窓の外が、何時の間にか薄暗くなっている。私は、窓のカーテンを閉めようと立ち上がったが、机の脚に両足を縛り付けていて、動けない。また腰を下ろすと、机の隅が、少しだけ捲れ上がっていた。手を伸ばして爪で引っ掻くと、掌より少し大きいくらいの灰色の紙を掴み取っていた。その紙のそよがせた冷たい風が、微かに胸を撫でて、上半身が裸なのに気付いた。紙の中に、その私の姿が映り込んでいるように思えて覗き込んだが、紙の真ん中辺りが、うっすらと青く光るようなだけだ。それとも、そのうっすらと青いのが、私の姿だろうか。もう一度立ち上がると、足は、縄をするりと抜けて、窓の方に向かった。

　カーテンは、軽く触れただけで、床に落ちた。少し間を置いて、灰色の埃がゆっくりと立ち上って一筋の帯になり、床スレスレをクネクネと這いだして、机の脚に絡んだ。またそこに私を縛り付けようと、待ち構えているようでもある。窓からは、少し先に砂浜が見えて、そこまでは、草茫茫の斜面が下っている。海の色は、透き通ったまま暗くて、何も見えていないのと余り変わらない。砂浜と斜面に挟まれた白っぽい道を、誰かが歩いている。懐中電灯で照らしているらしく、足元で光りが揺れている。時々、その照らされた道の上に青く輝くものがあり、その度に立ち止まって、それを拾っているようだ。

その青く輝くものを幾つか懐に抱いた者は、砂浜沿いに海の方に曲がって行き止まった道から、取って返すように、斜面を横向きに登り始めた。一歩ごとに、危うそうに腰が左右に振れて、女だと分かった。私は、窓のもう一方の側のカーテンを引いて、半分だけ窓を覆い、机の方を振り返った。女が二人、机に向かっていて、机の上に二台並べた顕微鏡を覗いている。

「どうせ、何も見えないんでしょう。」と、私は言った。

二人は顔を上げ、揃って、真ん丸な小さな目で私を見詰めた。私は、その目に向かって、灰色の紙を翳した。窓の半分から射し込む弱い光りを受けて、紙は青く透けた。それから、机に戻り、自分の椅子に掛けて、二人と向き合った。暫くそのままで居ると、窓を叩く音がする。窓寄りの女が立って、窓を開けに行った。青く輝く石を抱えた女が、窓を跨いで入って来た。

「そんな石ころが何の役に立つんですか？」と、私は言って、紙を机の上に置いた。机の上でも紙は、青く透けるままだった。机の表面が灰色に見えた。

「石なんかじゃありませんよ。」と、女は言って、椅子に掛けて、私と向き合った。二人組の方はもう、顕微鏡を両腕で抱き抱えて、壁際に引き下がって並んで立っていた。女は、その青く輝く石にしか見えないものを、机の縁に横一列に並べてから、その端の一つだけを手に取った。「こうするんです」と言って、それを自らの目に当てると、それも私の紙とそっくりに青く透けていて、

女は、それを通して、暫く私の姿を覗き見ていた。それからそれを、青く透ける紙の上に乗せると、それは、拳大の雫であるかのように、紙の表面に吸い取られた。その紙の中を覗き込むと、そこに、女の目が一つ、映っていた。女は、端からまた青い塊を手に取って、それを目に当てて、私を見据えた。それから、それをまた紙に乗せると、それも、綺麗に紙に染み込んだ。紙の中の女の目が、二つになっている。

「二つで充分でしょう。」と、私が言うと、女は声を出して笑い、少し遅れて、壁際の二人も似たような笑い声を立てた。同じ事が繰り返され、その度に、紙の中の女の目が増えた。青く透ける中で、それらの目だけは、影を濃く含んで、透ける事はなかった。そうして、机の上に並べた青い塊が、全て紙の中に消えると、女は、棒が延びるように立ち上がった。自ずと女の目は、私の直ぐ後ろの壁に向く。釣られて、私も後ろを見た。その暗い壁に、恐らく紙の中の目の数だけ、私の姿が、影のように並んで映っているようではないか。しかし、目が慣れると、壁の表面が、青く輝いて波打っているだけだった。それとも、それが私の姿なのか。机の方を向き直り、

「石でないのなら、何なんですか？」と尋ねた。

女は黙って、窓と反対側に歩き出した。それを待っていたかのように、壁際の二人が進み出て、顕微鏡を机の上に置いた。それで机が震えると、紙の中の

青い目が、水に映るもののように、ゆらゆらと揺れた。私は、その紙を手に取って二人に翳して見せた。それを顕微鏡で覗きたいと言うのなら、端をちぎって渡してやろうか。しかし、二人は、見る間に机の下に潜り込んでしまった。顕微鏡がぴったり並んで、二つとも、私の方を向いている。両目でその両方を同時に覗き込むと、中は妙に明るくて、焦点が合ってくると、顕微鏡を覗いているのではなく、目の前にただ青く輝くものを見詰めているようだった。

「手に取っても、いいんですよ。」と、それが口を利いた。

　私は、目を上げた。またそこに、女が私と向き合って立ち、軽く頷いた。懐中電灯で、顕微鏡のレンズの先を照らしている。私はまた、顕微鏡を覗いて、その青く輝くものに手を伸ばした。しかし、手は、何処かの空を掴むだけのようで、その青く輝くものの側には、全く見えて来なかった。

「両手を使わなければダメですよ。」と言われて、私は、目の前にあるものを拝み取るようにした。

「ほら、見えたでしょう。」と言われて、私は、その青く輝くものの中に、私の両手を見付けた。両手だけでなく、私の裸の上半身が、その青い中に映り込んでいた。更に、その私の両側に、私に頬擦りするように、二人の女が身を擦り寄せている。机の下に潜った女が、私の両脇に体を出してきたのか。しかしよく見ると、その二人の体は、青く輝くものの中にではなく、それを包むよ

うにして、その外にある。
　私は、目を上げた。左右に張り付いていた二人の女が、急に立ち上がり、顕微鏡を一台ずつ抱え上げて、窓に向かった。それから、窓をガタガタと乱暴に開けて、顕微鏡を外に放り出した。顕微鏡は、草を薙ぎ倒して、斜面を何処までも転げ落ちて行くようで、二人の女は、歓声を上げてそれを眺めながら、窓に囓り付くままだった。そして、その二人の揺れ動く背中を見ている私は、部屋の真ん中に突っ立っている女の片手の中の、青い玉の中に居るのだった。女のもう片方の手には、その玉を照らす懐中電灯が握られている。
　歓声の合間の二人の言葉によると、顕微鏡は、斜面を下まで転がって、更にその先の白い道を横切り、暗い海の中に落ち、尚も海底を転がり続けて、やっと見えなくなったようだ。静かになった二人は、そこにしゃがみ込み、床に落ちたカーテンを膝に乗せて、針仕事を始めた。
　青い玉を持つ女は、その玉をそっと机の上に置き、その上に、青く透けた紙を乗せた。もう片方の手は、懐中電灯で玉を照らし続けなければならない。それから、片手だけで、ゆっくり丁寧に、玉をすっかり紙で包んだ。玉の中の私の姿は、紙の中にびっしり詰まった女の目によって、あらゆる方向から見詰められた。その数え切れない私の姿が、一繋がりになって、壁に映し出されるようだった。しかしそれは、壁一面が、その暗い奥で青く輝いて波打ち、揺れ動

いて形の定まらない縦縞を描いているだけではないか。

窓際の二人が、直したカーテンを付けて、引いた。窓全体がカーテンで覆われて、外からの光りが遮られると、壁に映っていた青い縦縞の私の姿は、呆気なく消えた。それから、二人は、机の脚に絡んだままの、カーテンから出た埃の帯を見付け、床に這い蹲ってそれに息を吹き掛け、それを、窓と反対側に押し出した。そこでもまだ埃の帯は、床スレスレをクネクネと曲がって這った。二人の女は、それを踏み付けないように、そこで巧くステップを踏んで、楽しそうに歌い踊った。ただ、私にはそれは、声と音で分かるだけで、私の周りに見えるのは、青い拡がりの中に浮かぶ、濃い影の欠片のような、幾つもの尖った女の目だけだった。（二〇〇二年四月二十七日）

*　　*　　*

波の音

硬く丸めた背を海に向けて、砂浜にしゃがみ込んでいた。爪先立てた足は埋まり込んで、砂に冷たく尻が触れる。波の音が聞こえないのが気掛かりで、後ろを振り向きたいが、しゃがんだ姿勢はすっかり固まって、立ち上がる事も体

の向きを変える事も出来ない。それなら、抱えた膝を更にきつく抱え、丸めた背中を更に丸めて、すっかり丸くなれば、風に転がされて、海の方を向けるだろうか。そうしようとしたが、すっかり丸くなるには、腹の中のものが邪魔だった。腹の中の弾力が、更に丸まろうとする力を跳ね返す。それを押し返して、先ずは中のものを吐くしかない。細く尖った音が喉から漏れ出すようだったが、私の耳では聞き取れない。ただ、それが引き延ばされて、辺りの空気を震わせ、砂浜の上を響き渡って行くようなのは分かる。首を折り込んだままで見える限りの、真っ直ぐ前の砂の遠い方に目を遣ると、そこでその響きが、微かな風のそよぎに吹き払われるのを見て取れた。喉の音はそこまでは届くのだ。しかしそれ切りだった。もう音はしない。腹の中のものはビクともせず、私は更に激しく喉の奥を波打たせて、込み上げるようにした。今にもその喉が捩れて、聞いた事もないような音を出しそうだった。それなら、喉はまだずっと、黙ったままなのだ。ついさっき風に消えた響きは、何だったのか。

　また砂の遠い方に目を遣ると、風もまた、その響きの正体を知りたがるかのように、砂の表面を微かに撫でて、私の方に流れてくる。しかし、その近付くに連れ、どうやらそれは、私を逸れて行くのだと見当が付いた。その風の行く先に目を向けようとすると、動かない筈の体が、くるりとそちらを向いた。或いはそれが、風のせいだとしたら、私の体は、吹き払われた響きと同じくらい

に軽いのか。体は、ゆっくりと前に倒れ、額が砂に擦り付けられた。

首を反らせて砂塗れの顔を上げ、見える限りの真っ直ぐ前の砂の遠い方に目を遣ると、そこで、砂に埋もれ掛けた小さな虫が一匹、腹を上にして、羽根を激しく震わせている。これが細く尖った音の出所か。しかし、私の耳では聞き取れない。そこへ風が届くと、そこで急に、砂が噴き上がった。羽根の向きが変わっていた。高く噴き上がった砂は、真っ直ぐ私に降り掛かって已む事がなく、虫がそこにみるみる大きな穴を開けてゆくに連れ、それを見詰める私の目は、すっかり砂に埋まってしまった。耳もまた砂に埋まったようで、羽根が砂を掻き出す忙しい音が、砂を通して伝わってきた。その音の中に、あの細く尖った音の響くのが、微かに紛れ込んでいるようでもある。特に砂の重みは感じられないので、丸く硬い背中だけは、砂の上からも知れないが、確かめようもない。

それでも私は、一組の男女が、砂浜に下りて来るのを眺める事が出来た。砂粒に囲まれていても、私の二つの目は、丸々と見開かれ、砂粒とも紛うようではないか。二人とも、小さな四角い紙の箱を持ち、男の箱の中は空っぽだったが、女の箱の中には蝋燭に火が点されているらしく、その灯りが二人の足元を照らしていた。二人は、私の直ぐ側に来てしゃがみ込んだ。男が、虫の掘った穴の隣に、小さな赤いスコップを突き立てた。そのスコップが跳ね上がって、

そこに、虫の掘ったのと同じくらいの穴が開き、その一度だけ掻き出された砂で、虫の掘った穴は、虫諸共綺麗さっぱり埋まってしまった。二人はそれで満足したらしく、何か言いながら立ち上がった。砂浜に明るく伸び上がるその声からして、二人ともまだ子供かも知れない。それから二人は、寄り添って歩きながら、同じような穴を掘って回った。どの穴も、暫くすると水が染み出して、小さな水面に暗い空を艶々と映し、砂浜中のあちこちに、鏡の欠片を、ばら撒いたようだ。

　砂に埋まった虫が、地中を掘り進んで、私の腹の中に入り込んだのか。全身が、その羽音でブルブルと震えるようだ。堪らずに私は叫んだ。私の喉から、あの細く尖った音が絞り出されるのが、はっきりと聞き取れた。止めたいが、喉は勝手に唸り続けた。

　空は、更に暗くなって、一番高い所に、赤い星と青い星が並んだ。それが、穴の水の上の一つ一つに映り込むと、男が一人で、その一つ一つに手を突っ込んでは、二つの星を、自分の紙の箱に入れて回った。それぞれの穴の掻き回されて揺れていた水が鎮まると、どれも中は濁って、その上にはもう何も映さない。男は、箱の中を覗き込んだが、どうやら底が水浸しなだけだった。つまらなそうな顔を女に向けて、女の箱の中の蝋燭が尽きると、二人は、二つの箱を海に流して、何処かに行ってしまった。私の喉は、唸るのを已めた。

　空からも、星は消えていた。私は、砂をはね除け、バネが弾けるように、背筋を伸ばして立ち上がれた。まるで、消えた一つ星が、私の背中を硬く丸めて、私を動けなくさせていたようではないか。私は、砂浜を駆け回って、穴を覗いていった。どれも水が引いていて、穴の底の濡れた表面が、うっすらと鈍く光るが、どれも違う色をしている。私は、何度も何度も覗いて回り、それらの色を憶え込んでいった。全ての色が頭に入ると、私は、波の音のしない海に向かって耳を澄ませた。海全体の、ほんの微かなうねりが見て取れるようで、その深い水の傾きが私の腹に染み入って、腹の中のものを揺さぶるようだった。私は、立ち尽くしたまま、込み上げてくるものの吐き出されるに任せた。腹から口までが上下に波打ち、その弾みで、出て来たものは、私の体を汚したりせずに、前に飛んだ。やっと収まって、吐き出した辺りを見たが、白い砂だけで、それらしきものは見付からなかった。恐らく、何も吐かなかったのだ。

　初めて耳にするもののように、波の音が聞こえてきた。それがまた、すっかり空っぽの私の腹を揺さぶり、その揺さぶられるままに、私は、右に左によろめいて、波打ち際まで進んだ。男の流した筈の紙の箱が、足元に打ち上げられていた。私は、濡れた砂に膝を突いてそれを拾い、中を開けて覗き込んだ。今度こそ、私は吐いた。全くの水のようだ。喉が波打ったりはしなかったが、その水の冷たさが、喉にも舌にも唇にも、確かに感じ取れた。唇は細かく震えた。

紙の箱の中が、砂の穴の底に見た、濡れて光る色にそっくりだった。そこに向かって、また水を吐くと、それはまた別の色になった。私は、憶え込んだ全ての色が、箱の中に吐き出されるまでは、吐くのを已められなかった。

沖の方で、女の流した紙の箱がポツンと浮いている。燃え尽きた筈の蝋燭の火が残っていたのか、中の灯りがチラチラと揺れて見えた。私は、波の立たない所まで水に入って、そちらに向けて、閉じた紙の箱を流した。振り返ると、砂浜の小さな穴にまた、どれも水が張っていて、その暗く艶々した表面に、赤と青の二つ星が数えきれず映っていた。背中がまた、硬く丸まってゆくようで、震える喉が、細く尖った音を絞り出すが、今度はそれを、止めるも延ばすも、耳で聞きながら思うように操れた。（二〇〇二年四月二十九日）

紙切れ、その他

著者　u_

© 2002 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published